

すな た うば ぬま い せき
砂 田 姥 沼 遺 跡

(D区)

独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区
土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の東谷・中島地区付近は、小河川による低地に刻まれた低位台地が南北に広がっています。この微高地は近年の開発により、従来からの農村風景がその姿を次第に失いつつあります。しかしその反面、この地に展開する大規模な遺跡群は、記録保存のための発掘調査により、杉村遺跡、権現山遺跡、磯岡北遺跡などの古代集落や東山道といった貴重な遺跡が複合して存在していることが確認されています。

今回、株式会社扶桑エンジニアリングの施設建設に伴い影響を受けることとなった本遺跡の取り扱いにつきましては、関係機関との協議の上、記録保存のため発掘調査を実施することとなりました。結果、古墳時代の竪穴住居跡や当時の遺物が多数確認されるなど、本地域の古墳時代集落の性格などを知る上で貴重な資料を得ること賀できたものと考えております。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方がさまざまな方面におきまして広く活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成20年 3 月

宇都宮市教育委員会

教育長 伊 藤 文 雄

例 言

1. 本書は栃木県宇都宮市東谷・中島地区51街区5画地に所在する「砂田姥沼遺跡（D区）」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社芙蓉エンジニアリングの工場建設に伴うもので、行政独立法人都市再生機構の依頼により、宇都宮市教育委員会を調査主体者とし、調査実務は同機構より委託を受けた株式会社日本窯業史研究所がこれにあたった。
3. 調査は、平成19年10月15日～同年11月19日まで野外調査を実施し、その後平成20年3月31日まで整理・報告書作成作業を行った。
4. 野外調査は水野順敏、柏崎広伸が担当し、報告書作成作業も両名が行った。第Ⅰ・Ⅲ章は水野、第Ⅱ章は柏崎が執筆し、水野が補訂した。遺物の写真撮影は新井 潔が行った。
5. 調査組織

調査主体者・宇都宮市教育委員会

調査実務者・日本窯業史研究所

伊藤文雄 教育長

調査担当者 水野順敏（日本窯業史研究所調査部長）

渡辺 卓 文化課長

調 査 員 柏崎広伸（ 〃 調査員）

大塚雅之 文化財保護グループ係長

前原義之 文化財保護グループ

6. 調査記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。
7. 野外調査から整理・報告書作成作業において下記の方々よりご助力とご教導を賜った。記して謝意を表する。（敬称略・順不同）

荒川康佑、内山敏行、岩崎 祥、後藤信祐、今平昌子、進藤敏雄、杉山 努、田代 隆、中山 晋、土生朗治、茂木孝行、(有)大藤工業、(有)さつき測量、(株)ダイショウ、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、(株)テクノ・プランニング、東京レンタル(株)

調査・整理作業参加者

稲毛 清、後藤ゆかり、佐藤達男、鈴木 清、鈴木タミ、福富 準、松村民子、森脇一也

凡 例

1. 本遺跡の略号は、UT—SU—Dで、遺物の注記はこれによる。また、遺構の略号は、SI（竪穴住居跡）、SB（掘立柱建物跡）、SE（井戸跡）、SK（土坑）、SD（溝跡）、P（小穴）、PT（住居柱穴）である。
2. 第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図『宇都宮東部』、『上三川』を部分複製したものである。
3. 遺構実測図の縮尺は、住居跡、土坑等が1/60、カマドは1/30、掘立柱建物跡1/80、遺物実測図は原則として1/3としたが、大型土器は1/4、金属製品・石製品は1/2である。
4. 遺構図面上の北の方位は、座標北を示す。土層図、断面図の水準線の数値は、海拔標高を示す。
5. 挿図の遺物番号は本文中及び写真図版の番号と合致する。写真図版は○—□の前が挿図番号、後が遺物番号である。
6. 遺構図面で使用したスクリーンパターンは以下の通りである。



灰色・灰黄色粘質土



焼土・焼面

7. 住居跡の平面図中、●は土器、▲は金属・石製品の出土位置を示し、ゴシックの数字は遺物番号である。

目 次

序	
I はしがき	
1. 調査に至る経緯と経過	7
2. 遺跡の位置と環境	7
3. 調査の方法と基本土層	10
II 遺構と遺物	
1. 竪穴住居跡	12
2. 掘立柱建物跡	37
3. 小穴	39
4. 土坑	39
5. 井戸跡	44
6. 溝跡	44
7. 調査区内出土遺物（その他の出土遺物）	46
III まとめ	
1. 遺構・遺物の特徴	49

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	第9表 SI10遺物観察表
第2表 SI1遺物観察表	第10表 金属・石製品観察表
第3表 SI2遺物観察表	第11表 編物錘石計測表
第4表 SI3遺物観察表	第12表 小穴計測表
第5表 SI4遺物観察表	第13表 小穴・土坑・井戸跡遺物観察表
第6表 SI5遺物観察表	第14表 その他の遺物観察表
第7表 SI6遺物観察表	第15表 栃木県内の耳環出土住居跡一覧表
第8表 SI7遺物観察表	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置と周辺遺跡	第10図 SI2出土遺物
第2図 調査区位置図	第12図 SI3
第3図 基本土層図	第12図 SI3掘方・カマド
第4図 調査区全体図	第13図 SI3出土遺物
第5図 SI1・掘方・カマド	第14図 SI4・掘方
第6図 SI1出土遺物（1）	第15図 SI4カマド
第7図 SI1出土遺物（2）	第16図 SI4出土遺物
第8図 SI2・掘方	第17図 SI5
第9図 SI2カマド	第18図 SI5出土遺物

第19図 SI6・掘方・カマド
第20図 SI6出土遺物
第21図 SI7・カマド
第22図 SI7出土遺物
第23図 SI8・9・10、SI10出土遺物
第24図 金属・石製品
第25図 SB1・3・4

第26図 SB2a・2b
第27図 土坑・井戸跡
第28図 小穴・土坑・井戸跡出土遺物
第29図 その他の遺物
第30図 耳環出土住居跡の規模比較図
第31図 調査区出土錘石の大きさ・重量比較図

図 版 目 次

- 図版1 A. 調査区全景（北より） B. 調査区全景（南西より）
図版2 A. SI1（南より） B. SI1（東より） C. SI1遺物出土状態（南より） D. SI1カマド（南より） E. SI1カマド（南より） F. SI1カマド掘方（南より） G. SI2（南より） H. SI2掘方（南より）
図版3 A. SI2カマド（南より） B. SI2紡錘車出土状態 C. SI3（南より） D. SI3掘方（南より） E. SI3カマド掘方（南より） F. SI3耳環出土状態 G. SI4（南より） H. SI4掘方（南より）
図版4 A. SI4カマド（南より） B. SI4貯蔵穴（南より） C. SI4カマド横断面（南より） D. SI4カマド掘方（南より） E. SI6（南より） F. SI6掘方（南より） G. SI6カマド（南より） H. SI6カマド掘方（南より）
図版5 A. SI7（南より） B. SI7PT2の柱当（南より） C. SI7カマド（南より） D. SI7カマド掘方（南より） E. SI8（上）・SI9（下、南より） F. SI8土層（北より） G. SI5（南東より） H. SI10（東より）
図版6 A. SB1（南より） B. SB1P14土層（西より） C. SB2a・b（北より） D. SB2P56土層（北より） E. SB2bP94・SB2aP95土層（南西より） F. SB3（北より） G. SE1土層（西より） H. SE1（西より）
図版7 A. SK1（西より） B. SK2（北より） C. SK3（北より） D. SK4（東より） E. SK5（北より） F. SK7（左）・SK8（右、北より） G. SK10（北より） H. SK13（東より）
図版8 SI1～3出土土器
図版9 SI4～7、その他の出土土器
図版10 SI1～5・7出土土器
図版11 金属・石製品

I はしがき

1. 調査に至る経緯と経過

栃木県宇都宮市において、独立行政法人 都市再生機構(以下都市再生機構)が施行する宇都宮都市計画=東谷・中島土地地区画整理事業地「東谷・中島地区51街区5画地」に株式会社芙蓉エンジニアリング(以下事業主)により工場建設が計画された。当街区には埋蔵文化財包蔵地の砂田姥沼遺跡が所在する。遺跡は街区全体に及ぶものではなく、包蔵地と地区外とが入り組んだ状態で想定され、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター(以下県埋文S)、宇都宮市教育委員会(以下市教委)により部分的調査が行われている。今次調査区の5画地も南東部は包蔵地外となっているが、西側の包蔵地に工場建設が計画されている。

そこで、都市再生機構、市教委、事業主の協議により、工場建設予定地に対し試掘調査を実施し、遺跡の状況を把握することとなった。平成19年8月30・31日の両日、市教委が試掘調査を行った結果、2本のトレンチより、古代の竪穴住居跡2軒、土坑8基、溝跡2条などが確認され、発掘調査が必要とされた。調査対象地は約12m×39mの約600㎡で、南北に細長い長方形である。

発掘調査は、市教委を調査主体者とし、調査実務は都市再生機構より委託を受けた株式会社日本窯業史研究所がこれにあたった。

現地調査は平成19年10月15日より開始し、調査過程で再三市教委により現地指導を受け、同年11月19日に終了立会いを受けて同日すべての作業を終了した。

調査の結果、古墳時代中期～同後期にわたる竪穴住居(建物)跡10軒を確認し、部分的なものも含め8軒調査した。2軒はかろうじて盛土保存が可能な位置にあり平面確認に留めた。

掘立柱建物跡として想定できたのは僅かに4棟であったが、多数の小穴が確認されており、本来はさらに多かったと推察された。この他、井戸跡、土坑、溝跡などを確認したが、土坑の一部を除き中世・近世以降の施設と推察された。遺物は、古墳～奈良時代の土師器を主体とし、極少量の須恵器、金銅製耳環、鉄片、石製紡錘車、砥石、編物錘石などが出土している。

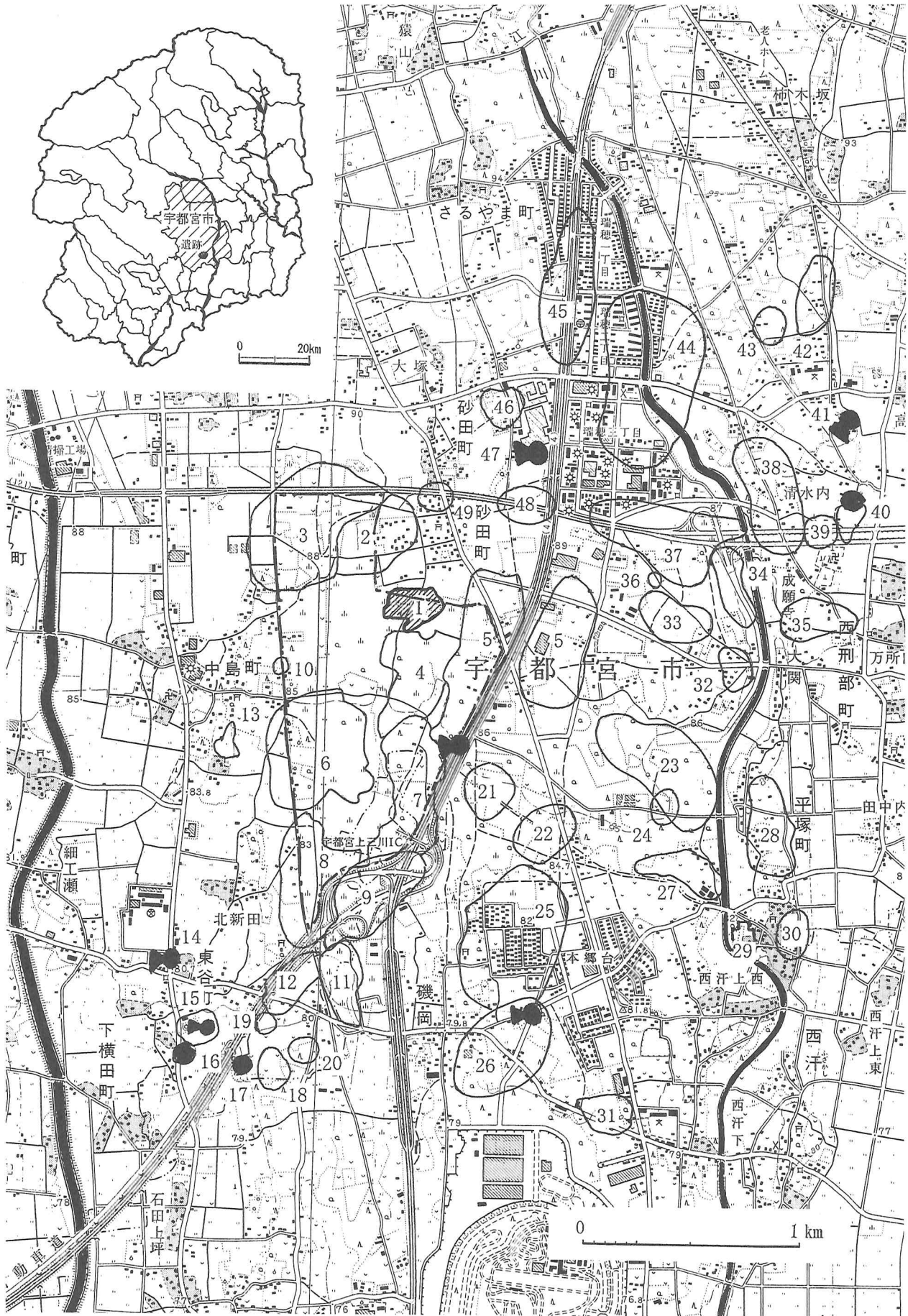
整理・報告書作成作業は調査終了直後より開始し、平成20年3月まで実施した。

2. 遺跡の位置と環境

本遺跡の所在する宇都宮市は、栃木県の中央やや南寄りに所在する。本県は東・西・北の三方を山地に囲まれ、その中央を南北方向に平地部が延びる。この平地部は那珂川、鬼怒川等の河川の流域となっており、宇都宮市の東寄りを鬼怒川が南流し、市域の中央部にはその水系の田川が同じく南流する。これらの河川に沿って、低地と田原・宝木・岡本・宝積寺の各台地が南に向かって細長く延び、これらの台地は中・小の河川により樹枝状に開析されている。本遺跡は標高86m程の田原台地に立地しており、台地と小枝谷が複雑に入り組んでいる。

かつては、水田や畑地がひろがり、広葉樹の平地林が点在する田園地帯であったが、前述の如く現在は大規模な土地地区画整理事業が施行され、大型商業施設や各種の工場、宅地建設が進んでおり、その景観は急激に様変わりした。

交通的には、JR宇都宮駅の南方約7kmに位置し、東方約0.5kmを新4号国道が南北に延び、北東約0.7kmでこれに宇都宮環状線(国道121号)が交差し、南方約1.1kmには北関東自動車道の上三川イン



第1図 遺跡位置と周辺遺跡

ターが設けられるなど交通の要衝である。

本遺跡の所在する宇都宮市南部から上三川町北部にあたるこの地域は遺跡の密集する地域として知られている。ことに、近年においては前述の如き道路網の整備や区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が重ねられ、その実態がより鮮明になってきた。今次調査区を含む、東谷・中島土地区画整理事業地内においても、県埋文Sによる長年の調査により、約137haの地区内に10ヶ所の遺跡と2ヶ所の古墳群が確認・調査されている。周辺の主な遺跡を第1図、第1表に示した。

尚、当該51街区も県埋文S、市教委により断続的に調査が続けられており（第2図）、今次調査は市教委による第4次調査でD区とした。

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時期
1	砂田姥沼遺跡	集落跡	古墳中期～平安時代
2	砂田滝遺跡	遺物散布地	古墳・奈良時代
3	砂田遺跡	集落跡など	縄文早期の遺物散布地、古墳中・後期・奈良・平安の集落、近世の墓域、時期不明の道路状遺構
4	中島笹塚遺跡	集落・古墳群	古墳～平安の集落、古墳時代
5	西刑部西原遺跡	集落跡	縄文の遺物散布地、古墳・後期～平安時代
6	立野遺跡	集落跡	旧石器時代の遺物包含層、縄文早～後期・弥生・古墳中・後期・奈良末平安初・中近世
7	杉村遺跡	遺物散布地	縄文～古墳（中期中心）
8	権現山遺跡	集落跡	弥生・古墳中期～奈良時代
9	杉村遺跡	〃	縄文～平安時代
10	赤沢高塚群遺跡	高塚	江戸時代（供養塚？）
11	杉村遺跡	No.7と同じ	No.7と同じ
12	原遺跡	集落跡	古墳中期～後期
13	芋内遺跡	集落跡	奈良時代
14	双子塚古墳	古墳	前方後円墳
15	笹塚古墳	〃	前方後円墳（中期5C第3四半期かやや古い）
16	鶴舞塚古墳	〃	円墳（笹塚より新しいと推定）
17	松の塚古墳	〃	円墳（6C初頭）
18	権現塚古墳群	古墳	古墳中期後半～後期初頭
19	原古墳群	〃	円墳2基
20	車塚古墳群	〃	円墳5基
21	西沼遺跡	集落跡	奈良・平安時代
22	内野遺跡	〃	古墳～平安時代
23	古屋原高塚群	高塚	江戸時代
24	不動堂遺跡	集落跡	奈良・平安時代
25	西赤堀遺跡	遺物散布地	旧石器時代・縄文時代
		古墳	古墳後～終末期6C後半円墳2基・7C初前方後円墳2基
		墓域	古墳後～終末期方形周溝遺構11基
		集落	奈良・平安時代（8C後半～9C初）
26	磯岡・西刑部の古墳群	古墳	古墳5基（後期）
27	屋敷東浦愛宕塚古墳	〃	前方後円墳（後期）
28	下小屋原遺跡	集落跡	奈良・平安時代
29	平塚原根岸遺跡	〃	古墳～平安時代
30	高島館跡	城館跡	中世（高島右京守築城）
31	南浦遺跡	集落跡	縄文・奈良時代
32	西赤堀東遺跡	〃	古墳～平安時代
33	後尚塚遺跡	〃	奈良・平安時代
34	中道遺跡	集落跡	〃
35	榎戸遺跡	〃	〃
36	大関高塚群	高塚	江戸時代高塚2基
37	大関台遺跡	集落跡	奈良・平安時代
38	藤腰遺跡	〃	古墳～平安時代
39	成願寺遺跡	集落跡	古墳中後期
		古墳群	古墳時代後期7C
41	飯塚古墳	古墳	前方後円墳（後期）
42	根本西台古墳群	〃	円墳2基
43	桑島台古墳群	〃	円墳5基
44	瑞穂野団地遺跡	集落跡	旧石器～平安時代
45	猿山遺跡	古墳	円墳2基
46	猿山遺跡	集落跡	奈良・平安時代
47	下桑島西原古墳群	古墳	古墳時代後期円墳2基、埴輪棺2基
		墓域	方形周溝遺構1基
48	南原古墳	古墳	前方後円墳
49	上横田A遺跡	集落跡	古墳後期・平安時代（9C）
49	砂田東遺跡	〃	古墳・奈良時代

3. 調査の方法と基本土層 (第2・3図)

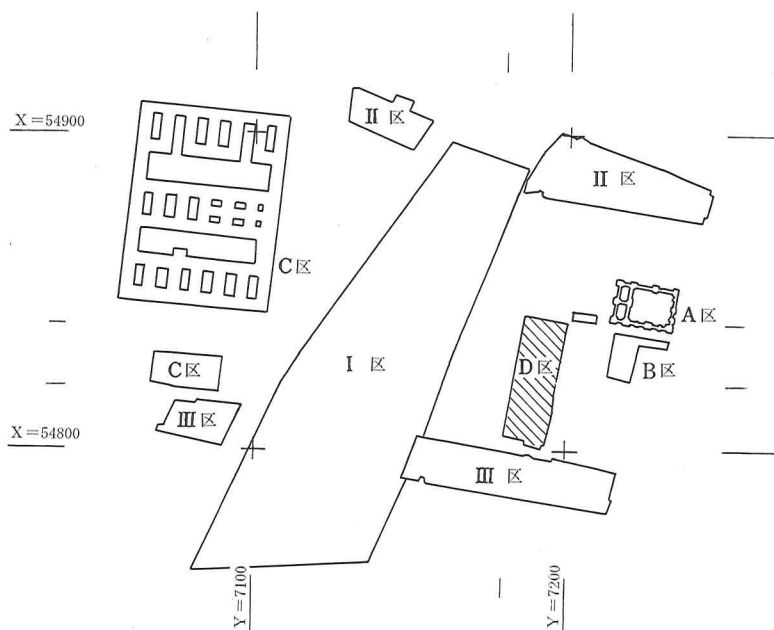
調査区は、東西約12m、南北約39mと南北に細長く、現状では工事に伴う整地により、南から北に向かって緩やかに高くなっていた。しかし、表土を除去した結果ほぼ平坦な地形であることが判明した。したがって、北側は、現地表面から遺構確認面まで45cm程であったが、南側は厚さ20～25cmの整地土を除くと遺構が確認でき、遺構の上部が削平された状態であった。

調査は重機により表土を除去後、人力による遺構確認と遺構の調査作業を行った。並行して写真撮影・実測作業を行った。比較的水はけが悪く、台風の通過後の竪穴住居跡はプール状態になった。また、いずれの住居跡も改修・建て替えにより床面を再三高上げしており、これに連動してカマドの造り替えも行われていた。

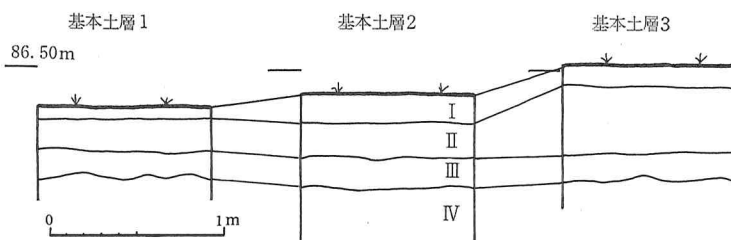
遺構の実測はトータルステーションと人手で行い、全体図はこれらの図面より作成した。写真撮影は、個々の遺構には三脚及び大型脚立を利用したが、全景写真は高所作業車(24m級)を使用した。

調査の基準となる区画は、県埋文Sにより設けられた、事業地区全体を網羅する区画に準拠し、今次調査区は20m方眼の101—39、102—39区に相当する。座標値は第4図に示した。

調査区は前述のとおり、地表面は北から南に向かって下降しているが、地山はほぼ平坦であり遺構確認面までの堆積状況が位置により異なる。したがって、調査区の南端、北端と中程の3か所の基本土層を以下に図示する。

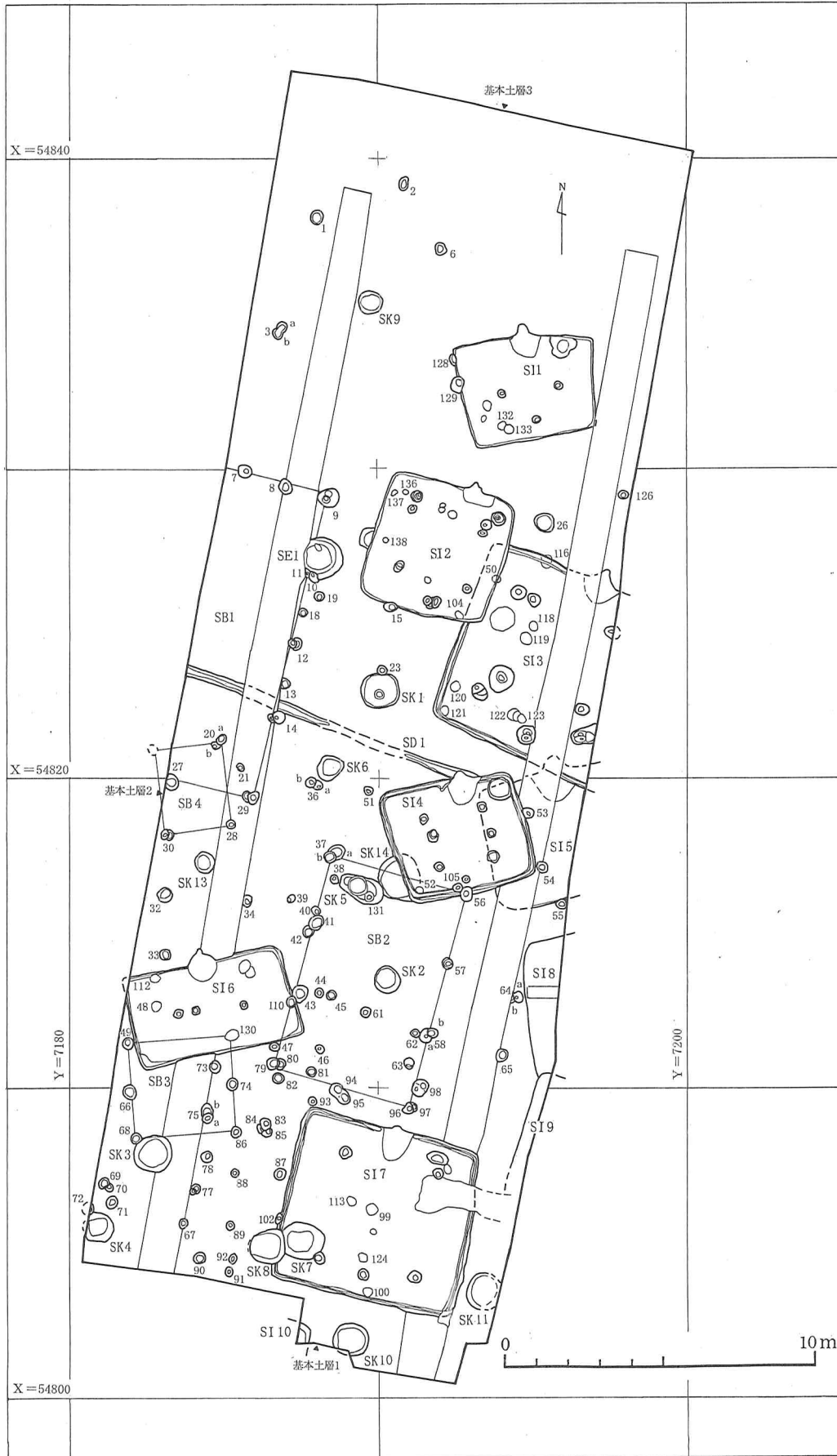


第2図 調査区位置図



第3図 基本土層図

- 基本土層
- I 整地層(碎石混じり)
 - II 耕作土
 - III 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒(ϕ 1~3mm)10%、ローム塊(ϕ 4~20mm)5%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。ローム漸移層。
 - IV 黄褐色土(10YR7/8) ローム層



第4図 調査区全体図

II 遺構と遺物

今次調査で確認・調査した遺構は、古代の竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡4棟、小穴85口（掘立柱建物跡の柱穴を除く）のほか、土坑12基、井戸跡1基、溝跡1条などである。このうち、土坑の一部や井戸跡、溝跡などは中・近世の所産と推察される。遺物は、古墳時代後期の土師器を主体とし、少量の須恵器や、鉄製品、金銅製品、石製紡錘車、砥石、編物錘石、中期の土師器が出土した。また、遺構は確認できなかったが、縄文式土器片、石片、弥生式土器片なども見られた。

1. 竪穴住居跡

今次調査では総数10軒の竪穴住居跡を確認した。このうち、工事の影響を受けない2軒は平面確認に留め他の8軒を調査した。これらの住居跡は調査区の中央付近より南寄りに分布し、東寄りに集中する傾向が見られた。

SI1

遺構（第5図、図版2）

調査区の北東部に位置し南1mにSI2が隣接する。

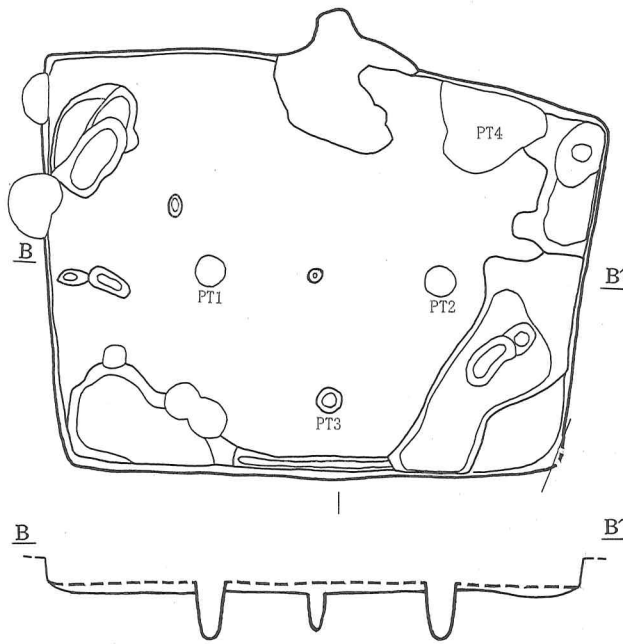
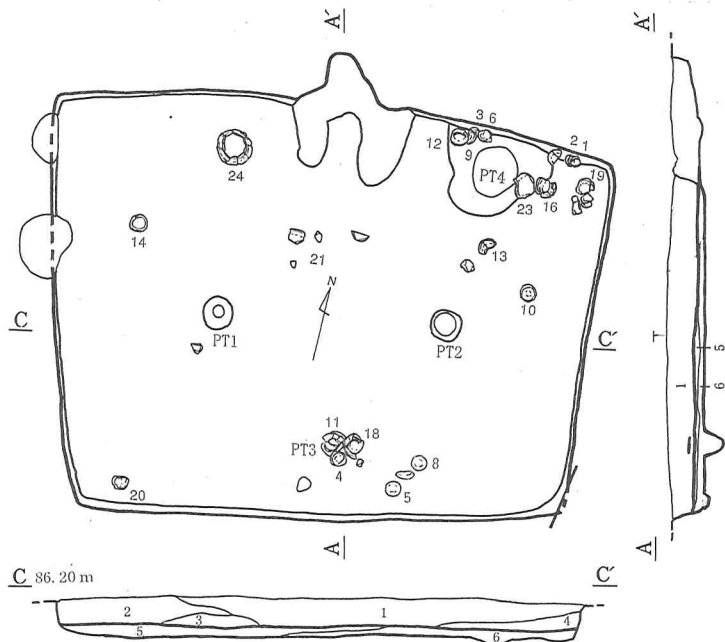
平面は、東西長3.8～4.5m、南北長2.8～3.3mの不整長方形で、北と西がやや広い。北壁のカマドを通る主軸方位はN-9°-Wである。壁は現存高20cmでほぼ直立する。床面はローム層中にあり、掘りの後黒色土混じりのローム土で整地しているが、改修により嵩上げして貼床されていた。最終時の床面は当初の床面より7cm程高く、ほぼ平坦で堅く締まっていた。壁溝は認められなかった。主柱穴は長軸線上に並ぶ2口（PT1・2）で、径23～25cmの円形、深さ45～47cmであった。南壁際に確認したPT3は、径20cmの円形、深さ15cmで、出入口の施設と考えられる。北東隅・カマド右脇のPT4は、70×85cmの不整円形、深さ32cmで、埋積土中より多数の土師器片が出土し、所謂「貯蔵穴」と判断される。他の小穴は本跡に伴わないもので、獣の巣穴と思われるものも数口見られた。カマドは北壁のほぼ中央を、幅27、奥行55cm程の三角形に掘り込み、灰色粘土で構築されていた。また、本跡は焚口

SI1

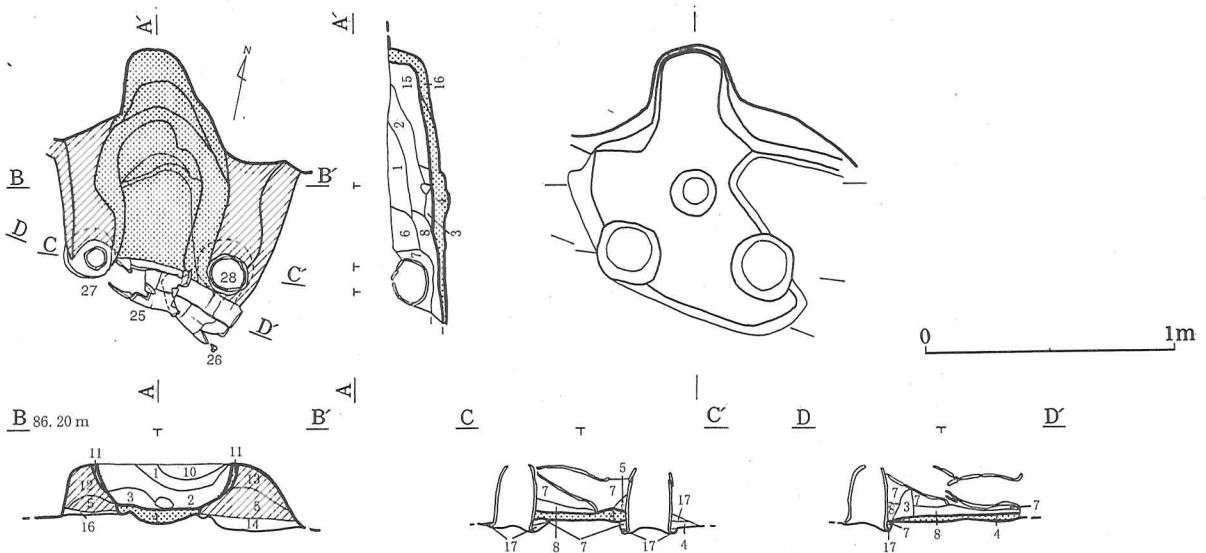
1. 黒褐色土（10YR2/2） ローム粒（φ1～3mm）15%、ローム塊（φ4～8mm）3%、ローム・ブロック（φ10～40mm）1%、焼土粒（φ1～7mm）1%、炭化物粒（φ1～3mm）1%、第3層ブロック（10YR2/3）（φ20～30mm）を少量含む、やや軟質で粘性はなく締りは弱い。
2. 黒褐色土（10YR2/3） ローム粒（φ1～3mm）20%、ローム塊（φ4～15mm）7%、焼土粒（φ1～3mm）微量、炭化物粒（φ2～4mm）微量を含む、やや軟質で粘性はなく、締りは極めて強い。
3. 黒褐色土（10YR2/2） 1とほぼ同質であるが、間に2層が入っている為別層とした。
4. 第1層と同様だがローム・ブロックが多く含まれている。
5. 黒褐色土（10YR2/2） ローム粒（φ1～3mm）10%、ローム塊・ブロック（φ5～20mm）5%、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
6. 黒褐色土（10YR2/2） ローム粒（φ1～3mm）5%、層状にロームが混入している。やや軟質で粘性はなく締りは強い。第5層と類似する。

SI1カマド

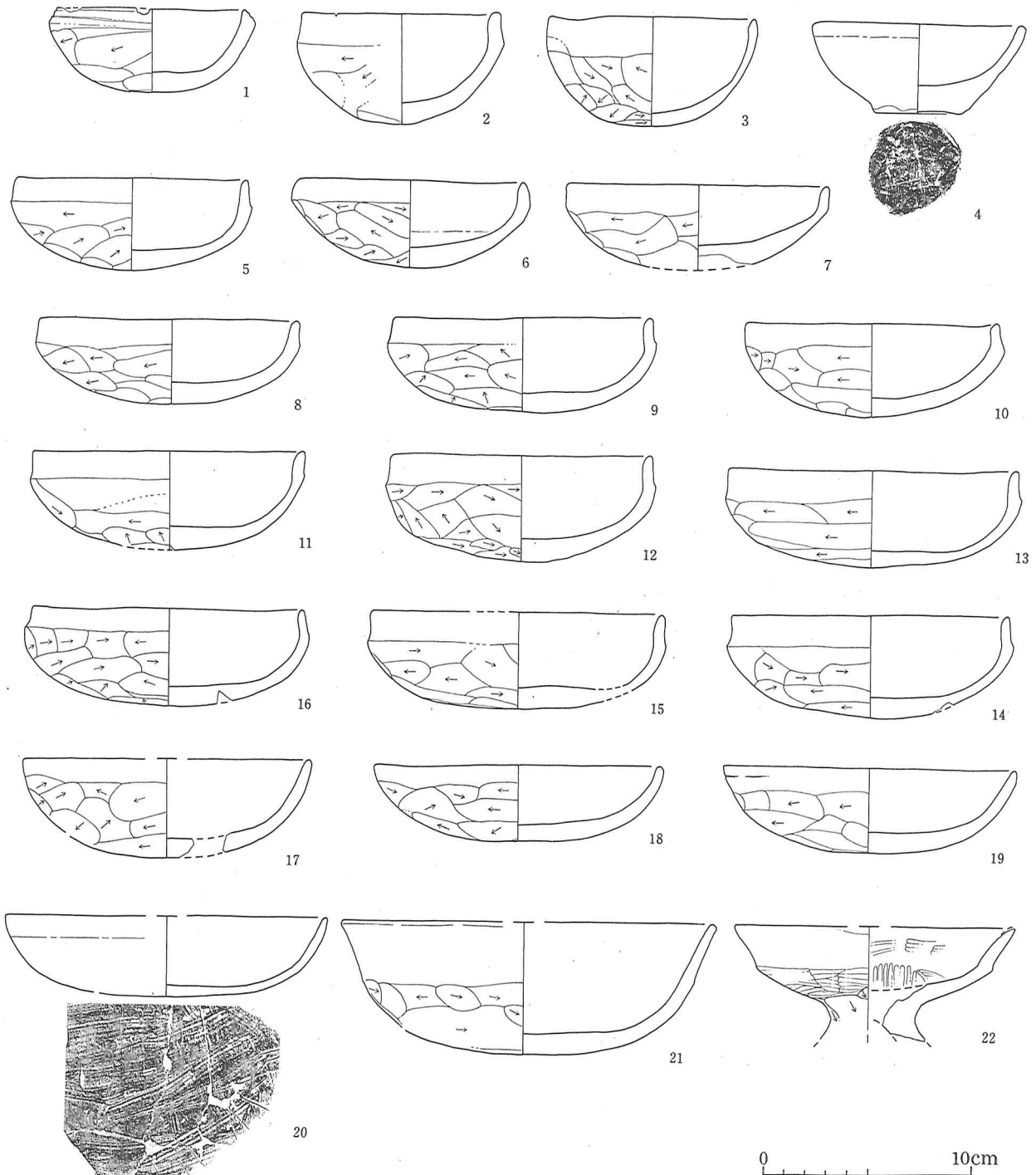
1. 灰黄褐色粘質土（10YR5/2） 焼土粒（φ1～3mm）微量含む、粘性は弱く締りは強い。
2. 灰黄褐色粘質土（10YR5/2） 焼土粒・塊（φ1～10mm）15%、炭化物粒（φ1～3mm）微量含む、粘性は弱く、締りは強い。天井の崩落と思われる。
3. 灰黄褐色粘質土（10YR6/2） 焼土粒（φ1～3mm）微量、炭化物粒（φ1～2mm）微量含む、やや軟質で粘性は弱く、締りは並。
4. 橙色（5YR7/8） 焼土層 熱を受けてカサカサしている。締りは強い、炭化物の堆積が20%程見られる。
5. 灰黄褐色粘質土（10YR6/2） 袖でやや軟質で粘性は弱く、締りは強い。
6. 灰黄褐色粘質土（10YR6/2） 焼土粒・炭化物粒が微量含む、やや軟質で、粘性は弱く、締りは強い。
7. 黒色土と灰黄褐色粘質土（10Y5/2）の3：7の混合土 やや軟質で粘性は弱く、締りは強い。
8. 黒色土（10YR2/1） ローム粒（φ1～3mm）1%、焼土粒（φ1～3mm）1%含む、締りは並。
9. 4と炭化物4：6の混合土 粘性はなく、締りは並。
10. 褐色土（10YR4/1） 焼土粒（φ1～3mm）、炭化物粒（φ1～3mm）共に1%含む、やや軟質で粘性は弱く、締りは並。
11. 明赤褐色土（5YR5/6） 袖の上位の粘土が熱を受けて赤化し、硬化して締りは強い。
12. 灰褐色土（7.5YR5/2） 熱を受けてやや赤みを帯びる。粘性はなく、締りは極めて強い。
13. 12と黒色土の7：3の混合土 ローム粒（φ1～3mm）微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
14. 黒色土（10YR2/1） ローム粒・塊（φ1～9mm）15%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
15. 4と同様だが炭化物の堆積が見られない。
16. 12とほぼ同質。
17. ローム埋め戻し。



第5図 SII・掘方・カマド



の両袖に各1、庇部分に2、計4個の長胴形の土師器甕を構築材として使用していた。両袖の甕は倒位で原位置を保っていたと判断されるが、庇部分の2個は手前にずらされた状態であり、支脚が遺存しなかったことから、住居の廃絶時に部分的に破壊されたと推察される。カマドは焚口部での幅（内法）35cm、煙道までの奥行は約86cmであった。焚口袖部の土師器甕は最終時には床面より6~7cm程埋まった状態であった。焚口の高さを調整するための埋め込まれたものか、床面の改修前より継続利用されたものかは判然としない。また、カマドの下部に明瞭な掘り込みは認められなかったが、支脚を支えたと思われる径18、深さ6cmの小穴を確認したが、カマド内はおろか、周辺にも支脚材は認められなかった。



第6図 SI1出土遺物 (1)

埋積土は、黒褐色土にローム粒・塊の他、炭化物粒、焼土粒を含み人為的埋没と判断される。

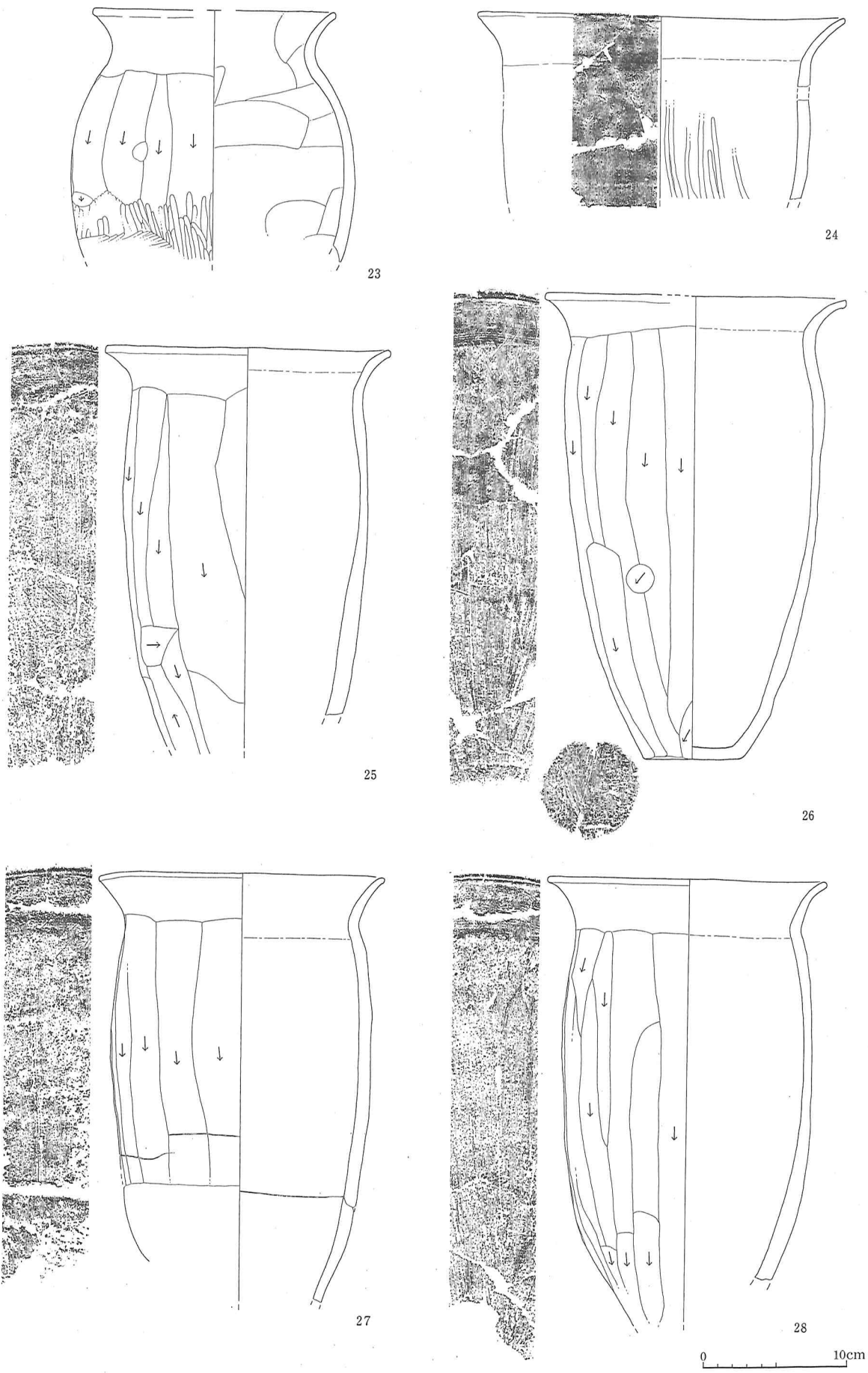
遺物（第6・7・23図、図版8・10、第10・11表）

カマド及び貯蔵穴の周辺より多数の土師器が出土したが、カマド構築材として利用された長胴甕以外はほとんど坏類で、完形・略完形のもものが20点ほどに及ぶ。なお、カマド西脇の床面上より大形甕の上半部のみが倒位で出土している。なお、完形の坏類の底部などに火熱によるひび割れが見られた。

第2表 SI1遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土、e = 焼成、f = 色調

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	土師器 坏	a 9.0 b 4.0 c -	95%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り後ミガキ 内：横ナデ、後ミガキ	d 砂粒、赤色粒少量、角閃石微量含む e 良好 f 外淡橙、内黒	床直 No.2の 上に重なる。	
2	土師器 坏	a 9.6 b 5.3 c -	95%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒混和 e 良好 f 外淡黄橙	床直 No.1の 下で重なる	漆処理、器面荒れる
3	土師器 坏	a 10.0 b 5.2 c -	90%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：不明	d 粗砂粒多量混和 e ややあまい f 外淡黄、内黒	貯蔵穴 No.9 の下で重なる	器面荒れる
4	土師器 碗	a 10.4 b 4.3 c 4.2	100%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒混和 e 並 f 淡黄橙	床直	漆処理、口辺・内 底面にひび割れ
5	土師器 坏	a 11.2 b 4.4 c -	100%	外：口辺部横ナデ、体・底部ナ デ 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和 e 良 f 淡橙	床直 No.8と 並んで出土	漆処理
6	土師器 坏	a 10.6 b 4.1 c -	95%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和、長石、角閃石微量含む e 良 f 淡橙	貯蔵穴	口辺にひび割れ
7	土師器 坏	a 13.0 b 4.1 c -	95%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和 e 良好 f 淡橙	床直	一部に煤付着、底 部中央にひび割れ
8	土師器 坏	a 12.6 b 4.1 c -	100%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量、赤色粒少量混和 e 良好 f 淡橙	床直 No.5と 並んで出土	
9	土師器 坏	a 12.6 b 4.6 c -	95%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和、長石微量含む e 良好 f 淡橙	貯蔵穴 No.3 の上に重なる	漆処理
10	土師器 坏	a 12.4 b 4.4 c -	100%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和 e 良好 f 淡橙	床直	口辺にひび割れ
11	土師器 坏	a 13.2 b 4.7 c -	98%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ後底面ミガキ	d 粗砂粒多量混和、長石、角閃石微量含む e 良好 f 淡橙	床直	底面中央にひび割 れ
12	土師器 坏	a 12.8 b 5.1 c -	100%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 砂粒少量混和、角閃石微量含む e 良好 f 淡橙	貯蔵穴	漆処理、PT-1
13	土師器 坏	a 14.0 b 4.6 c -	90%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 砂粒、赤色粒少量混和 e 良好 f 淡橙	床直	一部に煤付着
14	土師器 坏	a 13.0 b 4.7 c -	98%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和 e ややあまい f 淡黄橙	埋上層	内面の器面荒れ る、底面中央にひ び割れ
15	土師器 坏	a 14.2 b 4.6 c -	75%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量、赤色粒混和 e 良好 f 淡橙	貯蔵穴	一部に煤付着、底 部中央にひび割れ
16	土師器 坏	a 13.6 b 4.9 c -	80%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒混和、雲母少量含む e 良好 f 暗褐	床直	漆処理、底面中央 にひび割れ
17	土師器 坏	a (13.1) b 4.7 c -	40%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和 e 良好 f 淡橙	カマド内	
18	土師器 坏	a 14.0 b 3.6 c -	100%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り後ミガキ 内：横ナデ、後粗いミガキ	d 粗砂粒多量混和 e 良好 f 暗褐	中層	底面にひび割れ
19	土師器 坏	a 14.4 b 4.1 c -	70%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 砂粒・赤色粒少量混和 e 良好 f 外橙 内黒	床直	漆処理、口辺外面 粘土接合痕
20	土師器 坏	a (15.4) b 3.9 c -	50%	外：口辺部横ナデ、体・底部へ ラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒少量、赤色粒微量混和 e 良好 f 暗褐	埋中層	



第7图 SI1出土遗物 (2)

21	土師器鉢	a (17.6) b (6.4) c —	70%	外：口辺部横ナデ、体・底部ヘラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和、長石、雲母微量含む e ややあまい f 外淡橙、内黒	床直	漆処理、内の器面荒れる
22	土師器高坏	a (13.0) b c	20%	外：口辺部横ナデ、後全体に横位のミガキ 内：口辺部横位、体・底部は縦位のミガキ	d 粗砂粒混和 e 良好 f 外口辺と内黒、外体淡橙	埋上層	黒色処理
23	土師器甕	a 17.2 b c	20%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り、体部中位縦・横のミガキ 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和、角閃石微量含む e 良好 f 淡橙	貯蔵穴	一部に煤付着
24	土師器甕	a 26.0 b c	45%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り 内：口辺部横ナデ、体部縦のミガキ	d 粗砂粒多量、赤色粒少量混和 e 良好 f 淡黄橙	床直	煤付着
25	土師器甕	a 20.0 b c	75%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り 内：口辺部横ナデ、体部横のヘラナデ	d 粗砂粒多量混和、長石、角閃石微量含む e 良好 f 淡橙	カマド庇右側	
26	土師器甕	a 21.3 b 32.2 c 6.8	95%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り 底面ヘラ削り 内：口辺部横ナデ、体部横のヘラナデ	d 粗砂粒多量混和、長石、角閃石微量含む e 良好 f 淡橙	カマド庇左側	
27	土師器甕	a 20.0 b c	90%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り 内：口辺部横ナデ、体部横のヘラナデ	d 粗砂粒多量混和 e 良好 f 淡黄橙	カマド右袖芯	
28	土師器甕	a 19.6 b c	90%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り 内：口辺部横ナデ、体部横のヘラナデ	d 粗砂粒多量混和、長石、角閃石微量含む e 良好 f 淡黄橙	カマド左袖芯	

SI2

遺構（第8・9図、図版2・3）

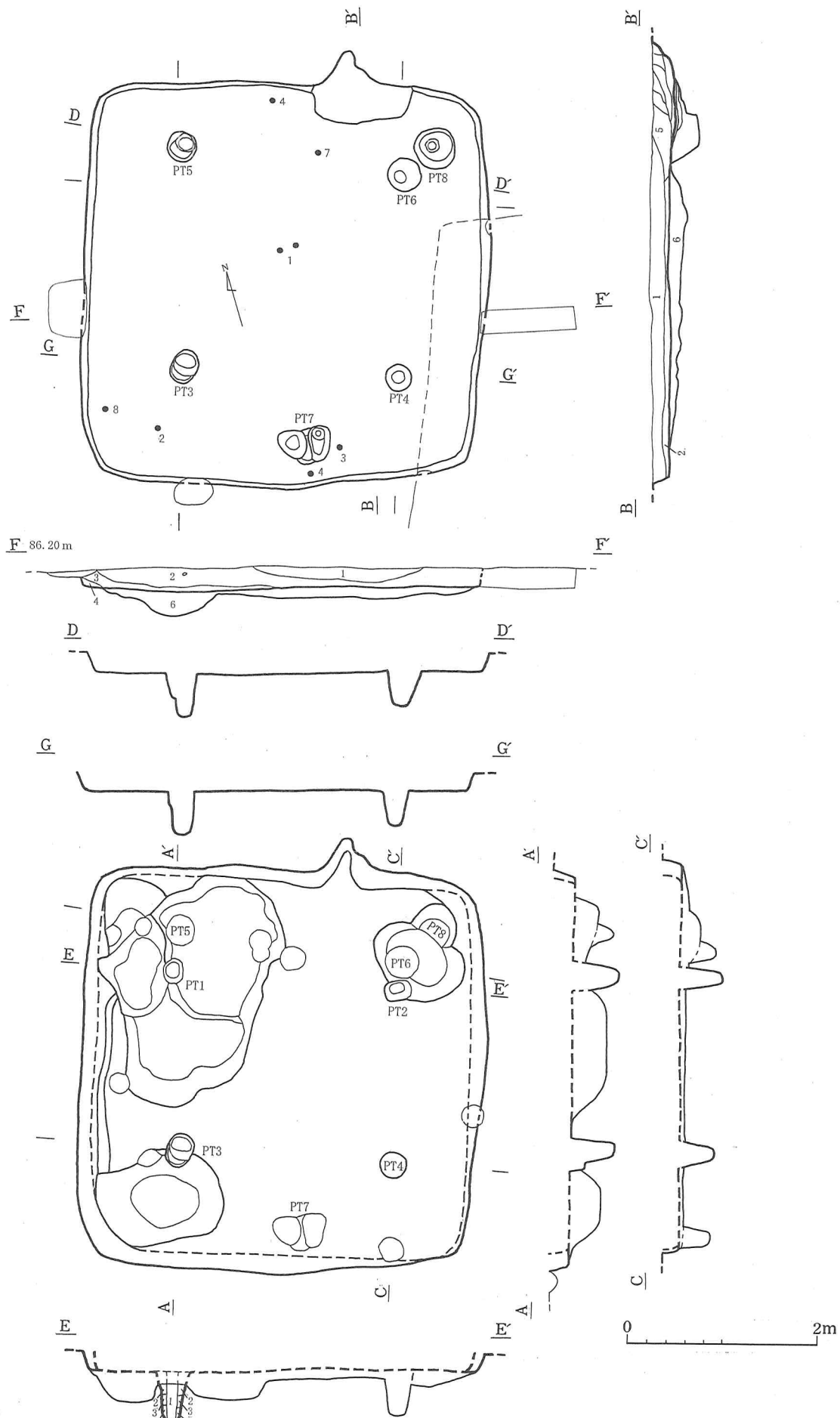
調査区の中央やや北寄りに位置し、南西部がSI3と重複してこれを切り、北約1mにSI1、西約1.5mにはSE1が隣接する。

平面は、東西約4.3、南北約3.9～4.3mのほぼ方形である。北壁のカマドを通る主軸方位はN—18°—Eを示す。壁は現存高18cmで、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、粗掘り後、黒褐色土混じりのローム土で整地して床面を貼っていた。また、改修により床面を嵩上げて貼床しており、最終時の床面は当初より約17cm程高い位置にあり、ほぼ平坦で堅く締まっていた。壁溝は認められなかった。支柱穴は、PT3～6と推定され、径27～35cmの円形、深さ38.7～44cmで、PT5・6がやや浅かった。また、床面下の調査においてPT5、6の南側に隣接してPT1、2の2口確認した。径20～30cmの円形、深さ37～39cmで、当初の北側支柱穴と推定される。竪穴の壁と柱穴の位置関係から見ると、PT1、2のほうが自然であり、PT5、6は壁に寄り過ぎに感じられる。上屋の構造は北に拡張したが、カマドのある竪穴北壁は改造しなかったと推察される。南壁際に確認したPT7は出入口の施設と考えられるが、2口の重複が認められ、西寄りの7aは径30cmの円形、深さ32cm、東寄りの7bは径45×20cmの楕円形、深さ37cmで、新旧関係は不明。北東隅のPT8は径42cmの円形、深さ24.5cmで、貯蔵穴と推定される。また、南壁西寄りの外に接するP115、南東部の壁際のP104は後世のものと判断される。カマドは北壁の中央やや東寄りに、壁を幅45、奥行50cm程を三角形に切り込み灰色粘土で築かれていた。支脚は遺存せず、右（東）側の袖部が押し潰されたような状態で見られたことから、住居の廃絶時に破壊された可能性が高い。したがって、カマドの本来の規模は明確にし難い。

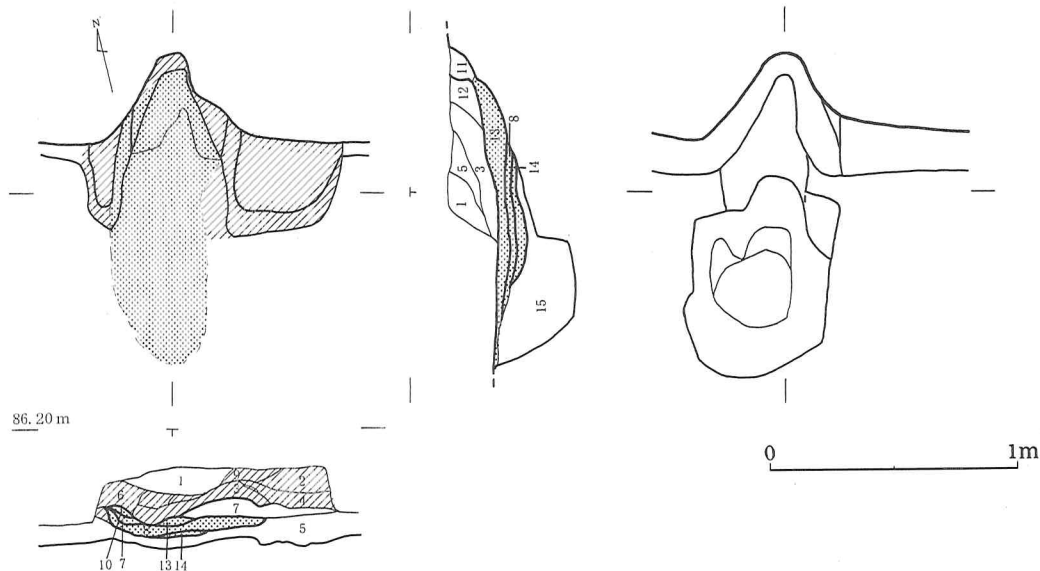
埋積土は、ローム粒・小塊を多く含む黒色土若しくは黒褐色土で、人為的埋没と推察される。

遺物（第10・23図、図版8・10・11、第10表）

遺物は埋積土中より土師器片と極少量の須恵器片、石製紡錘車1点などが出土した。土器類はいずれも破片で復元し得るものは少なかった。



第8図 SI2・掘方



- SI2
1. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 20%、ローム塊 (ϕ 4~20mm) 5%、焼土粒・塊 (ϕ 1~4mm) 1%、炭化物粒・塊 (ϕ 1~5mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 20%、ローム塊 (ϕ 4~15mm) 3%、焼土粒・塊 (ϕ 1~4mm) 3%、炭化物粒・塊 (ϕ 1~5mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 3. 黒褐色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 7%、地山 (10YR3/3) と思われるブロック (ϕ 10~30mm) が20%程混入、焼土粒・塊 (ϕ 2~7mm) 1%、炭化物粒・塊 (ϕ 1~5mm) を微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 4. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 1%、ローム・ブロック (ϕ 10~30mm) が混入、やや軟質で粘性はなく、締りは弱い。
 5. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 10%、焼土粒 (ϕ 1~3mm) 微量、炭化物粒・塊 (ϕ 1~5mm) 微量を含み、灰黄褐色粘質土 (10YR6/2) が少量混入、粘性はなく、締りは強い。
 6. 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒・塊を多量に含む、締りは弱い。

SI2カマド

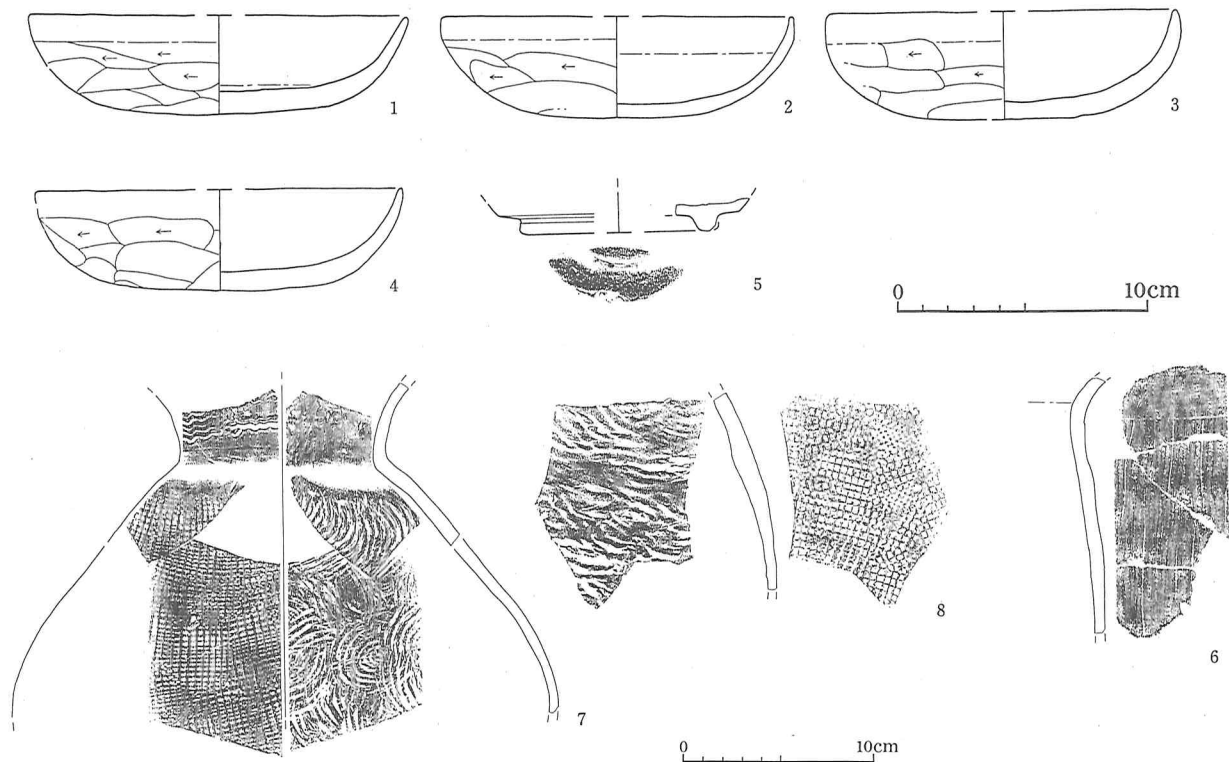
1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~2mm) 15%、焼土粒 (ϕ 1~2mm) 3% 混入。
- 1'. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~2mm) 10% 混入。
2. 灰色粘質土 (N5/o) 砂質を帯びる。
3. 灰色粘質土 (N5/o) 焼土塊 (ϕ 5~20mm) 5% 混入。
4. 灰色粘質土 (N5/o)
5. 灰色粘質土 (N5/o) 焼土 (50:50) 混合。
6. 灰色粘質土 (N5/o)
7. 褐灰色砂質粘質土 (10YR5/1) 焼土塊 (ϕ 5~25mm) 15%、炭化物粒 (ϕ 1~5mm) 3%、黒褐色土 ((10YR2/2) 20% 混入。
8. 灰色粘質土 (N5/o) 焼土粒 (ϕ 2~10mm)、黒色 (カーボン) 粒 (ϕ 5~15mm) 15% 混入。
9. 褐灰色砂質粘質土 (7.5Y4/1) ローム粒 (ϕ 1~2mm) 15% 混入。
10. 焼土小塊 (ϕ 5~20mm) の集合。
11. 灰色砂質粘質土 (5Y5/1)
12. 黒褐色砂質粘質土 (2.5Y3/1) 焼土粒 (ϕ 1~3mm) 5%、ローム粒 (ϕ 1~3mm) 3% 混入。
13. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) 焼土粒 (ϕ 1~20mm) 15%、カーボン10%、灰色粘質土 (5Y5/1) 粒 (ϕ 5~15mm) 15% 混入。
14. 黒褐色土 (10YR2/2) カーボン15%、灰色の灰15%、ローム・焼土粒 (ϕ 1~8mm) 各10% 混入。
15. 黒褐色土 (10YR2/2) 黒色土 (10YR2/1)、ローム粒・塊 (ϕ 1~80mm) の混合土 (床下の整地層)。

第9図 SI2カマド

第3表 SI2遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土、e = 焼成、f = 色調

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	土師器 杯	a 15.3 b 3.9 —	70%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り 内：横ナデ	d 赤色粒微量含む e 良好 f 淡橙	床直	漆処理
2	土師器 杯	a 14.1 b 4.0 —	70%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒微量含む e 良好 f 橙	床直	漆処理
3	土師器 杯	a (14.0) b 4.3 c —	40%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り後ミガキ 内：横ナデ、後粗いミガキ	d 粗砂粒少量含む e 良好 f 暗褐	床直	漆処理
4	土師器 杯	a (14.0) b 4.3 c —	80%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒少量含む e 良好 f 黄橙	床直	カマド脇と住居南の2片が接合 漆処理
5	土師器 高台杯	a — b — c (8.0)	5%	外：底部付高台 内：剥離で不明	d 砂粒・赤色粒少量含む e 良好 f 橙	カマド内	二次火熱
6	土師器 甕	— — —	10%	口辺は内・外面共に横ナデ 体部外面に縦のへラ削り	d 粗砂粒を含む e 良好 f 淡橙	埋中層	
7	須恵器 甕	— — —	5%	外：口辺部クシ描波状文、体部格子文叩き目 内：体部同心円文当て具痕	d 砂粒微量含む、緻密 e 良好 f 淡灰	床直+カマド内	
8	須恵器 甕	— — —	3%	外：格子文の叩き目 内：同心円文当て具痕後粗いナデ	d 粗砂粒含む e 良好 f 青灰	埋中層	



第10図 SI2出土遺物

SI3

遺構（第11・12図、図版3）

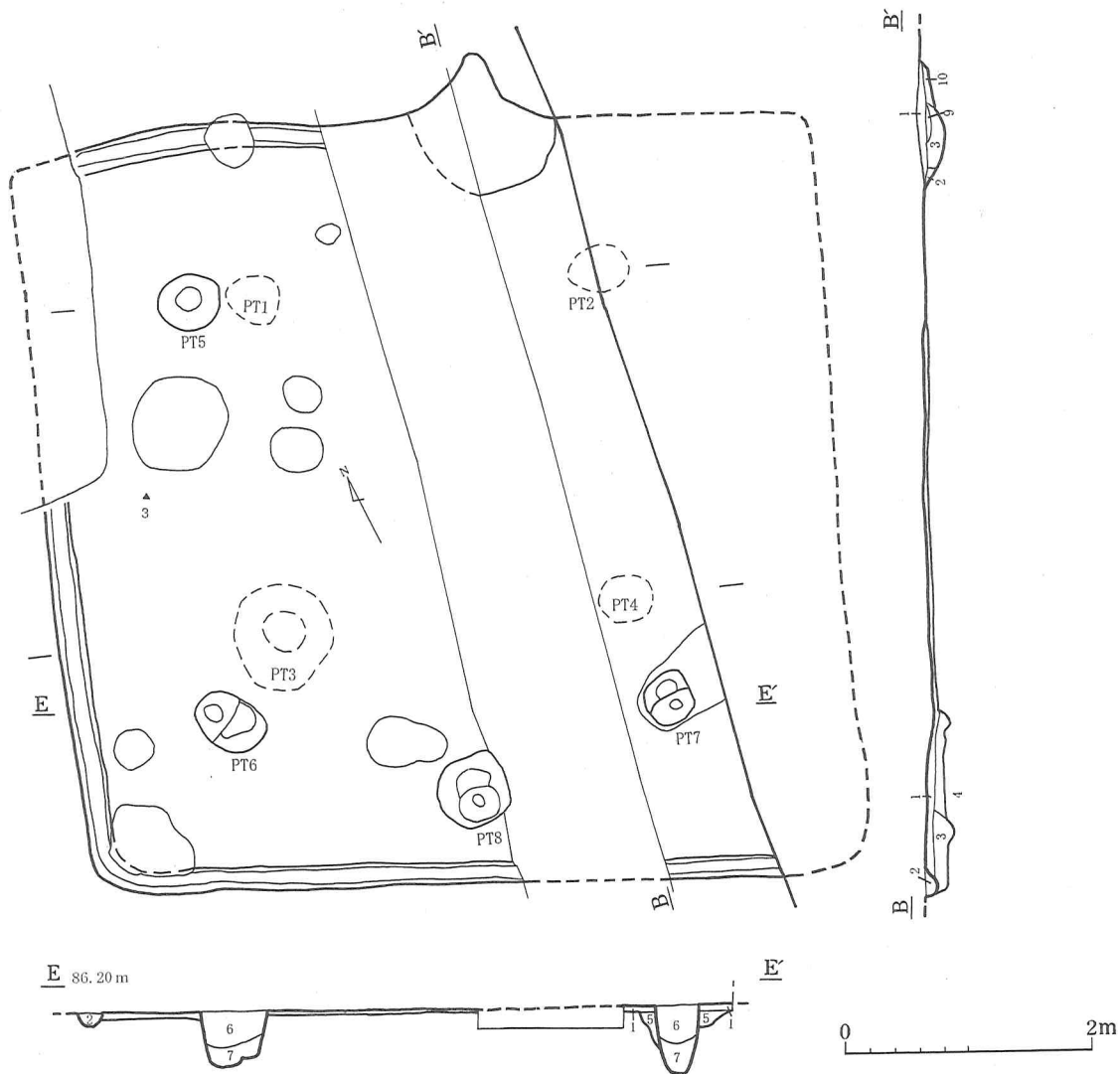
調査区中程の東端に位置し、東半部は調査区外に延びる。北西部がSI2と重複しこれに切られ、南東部はSI5と重複しこれを切っていた。また、南約0.7mにはSI4が隣接し、竪穴中央は試掘調査時のトレンチにより南北に削平されていた。

平面は、南北長約6.1m、現存東西長5.6mで、本来は一辺6m強のほぼ方形と推察される。北壁のカマドを通る主軸方位はN-24° -Eを示す。竪穴の掘り込みが浅く、遺構確認面が床面となっており、壁の状況は不明である。カマド部分を除く壁下には壁溝が設けられており、幅18~19cm、深さ10cm程であった。床面はローム漸移層中にあり、遺存部分はほぼ平坦で堅く締まっていた。なお、支柱穴より外（壁）側は15cm程粗掘りした後ローム土混じりの黒褐色土で埋め戻して貼床されていた。支柱穴は2組あり、当初はPT1~4の4口であったが、建て替え拡張に際してPT5~7（もう1口は地区外）に替えたと判断される。なお、新・旧の柱穴の配置から、拡張はカマドのある北壁を除く三方へ0.5~0.6m拡げられたと推察される。PT1~4は径35~45cmの円形で、深さ27~49cm、PT5~7は径43~55cmの円形で深さ40.5~55cmであった。南壁際に確認したPT8は径55cm、深さ35cmで2口が重複する。建て替え拡張後の出入口施設と考えられ、拡張後も改修があったと推察される。カマドは北壁の中央やや東寄りに、壁を幅20cm、奥行27cmの三角形に切り込み、灰色粘土で構築されていた。前述の如き遺存状態に加え、試掘調査時のトレンチによって西半分が失われており、遺存状態は非常に悪い。したがって、袖部の痕跡も不明瞭であったが、火床は部分的に確認できた。また、カマドの下には30×50cm程の楕円形で、深さ15cm程の掘り込みがあり、ローム土混じりの黒褐色土に、焼土や灰色粘土が混じっていた。

竪穴の埋積土はほとんど遺存しなかった。

遺物（第13・24図、図版8・10・11、第10・11表）

前述のと通りの遺存状態であり、遺物は非常に少ない。少量の土師器片の他、金銅製耳環が西壁際の床面直上より出土した。



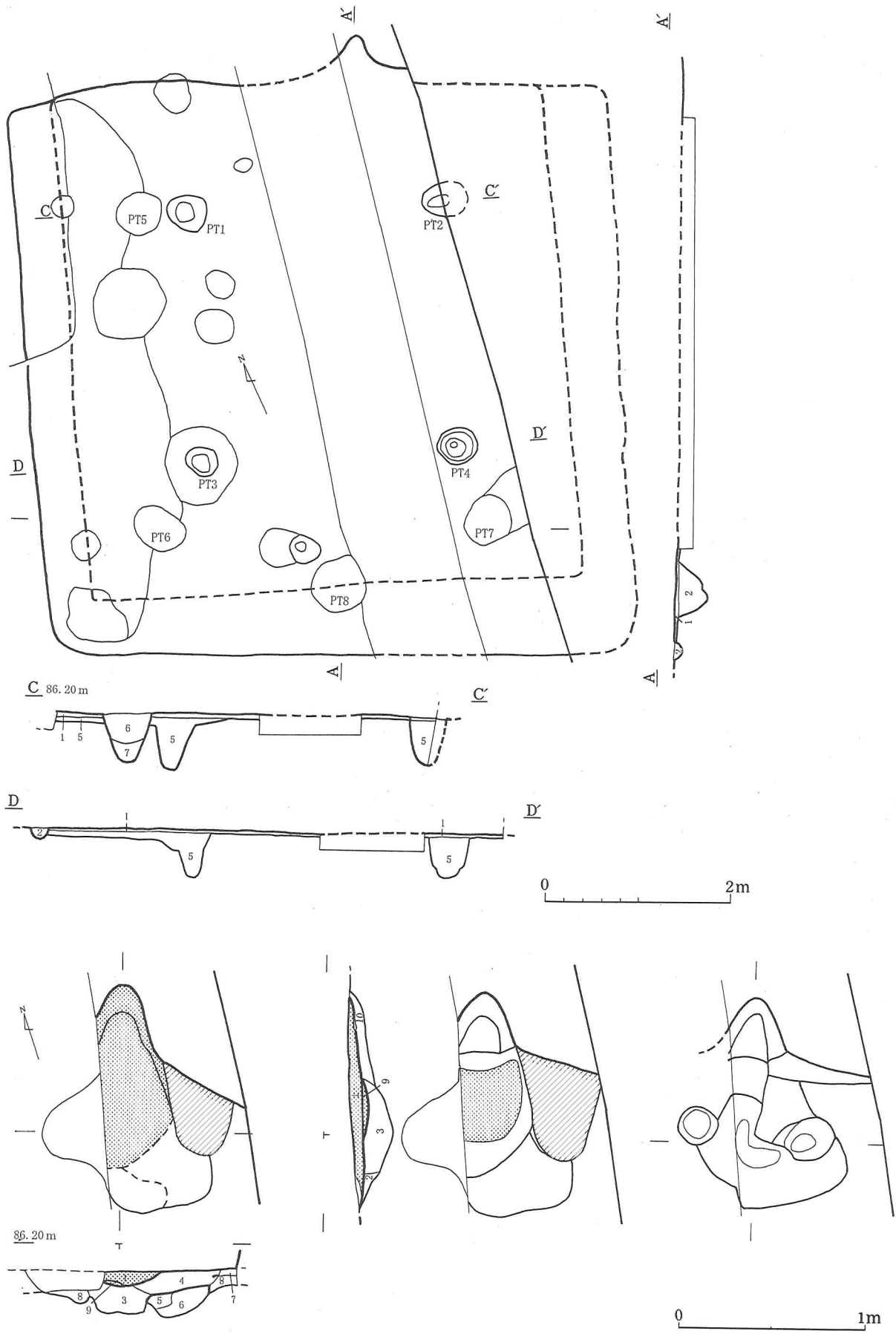
SI3

1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 1%、焼土粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 1%含む、粘性はなく、縮りは並。貼床と思われる。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 微量、焼土粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 5%、炭化物粒 ($\phi 1\sim 4\text{mm}$) 微量含む、やや軟質で粘性はなく縮りは並。
3. 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 10%、ローム塊 ($\phi 4\sim 20\text{mm}$) 1%、焼土粒・塊 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 10%、炭化物粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 微量含む、やや軟質で粘性はなく縮りは並。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 1%、ローム・ブロック ($\phi 10\sim 30\text{mm}$) 20%含む、黒色土 (10YR2/1) 30%混入。やや軟質で粘性はなく縮りは並。

SI3カマド

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土粒・塊 ($\phi 2\sim 15\text{mm}$) 15%、炭化物粒・塊 ($\phi 3\sim 10\text{mm}$) 7%含む、やや軟質で粘性は弱く、縮りは並。
2. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 第1層が30%程混入、焼土粒 ($\phi 2\sim 5\text{mm}$) 1%含む、やや軟質で粘性はなく、縮りは並。
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土粒・塊 ($\phi 2\sim 6\text{mm}$) 10%、炭化物粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 微量、灰黄褐色粘土 (10YR6/2) 塊 ($\phi 3\sim 10\text{mm}$) 微量含む、軟質で粘性は弱く、縮りは並。
4. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 焼土粒・塊 ($\phi 1\sim 10\text{mm}$) 5%、炭化物粒・塊 ($\phi 1\sim 7\text{mm}$) 1%混入、軟質で粘性があり、縮りは強い。
5. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) 焼土粒・塊 ($\phi 1\sim 9\text{mm}$) 5%、炭化物粒 ($\phi 2\sim 5\text{mm}$) 微量含む、軟質で粘性が強く、縮りは強い。
6. 褐灰色土 (10YR6/1) 焼土粒 ($\phi 1\sim 4\text{mm}$) 微量含む、やや軟質で粘性があり、縮りは強い。袖の残存と思われる。
7. 6と黒色土 (10YR2/1) 6:4の混合土 焼土粒・塊 ($\phi 1\sim 20\text{mm}$) 30%、炭化物粒 ($\phi 1\sim 4\text{mm}$) 微量含む、粘性はなく、縮りは強い、火床のようにも見える。
8. 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土粒 ($\phi 1\sim 3\text{mm}$) 微量、炭化物粒・塊 ($\phi 1\sim 6\text{mm}$) 微量含む、軟質で粘性は弱く、縮りは並。
9. 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土層 古い火床と思われる。縮りは強い、熱を受けカサカサしている。
10. 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒・塊 ($\phi 1\sim 8\text{mm}$) 7%含む、軟質で粘性は弱く、縮りは並。

第11図 SI3

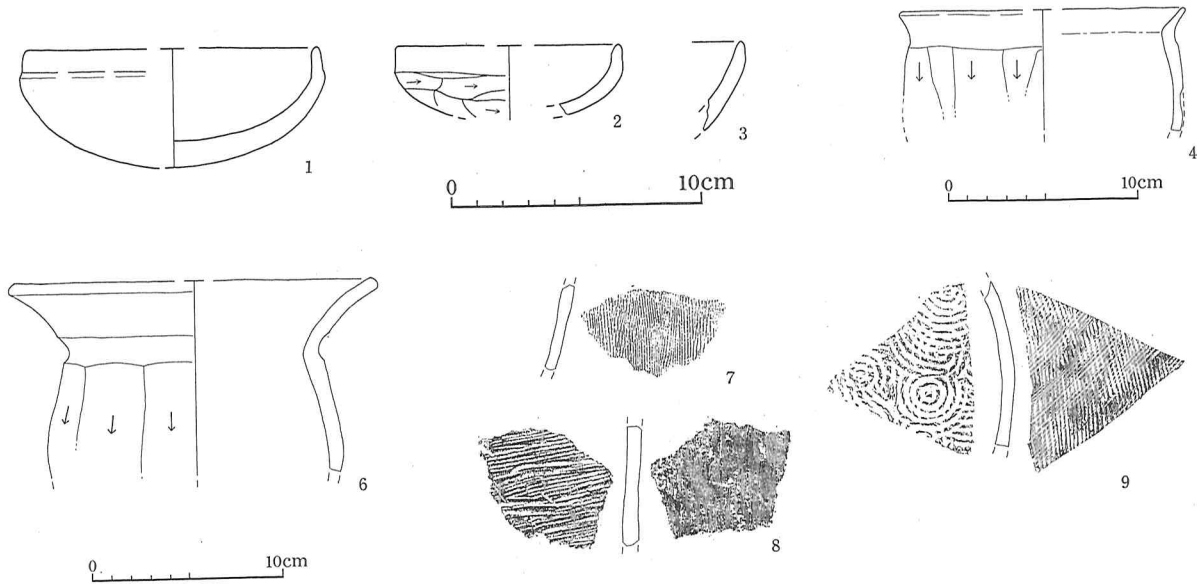


第12図 SI3掘方・カマド

第4表 S I 3遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土、e = 焼成、f = 色調

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	須恵器 杯	a - b - c -	10%	ロクロ整形 外底部ヘラ削り	d 長石粒多く含む、緻密 e 良好 f 灰	埋下層	
2	土師器 杯	a - b - c -	5%	口辺部は内外面共に横位のミガキ 外：ヘラ削り後粗いミガキ 内：放射状の暗文	d 砂粒含む e 良好 f 橙	埋下層 カマド付近	
3	土師器 杯	a - b - c -	5%	外：口辺部横ナデ、体部ヘラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒混和 e ややあまい f 淡橙	埋下層 カマド付近	漆処理
4	土師器 杯	a (10.0) b - c -	5%	外：口辺部横ナデ、体部ヘラ削り 内：横ナデ	d 砂粒少量混和 e ややあまい f 黒	埋下層 カマド付近	漆処理
5	土師器 杯	a (9.0) b - c -	10%	外：粗いナデ 内：ヘラによるナデ	d 粗砂粒多量、雲母、石英微量混和 e 不良 f 淡橙	埋下層 カマド付近	
6	土師器 甕	a - b - c -	10%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り 内：口辺部横ナデ、体部粗い横ナデ	d 粗砂粒多量混和、角閃石、雲母微量含む e 良好 f 橙	埋下層 カマド付近	
7	土師器 甕	a - b - c -	2%	外：縦位の細いクシ目 内：ナデ	d 粗砂粒多量混和、角閃石、長石微量含む e 良好 f 橙	埋下層 カマド付近	
8	土師器 甕	a - b - c -	3%	外：縦のヘラ削り 内：横位の粗いクシ目	d 粗砂粒多量、雲母少量混和 e 良 f 橙	埋下層 カマド付近	
9	須恵器 甕	a - b - c -	2%	外：平行文叩き目、後横のクシ目 内：同心円文当て具痕	d 粗砂粒少量混和 e 良 f 灰	埋下層	



第13図 SI3出土遺物

SI4

遺構（第14・15図、図版3・4）

調査区の中央やや東寄りに位置し、東側はSI5、南側はSB2、西側はSK14、北はSD1などと重複しこれらに切られていた。

平面は、東西長4.1～4.3m、南北長3.4～3.6mの東西にやや長い不整形である。北壁のカマドを通る主軸方位はN—13°—Wを示す。壁は現存高39cm程で、ほぼ直立する。カマド部分を除く壁下には、幅15～19cm、深さ10cm程の壁溝が廻る。床面はローム層中にあり、粗掘りの後黒褐色土混じりのローム土で整地していたが、改修の毎に嵩上げして貼床を施しており、最終時の床面は当初のものより20cm程高く、2回以上の改修が確認された。最終時の床面はほぼ平らで固く締まっていた。主柱穴はPT3～6の4口で、一辺24～35cmの方形、深さ29.5～36cmであった。また、床面下よりPT1、2の東西に並ぶ2口の小穴を確認した。これらも、一辺20～30cmの方形で、深さ40.5～41cmであった。最終時の竪穴の各辺の方向と2口の柱穴を結ぶ東西の軸線は合致しないが、柱穴の形状および位置関係から本跡の建て替え前の主柱穴と推察される。竪穴の平面形が東西にやや長いことから、本来は2本柱であったものを4本にして建て替え拡張したもので、拡張時に竪穴も掘り広げられた為にいくぶんいびつになったと推考される。南壁に際したPT7は、径25cmの円形、深さ18cmで、出入口の施設と考えられる。また、カマドの右側、北東隅のPT8は径80cmの不整形円形、深さ18cmで、所謂「貯蔵穴」と推定される。カマドは、北壁の中央やや東寄りに、壁を幅30cm、奥行19cmの三角形に切り込み、灰色粘土で築かれていた。北側の上部は重複するSD1に切られていた。また、落下した天井部や支脚などは認められず、住居の廃絶時に一部破壊されたと推察されるが、火床面と両袖の下部が遺存し、最終時の幅（内法）は50cm、長さは70cm程と推定される。火床も床面の改修に伴って嵩上げされており、旧い火床面が土層観察により確認できた。カマドの下には40×47cmの不整形円形で、深さ20cm程の掘り込みがあり、埋積土はローム粒・塊を多く含む黒褐色土で、上部には焼土や粘土粒が混入していた。

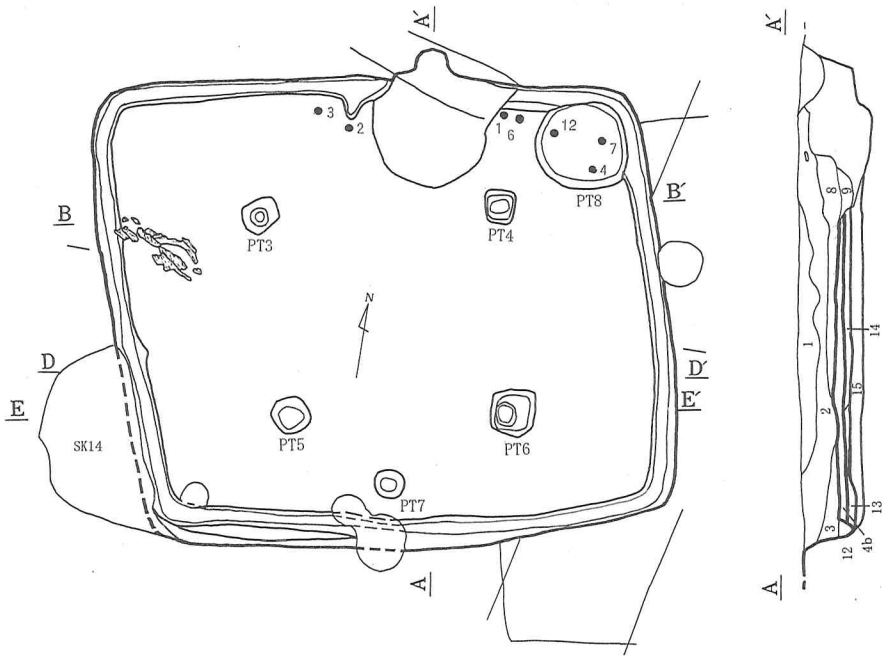
埋積土は、ローム粒・小塊を多量に含む黒褐色土で、人為的埋没である。なお、北西部の確認面近く（床面上約30cm）の埋積土中より炭化材が30×80cmの範囲にまとまって認められた。しかし、焼面や焼土などが見られないことから、埋没途中で他所より持ち込まれたものと推察される。

遺物（第16図、図版9・10・11）

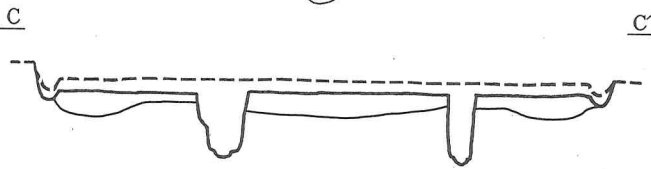
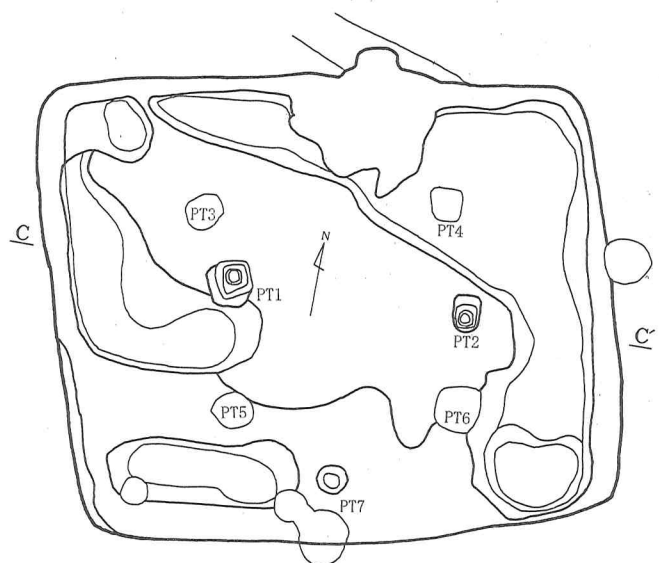
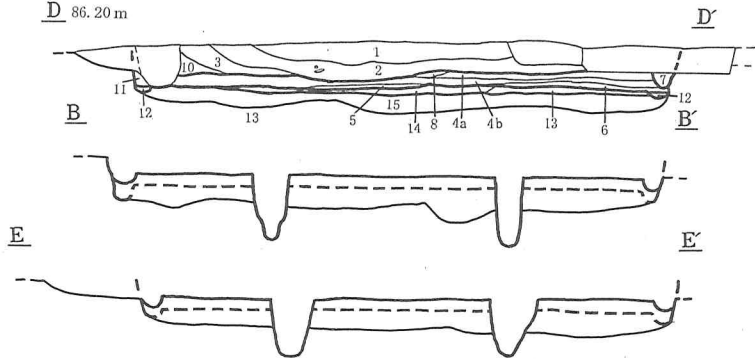
カマド周辺より土師器類がまとめて出土し、坏類は完形・略完形が6点、甕類は略完形の小振りなものが1点出土している。

SI4

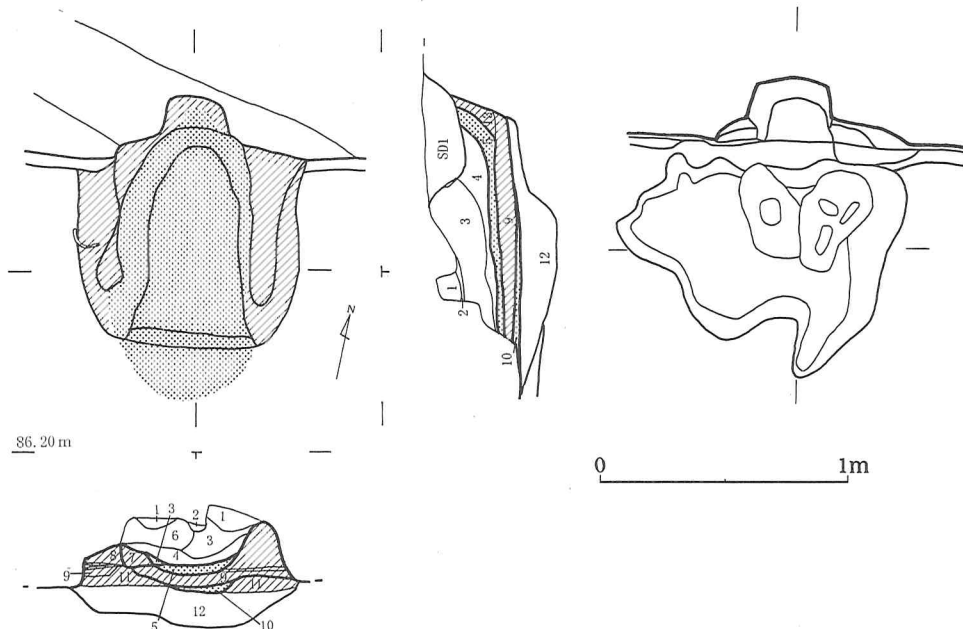
1. 黒褐色土（10YR2/2） ローム粒（φ1～3mm）20%、ローム塊（φ4～15mm）3%、焼土粒・塊（φ2～10mm）1%、炭化物粒・塊（φ2～17mm）1%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
2. 黒褐色土（10YR2/3） ローム粒（φ1～3mm）25%、ローム塊（φ4～20mm）3%、焼土粒・塊（φ1～5mm）1%、炭化物粒・塊（φ1～5mm）微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
3. 黒褐色土（10YR2/2） ローム粒（φ1～3mm）15%、ローム塊（φ4～10mm）1%、焼土粒・塊（φ2～7mm）微量、炭化物粒（φ1～3mm）微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
- 4 a. 明黄褐色土（10YR6/8） 層状に整地された、ロームブロック層で隙間には4b層が入っており、あるいは2層共に新しい貼床とも考えられる。締りは強い。
- 4 b. 黒褐色土（10YR2/2） ローム粒（φ1～3mm）7%、ローム塊（φ4～10mm）10%、ロームブロック（φ11～60mm）30%、焼土粒・炭化物粒（φ1～3mm）を微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い、4a層と共に新しい時期の貼床と思われる。
5. 黒色土（10YR2/1） ローム粒（φ1～3mm）5%、ローム塊（φ10～30mm）10%を含み、黒褐色土（10YR2/3）が30%程混入、やや軟質で粘性は無く、締りは強い。
6. 黒褐色土（10YR2/3） ローム粒（φ1～3mm）10%、ローム塊（φ4～20mm）15%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
7. 黒色土（10YR2/1） ローム粒（φ1～3mm）7%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。新しい時期の壁溝埋積土。
8. 第2層と類似するが灰黄褐色粘質土（10YR6/2）のブロック（φ10～150mm）が20%程混入、粘性はなく、締りは極めて強い。
9. 黒色土（10YR2/1） ローム塊（φ4～6mm）1%、焼土粒（φ1～5mm）5%、炭化物粒・塊（φ1～6mm）5%を含み、灰黄褐色粘質土（10YR6/2）が40%程混入、やや軟質で粘性は弱く、締りは強い。
10. 黒色土（10YR2/1） ローム粒（φ1～3mm）3%、ローム塊（φ4～20mm）7%、焼土粒（φ1～5mm）微量、炭化物粒（φ3～5mm）微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
11. 黒褐色土（10YR2/2） ローム粒（φ1～3mm）3%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
12. 黒色土（10YR1.7/1） ローム粒（φ1～3mm）1%、ローム塊（φ4～20mm）1%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは弱い。
13. 黒色土（10YR2/1） ローム粒・塊・ブロックとの混合土。粘性はなく、締りはきわめて強い。旧貼床。
14. 黒褐色土（10YR2/2） 13層同様だが焼土塊（φ5～30mm）の混入が見られる。
15. ローム粒・塊・ブロックが主体で黒褐色土（10YR2/2）が10%混入、赤色スコリア塊（φ4～10mm）微量含む、締りは並。



D 86.20 m



第14图 SI4·掘方



SI4カマド

1. 灰オリブ粘質土 (5Y6/2) カーボンが塊状に (ϕ 10~20mm) 20%混入。
2. カーボン主体で灰オリブ (5Y6/2)・灰色粘質土 (10YR5/1) 粒 (ϕ 1~3mm) 20%混入。
3. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 灰色粘質土 (10YR5/1) 粒 (ϕ 1~10mm) 25%混入。
4. 焼土粒・小塊 (ϕ 1~30mm) 天井・壁の崩れ
5. カーボン層 焼土粒・粘質土粒5%混入。
6. 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 灰色粘質土 (10YR5/1) 粒 (ϕ 1~30mm) 40%、焼土粒 (ϕ 1~15mm) 2%混入、西寄り黒褐色土 (10YR3/2) 30%混入。
7. 褐灰色粘質土 (10YR4/2) 浅黄色粘質土 (5Y7/3) 粒 (ϕ 1~10mm) 10%、焼土粒 (ϕ 1~10mm) 8%、カーボン5%混入。
8. 灰色粘質土 (5Y5/1) 浅黄色粘質土 (5Y7/4) 塊 (ϕ 30~80mm) 40%混入。
9. 灰色粘質土 (5Y5/1) 浅黄色砂質粘質土 (5Y7/4)、明黄褐色土 (5Y6/6) の混合土。(旧カマドの火床・壁などの構築材)
10. カーボンに焼土粒・ローム粒 (ϕ 1~5mm) 各10%混入。
11. 灰色粘質土 (10YR5/1) 灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 粒・塊 (ϕ 1~20mm) 40%混入。
12. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~80mm) 40%混じる、貼床下整地土。
13. 灰黄色粘質土 (10YR4/2) 焼土粒5%混入。

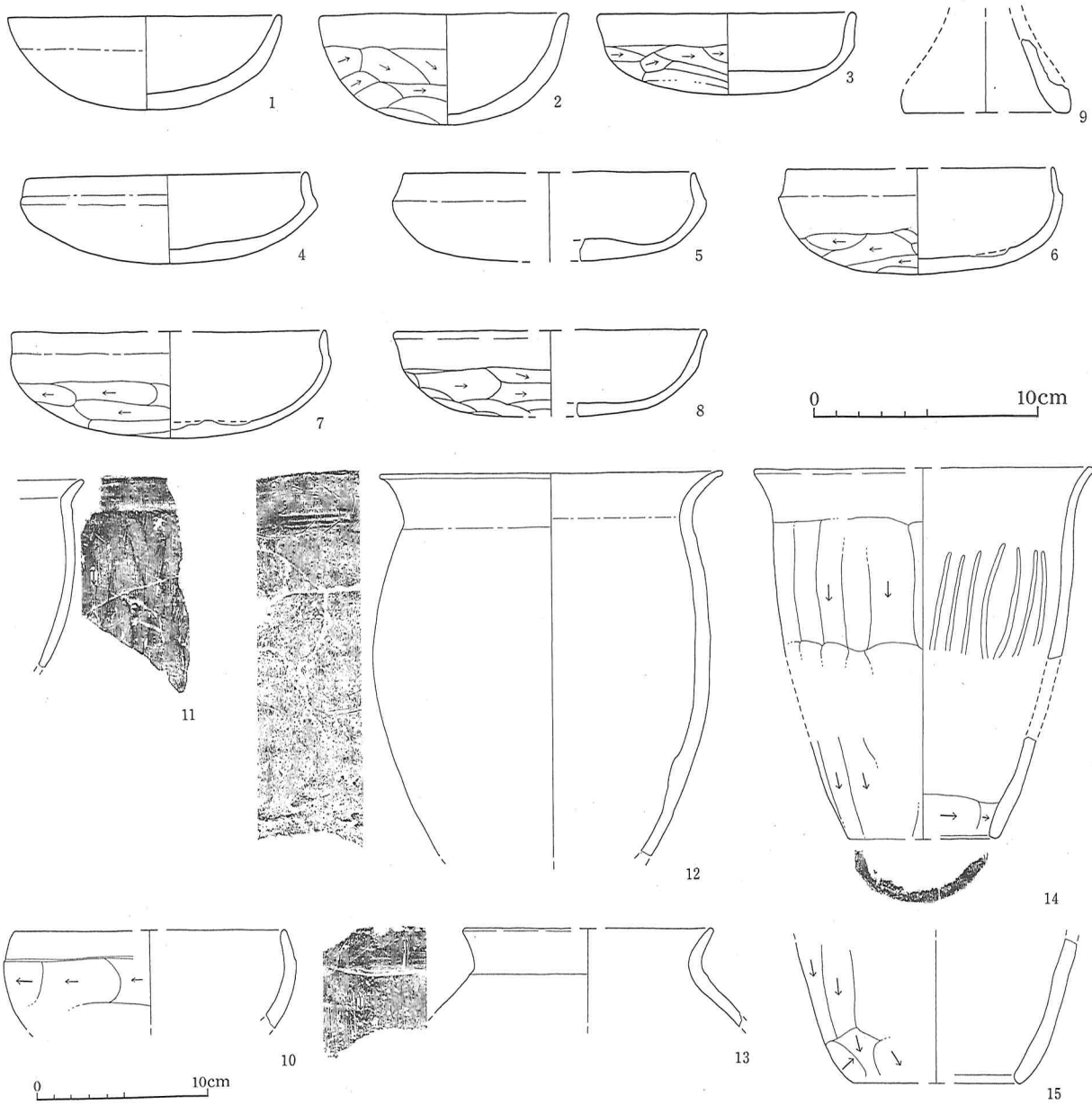
第15図 SI4カマド

第5表 SI4遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土、e = 焼成、f = 色調

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	土師器 杯	a 12.2 b 4.2 c -	98%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り (摩滅) 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和、斜長石、角閃石微量含む e やや不良 f 黄橙	カマド東脇 床直	漆処理、器面の剥離著しい
2	土師器 杯	a 5.7 b 5.0 c -	100%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒、赤色粒含む e 良好 f 淡橙	カマド西脇 床直	漆処理、二次火熱
3	土師器 杯	a 11.6 b 3.6 c -	100%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒混和、角閃石微量含む e 良好 f 黄橙	カマド西脇 床直	漆処理
4	土師器 杯	a 12.4 b 4.0 c -	100%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り (摩滅) 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和 e 良好 f 淡橙	貯蔵穴上層	漆処理
5	土師器 杯	a (13.0) b (4.0) c -	20%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り (摩滅) 内：横ナデ	d 砂粒含む e ややあまい f 橙	中層	一部に煤が付着、二次火熱
6	土師器 杯	a 11.8 b 4.7 c -	80%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒、赤色粒混和 e 良好 f 黄橙	カマド東脇 床直	漆処理
7	土師器 杯	a 14.0 b 4.8 c -	80%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和、斜長石、角閃石微量含む e 良好 f 淡橙	貯蔵穴上層	漆処理
8	土師器 杯	a (14.0) b (3.9) c -	30%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り 内：横ナデ	d 砂粒少量含む e 良好 f 暗褐	埋中層	一部に煤が付着、漆処理
9	土師器 支脚或 は台付	a - b - c 7.2		外：不明 内：粗いナデ	d 粗砂粒混和、雲母微量含む e 良好 f 淡橙	埋中層	外面は器面の剥離著しい
10	土師器 鉢	a (16.0) b - c -	10%	外：口辺部横ナデ、体部へラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒少量混和、斜長石微量含む e 良好 f 淡黄橙、内面黒	埋中層	黒色処理

11	土師器 小形甕	a - b - c -	10%	外：口辺部横ナデ、体部縦位ヘラ削り 内：口辺部横ナデ、体部横位ヘラナデ	d 粗砂粒多量混和、赤色粒含む e ややあまい f 橙	埋中層	二次火熱
12	土師器 甕	a 20.0 b - c -	90%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り、後ナデ、 内：口辺部横ナデ、体部縦のヘラナデ	d 粗砂粒多量混和、長石、角閃石、雲母微量含む e 並 f 橙	貯蔵穴	内面に煤付着
13	土師器 甕	a (14.8) b - c -	10%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り 内：口辺部横ナデ、体部不明	d 粗砂粒多量混和、長石、雲母含む e 並 f 淡橙	埋中層	
14	土師器 甕	a (20.0) b (21.6) c (8.8)	20%	外：口辺部横ナデ、体部縦のヘラ削り 内：口辺部横ナデ、体部縦のミガキ	d 粗砂粒少量混和 e 良好 f 淡黄橙	埋中層	
15	土師器 甕	a - b - c (9.8)	10%	外：縦のヘラ削り 内：縦のミガキ	d 粗砂粒多量混和、長石、角閃石、雲母微量含む e 並 f 橙	埋中層	二次火熱で器面荒れる



第16図 SI4出土遺物

SI5

遺構 (第17図、図版5)

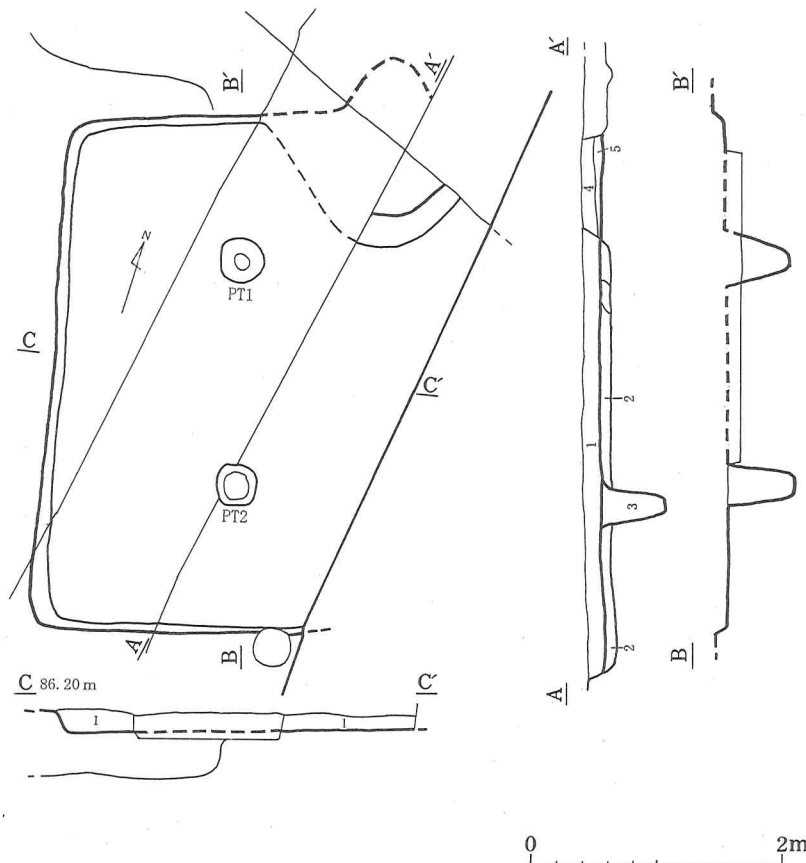
調査区中程の東端に位置し、東半部は調査区外に延びる。北側はSI3と重複しこれに切られ、西側はSI4と重複しこれを切っていた。中央から西側が試掘調査時のトレンチで削平されていた。

平面は、南北長4.1m、東西長は明確にし難いが5mほどと推定され、東西にやや長い方形と推考する。北壁のカマドを通る主軸方位はN-14°-Wである。壁は現存高13cmほどで、ほぼ直立する。壁溝は確認できなかった。床面はローム漸移層中にあり、貼床を施していた。西寄りにはSI4の埋積土中にあり、試掘トレンチに削られ、北側はSI3に切られているなどして残存部は少ないが、ほぼ平坦で堅く締まっていた。支柱穴はPT1、2の2口を確認し、径33~35cmの円形、深さ50~55cm。これらは4本柱のうち西側の2口と考えられる。調査区内には出入口の小穴、所謂「貯蔵穴」などは認められなかった。カマド、は北壁の中程を切り込み灰色粘土で築かれていたと推察されるが、遺存状態が悪く詳細は不明である。

埋積土は、黒褐色土にローム粒・塊を多く含み、人為的埋没と考えられる。

遺物 (第18図、図版9・10)

前述の如き遺存状態であり、土師器片が極少量出土したのみである。



SI5

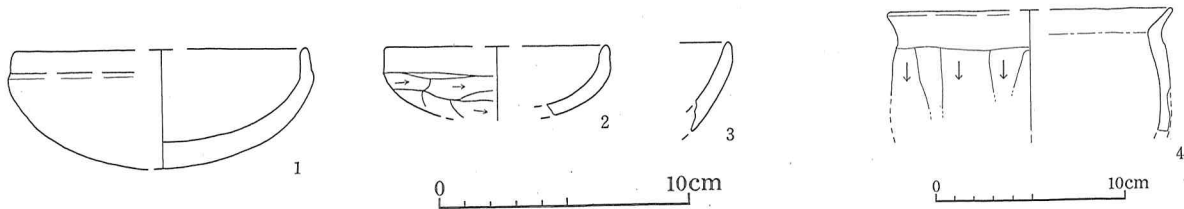
1. 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒 (φ1~3mm) 20%、ローム塊 (φ4~6mm) 3%、焼土粒・塊 (φ1~8mm) 3%、炭化物粒 (φ1~4mm) 1%を含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒・塊・ブロックとの7:3の混合土、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
3. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (φ1~3mm) 3%、ローム塊 (φ9~20mm) 1%含む、粘性はなく、締りは並。
4. にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 黒色土 (10YR2/2) 20%程混入、焼土粒 (φ1~7mm) 3%、粘性はなく、締りは極めて強い。
5. 黒色土 (10YR2/1) 1層が15%程混入、焼土粒・塊 (φ1~20mm) 5%、炭化物10%、やや軟質で粘性はなく、締りは極めて強い。

第17図 SI5

第6表 SI5遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土、e = 焼成、f = 色調

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	土師器 杯	a (11.8) b (4.8) c -	30%	外：口辺部横ナデ、体・底部摩 滅で不明 内：横ナデ	d粗砂粒多量混和 e並 f淡橙	床直	漆処理、二次火熱
2	土師器 杯	a (8.0) b - c -	15%	外：口辺部横ナデ、体・底部ヘラ 削り 内：横ナデ	d粗砂粒少量混和 e並 f暗褐	埋	漆処理
3	土師器 杯	a - b - c -	5%	外：口辺部横ナデ、体部ヘラナデ 内：横ナデ	d砂粒少量混和、角閃石微量含む e並 f暗褐	埋	
4	土師器 小形甕	a (15.0) b - c -	10%	外：口辺部横ナデ、体部縦の削り 内：口辺部横ナデ、体部横のヘラナデ	d粗砂粒多量、赤色粒少量混和、長石微量含む eややあまい f淡橙	埋	一部に煤付着



第18図 SI5出土遺物

SI6

遺構（第19図、図版4）

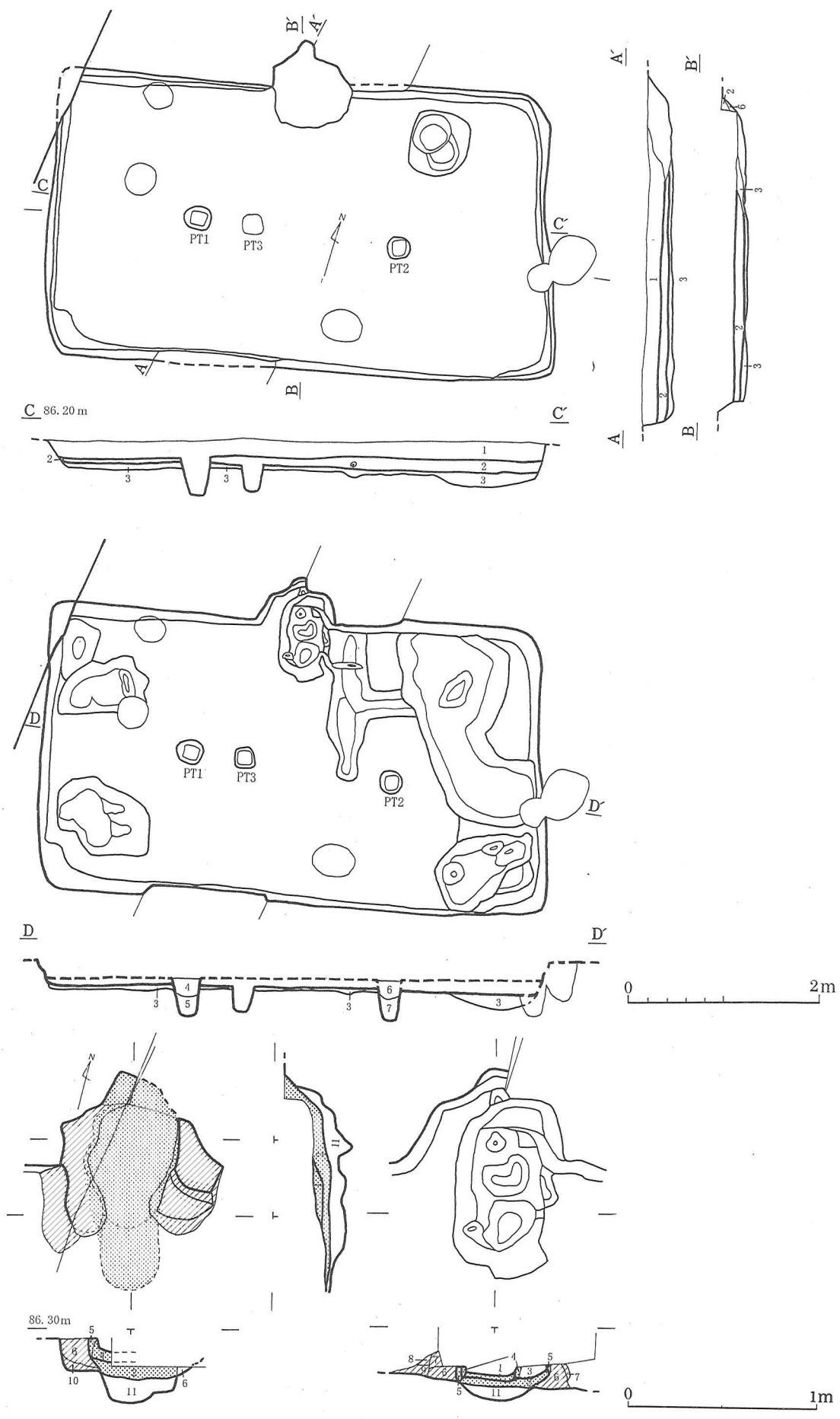
調査区の南西部に位置し、竪穴の北西隅の一部が調査区外に延びる。東側はSB2、南側はSB3と重複し、SB2より旧く、SB3より新しい。また、南東約2.3mにSI7、北東約4.5mにSI4が隣接する。本跡のほぼ中央に、試掘調査時のトレンチが南北にあり、カマド東半の上部が削平されていた。

平面は、東西長5.2m、南北長3mの長方形である。北壁のカマドを通る主軸方位はN-12°-Wを指す。壁は現存高15~18cmで、ほぼ直立する。壁溝は認められなかった。床面はローム層中にあり、粗掘りの後、黒褐色土混じりのローム土で整地し貼床されていた。また、改修に際して床を嵩上げして貼床しており、最終時の床面は当初のものより10cm程高くなっていた。それぞれの床面ともほぼ平坦で堅く締まっていた。主柱穴は、PT1、2の2口で、竪穴の長軸線上に並び、一辺24~30cmの方形、深さ30~34cm。また、PT1の東側30cmの長軸線上に一辺21cmの方形で、深さ22cmのPT3を確認した。ローム土で埋め戻されていたが、竪穴の長軸線上にあり、平面形も他の2口同様に方形を基調とすることから、本跡に付随する施設と考えられる。出入口の小穴や所謂「貯蔵穴」は認められなかった。カマドは、北壁のほぼ中央を幅40cm、奥行47cmの三角形に切り込み、灰色粘土で築かれていた。前述のとおり東半の上部はトレンチで失われていたが、他はほぼ遺存し、床面と同様に改修時に嵩上げして造り替えられた状況が確認できた。カマドは住居の廃絶時に破壊を受けたものか、支脚や天井部などは認められなかったが、西半部は煙道近くまで遺存した。最終使用時の幅は約40cm、推定の全長は90cmであった。この下に旧カマドの一部が遺存し、残存幅は約28cm、火床は10cm程低い位置にある。また、カマドの下には径45×98cmの楕円形で、深さ14cm程の掘り込みがあり、黒褐色土混じりのローム粒・塊で埋め戻されていた。

埋積土は黒色土と黒褐色土の混合土で、ローム粒・塊が混入し、人為的埋没と考えられる。

遺物（第20図、図版9・11、第11表）

最終時の床面より土師器杯、河原石、床下（旧床面）より土師器長胴甕が出土した他、埋積土中からも土師器片が出土している。



第19図 SI6・掘方・カマド

- SI6
1. 黒色土 (10YR2/1) と黒褐色土 (10YR2/3) の5:5の混合土。ローム粒 (ϕ 1~3mm) 5%、ローム塊・ブロック (ϕ 4~50mm) 5%、焼土粒・塊 (ϕ 1~10mm) 1%、炭化物粒 (ϕ 1~5mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 7%、ローム塊 (ϕ 4~20mm) 30%、赤色スコリア粒 (ϕ 1~5mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並、貼床と思われる。
 3. 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒・塊を多量に含む、締りは並(貼床)。
 4. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~10mm) 10%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 5. ローム粒・塊・ブロックの混合土。4層が10%程混入、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 6. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊・ブロックが40%程混入。やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 7. 黒褐色土 (10YR2/2) とロームの5:5の混合土。やや軟質で粘性はなく、締りは並。

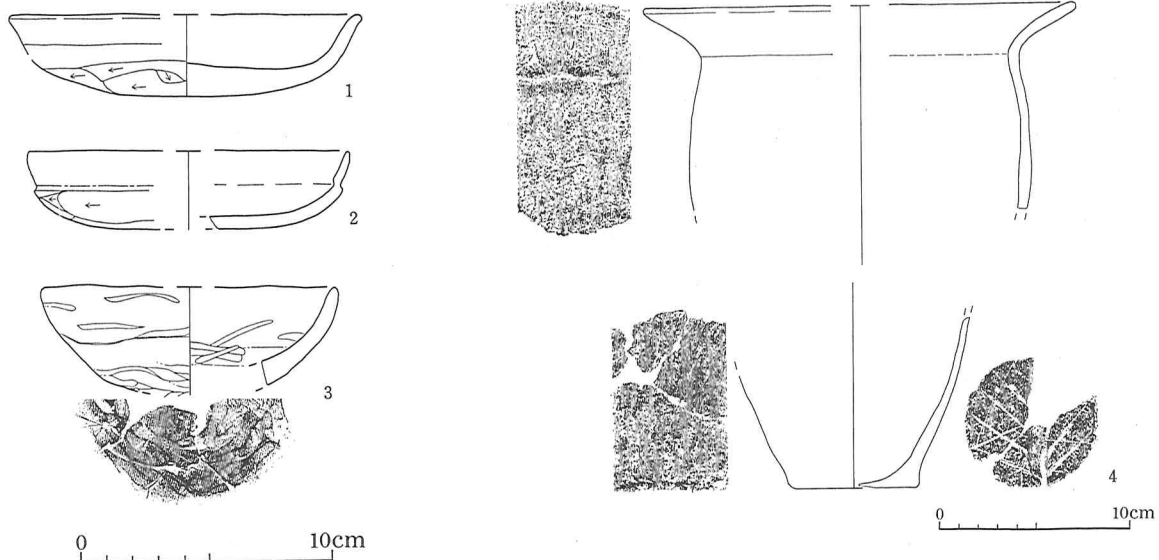
SI6カマド

1. 火床層(焼土)
2. カーボンに焼土粒・浅黄砂質土・灰色粘土粒 (ϕ 1~20mm) 各15%混入。
3. 焼土・浅黄砂質土各20%、暗灰黄色粘質土15%、黒褐色土 (10YR3/2) 15%混入。
4. 赤色 (10R5/8) 焼土。
5. 赤褐色 (10R4/4) 焼粘土。
6. 灰色粘質土 (N5/o)
7. 浅黄色砂質土 (5Y7/3)
8. 暗灰黄色砂質粘質土 (2.5Y5/1) 焼土・ローム粒 (ϕ 1~10mm) 5%混入。
9. 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒 (ϕ 1~10mm) 15%、炭化物粒 (ϕ 1~8mm) 5%、褐灰色粘質土 (10YR5/1) 粒 (ϕ 1~15mm) 20%混入。
10. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~10mm) 20%、焼土粒・炭化物粒 (ϕ 1~6mm) 各5%、灰色粘土 (N5/o) 粒 (ϕ 1~10mm) 10%混入。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム明黄褐色 (2.5Y6/6) 粒・塊 (ϕ 1~50mm) 30%混入。

第7表 SI6遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土・焼成・色調、e = 出土位置、f = 備考

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	土師器 杯	a (14.0) b (3.3) c -	80%	外：口辺部横ナデ、体・底部ヘラ 削り 内：横ナデ	d 粗砂粒少量、長石、角閃石微量混和 e ややあまい f 黄橙	床直	漆処理
2	土師器 杯	a (13.0) b (3.1) c -	20%	外：口辺部横ナデ、体・底部ヘラ 削り 内：横ナデ	d 赤色粒多量、粗砂粒少量混和 e 良好 f 橙	床下	漆処理
3	土師器 杯	a 12.0 b - c -	50%	外：口辺部横ナデ、体・底部ヘラ 削り後粗いミガキ 内：横ナデ、後粗いミガキ	d 砂粒少量混和 e 良好 f 暗褐	床直	
4	土師器 甕	a (22.8) b (26.0) c (6.6)	20%	外：口辺部横ナデ、体部ヘラ削り、 後ナデ、底部木葉痕(2重) 内：口辺部横ナデ、体部ナデ	d 粗砂(長石)粒、雲母多量混和 e 良好 f 赤褐	床下	



第20図 SI6出土遺物

SI7

遺構（第21図、図版5）

調査区の南東端に位置し、北約0.5mにSB2、西約2mにSB3が隣接する。また、南西隅にSK7・8が重複しこれらに切られていた。なお、本跡は地表面下20cm程のところ遺構確認面であり、整地作業に伴う重機による填圧を受けており、一部には砂利の混入や床面の陥没も見られた。さらに、東端部は試掘調査時のトレンチによって南北に削平されていた。

平面形は、東西長5.9m、南北長5.4～5.6mの方形である。北壁のカマドを通る主軸方位はN—14°—Eを示す。壁は現存高10～15cmで、ほぼ直立する。カマド部分を除く壁下には、幅15～25cm、深さ6～7cmの壁溝が設けられていた。床面はローム層中にあり、竪穴の外周部（支柱穴と壁の間）を粗掘りした後、ローム土を主体に整地して貼床を施してある。しかし、前述の如く、重機による填圧を強く受けており、床面を明確にし難い部分もあった。柱穴は、PT1～4の4口が支柱穴で、平面は径35～45cmの円形、深さ31～42cmであった。また、PT2の底面には径12cmの柱の痕跡（柱当り）が認められた。南壁寄りのPT6は径35cmの円形、深さ19.6cmで、出入口の施設と推察される。カマド右脇のPT5は東西長70cm、南北長43cmの楕円形、位置的に所謂「貯蔵穴」と推察される。カマドは、北壁のほぼ中央に、壁を幅約40cm、長さ約16cmの三角形に切り込み灰色粘土で築かれていた。上部の大部分が削平されていて、火床面と両袖の基部が認められたのみで、幅は65cm、推定の長さは86cm。支脚は認められなかったが、カマド左（西）脇の壁溝内より長さ16cm、幅7cm程の焼けた河原石が出土しており、支脚であった可能性が高い。

埋積土は、ローム粒・塊混じりの黒褐色土もしくは黒色土であるが、大部分は整地により攪乱を受けていた。

遺物（第22・24図、図版9・10・11、第10・11表）

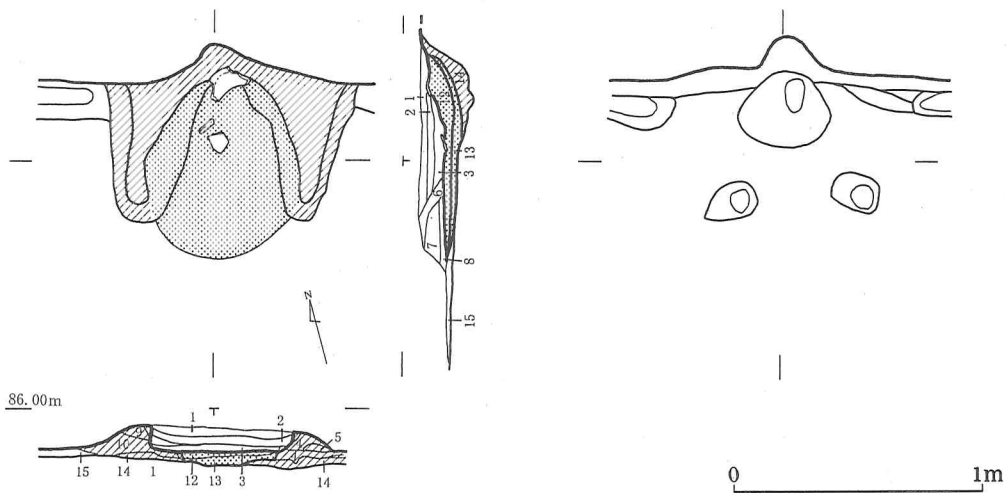
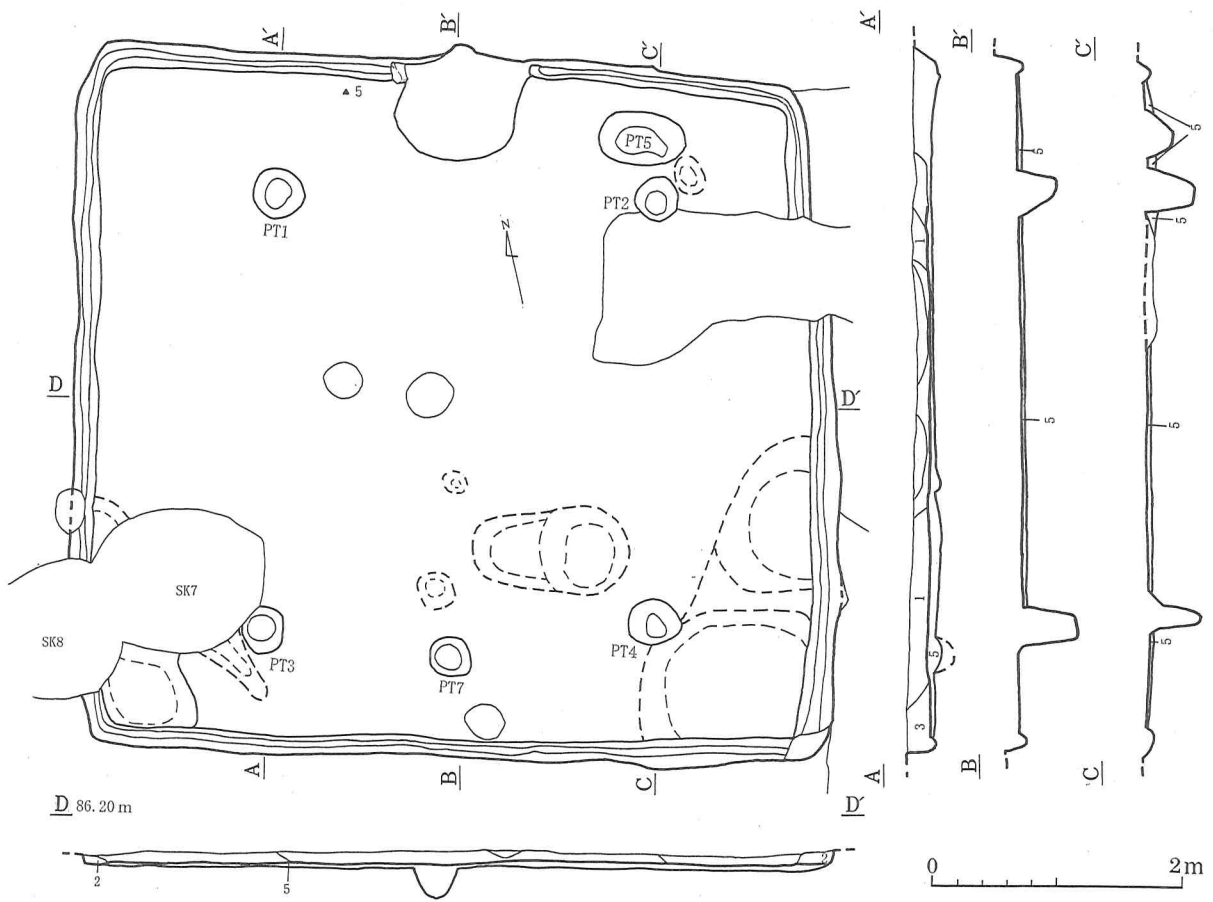
前述のような本跡の遺存状態から、遺物の出土量は非常に少ない。埋積土中より土師器片が出土したほか、北西隅の床面より所謂「編物錘石」と推察される河原石が5点まとまって出土した。また、カマド左脇（西）の壁溝内と埋積土中より凝灰岩製の砥石が各1点出土した。

SI7

1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒(φ1～3mm)15%、ローム塊(φ4～6mm)1%、焼土粒(φ1～7mm)微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
2. 黒色土(10YR1.7/1) ローム粒・塊(φ1～6mm)1%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
3. 黒色土(10YR2/1) ローム粒(φ1～3mm)微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
4. 黒色土(10YR2/1) ローム粒(φ1～3mm)3%、焼土粒(φ1～5mm)1%、灰黄褐色粘質土の混入、軟質で粘性は弱く、締りは極めて強い。
5. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・塊(φ1～20mm)20%含む、締りは強い。

SI7カマド

1. 褐灰色粘質土(10YR5/1) 焼土粒・小塊混じる(火床?)
2. 褐灰色粘質土(7.5YR5/1) 焼土粒・塊を多く含む、右端は壁の立ち上がり。
3. 灰色粘質土(5Y5/1) 炭化物粒・焼土粒(φ1～20mm)各10%混入。
4. 灰オリープ粘質土(5Y5/2) 焼土粒(φ1～3mm)5%混入。(壁)
5. 黒色のカーボン層に焼土・灰オリープ粘質土(5Y5/2)粒(φ1～8mm)10%混入。
6. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土粒(φ1～8mm)10%、灰色粘質土(5Y5/1)粒(φ3～5mm)15%混入。
7. 灰色粘質土(5Y5/1) 焼土粒・小塊(φ1～20mm)30%混入。
8. 焼け面に所々灰色粘質土(5Y5/1)が混じる。
9. 灰色粘質土(5Y5/1)、灰オリープ粘質土(5Y5/2)に焼土粒(φ1～5mm)10%、黒褐色土(10YR2/2)10%混入。
10. 灰色粘質土(5Y5/1) 焼土粒(φ1～15mm)20%、炭化物粒(φ1～5mm)10%混入。
11. 灰色粘質土(5Y5/1) 焼土粒(φ10～20mm)20%、炭化物粒25%混入。
12. 火床(赤褐色の粘質土でカーボン混じり)
13. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土粒(φ1～10mm)10%、ローム粒・小塊(φ1～30mm)20%、灰色粘質土(5Y5/1)粒(φ1～10mm)8%、カーボン10%混入。
14. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒・小塊(φ1～30mm)20%混入。
15. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・小塊(φ1～20mm)25%、焼土粒(φ1～3mm)5%混入。

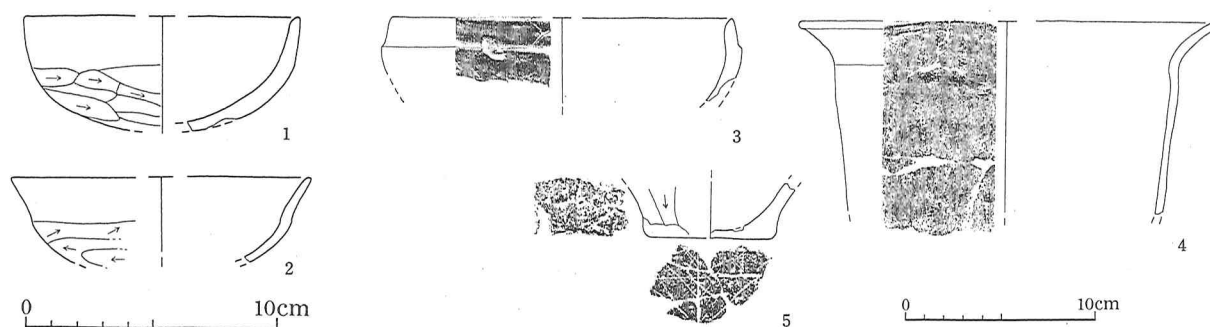


第21図 SI7・カマド

第8表 SI7遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土、e = 焼成、f = 色調

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	土師器 坏	a (10.8) b (4.7) c —	40%	外：口辺部横ナデ、体・底部へラ削り 内：横ナデ	d 砂粒少量混和 e 良好 f 橙	床直	漆処理
2	土師器 坏	a (11.8) b — c —	5%	外：口辺部横ナデ、体部へラ削り 内：横ナデ	d 砂粒少量混和 e 良好 f 浅黄橙	床直	漆処理
3	土師器 鉢	a (17.8) b — c —	5%	外：口辺部横ナデ、体部へラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒少量混和 e 良好 f 浅黄橙	床直	
4	土師器 甕	a (22.0) b — c —	10%	外：口辺部横ナデ、体部縦のへラ削り 内：口辺部横ナデ、体部横へラナ	d 長石粒多量、雲母片少量混和 e 良好 f 淡橙	カマド内	内・外面に煤付着 No.5と同一個体
5	土師器 甕	a — b — c (5.4)	3%	外：体部縦のへラ削り、底面の木葉痕(2重) 内：不明	d 長石粒多量、雲母片少量混和 e 良好 f 橙	床直	No.4と同一個体?



第22図 SI7出土遺物

SI8

遺構 (第23図、図版5)

調査区の南東部に位置し、西端部を確認したが、盛土保存が可能な位置に所在するため、平面確認に留めた。北約1mにSI5、西約2mにSB2が隣接し、南側がSI9と重複しこれに切られていた。西辺より推定される主軸方向はN-8°-Wである。

平面形、規模は前述の状況から明確にし難く、確認した南北長は約4m、東西長は1.2mであった。確認面から床面までの深さは約14cm、掘方底面までは約22cmで、貼床が施されていた。

埋積土はローム粒混じりの黒褐色土であった。

遺物は古墳時代後期の土師器甕片が3点出土したが、小片のため図示し得なかった。

SI9

遺構 (第23図、図版5)

調査区の南東部に位置し、西端部を確認したが、盛土保存が可能な位置に所在するため、平面確認に留めた。西約3.5mにSB2、南西約1mにSI7が隣接し、北はSI8と重複しこれを切っていた。南側が攪乱により失われていた。西辺より推定される主軸方位はN-18°-Wである。

平面形・規模は前記の状況から明確にし難いが、確認し得た南北長は3.3m、東西長0.4mである。

埋積土(確認面での)はローム粒・小塊混じりの黒褐色土であった。

遺物は出土しなかった。

SI10

遺構 (第23図、図版5)

調査区の南端の中ほどに確認した。北約1.2mにSI7, 東約0.5mにSK10が隣接する。大部分は調査区外に延び、北東隅の極一部を調査したに過ぎない。なお、今次調査区の南約3.5mに隣接する県埋文Sの調査区(Ⅲ区)で調査された住居跡の一部である可能性もあるが、時期的には異なるようであり検討を要する。

前述のとおり、北東隅の一部を確認し得たのみであり、本来の規模・形状は明確にし難い。確認した南北長は0.7m、東西長は0.4mで、隅は丸味を帯びる。壁は現存高20cmでやや外傾する。前記の調査状況から、柱穴、貯蔵穴、壁溝は認められなかった。床面は、調査し得た部分では、暗褐色土混じりのローム土で整地されて貼床が施され、ほぼ平坦で堅く締まっていた。

埋積土は、多量のローム粒と少量のローム塊を含む黒褐色土で、少量の焼土粒が混じる。

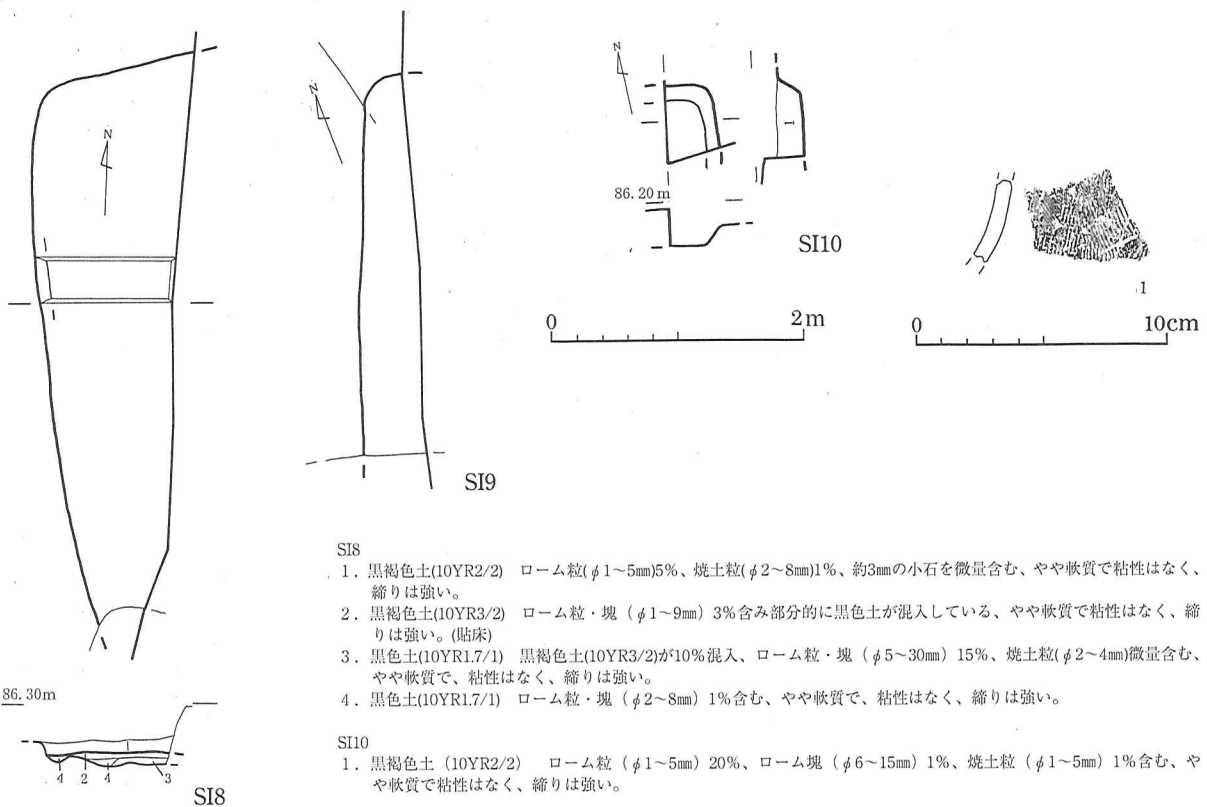
遺物 (第23図)

床面直上より土師器甕片が1片出土した。

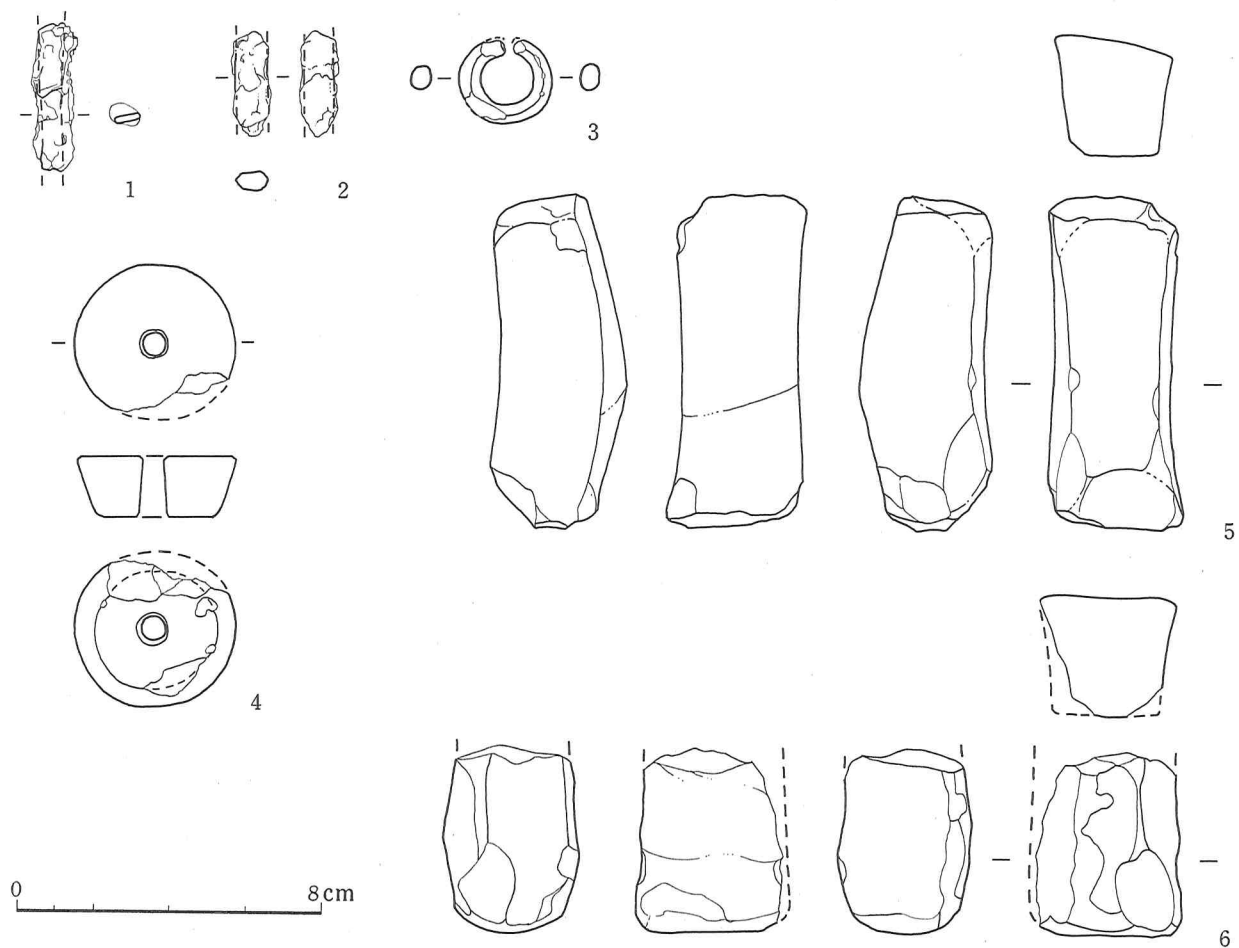
第9表 SI10遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土、e = 焼成、f = 色調

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	土師器甕	a - b - c -	3%	外：縦と斜めのクシ目 内：不明	d 粗砂粒、角閃石少量、長石微量混和 e 良好 f 橙	床直	外面に煤附着、二次火熱



第23図 SI8・9・10、SI10出土遺物



第24図 金属・石製品

第10表 金属・石製品観察表

No.	種別	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	遺存率	材質	出土位置	備考
1	鉄片	(現)3.9	1	0.17	4.9	不明	鉄	SI2・床下	前後を欠損・性格不明
2	鉄片	(現)2.8	1	0.6	2.4	不明	〃	SI3・埋土	前後を欠損・性格不明
3	耳環	長径2.5	短径2.2	0.7	6.0	95%	銅地金貼	SI3・床直	鍍金が部分的に剥落
4	紡錘車	上径4.3	下径3.3	1.6	43.0	90%	片岩	SI2・埋土	
5	砥石	8.9	3.7	3.2	134.0	95%	凝灰岩	SI7・床直	4面使用
6	砥石	(現)4.8	(現)3.8	3.2	81.0	50%	凝灰岩	SI7・埋土	3面+小口使用

第11表 編物錘石計測表

No.	遺構No.	()			長さcm	重量g
		幅+厚さ) ÷ 2 = 径cm				
1	SI1	8	4	6	11	580
2	SI1	5	4	4.5	12	430
3	SI1	9	3	6	12	530
4	SI2	6	5	5	16	630
5	SI3	7	3	5.5	17	640
6	SI3	5	3	4	16.0	450
7	SI6	5	3	4	(13.75) 6	(400) 160
8	SI6	7	4	5.5	12	510
9	SI6	7	2.0	4.5	15.0	330
10	SI7	5	4.0	4.5	14	470
11	SI7	5	3	4	11	285
12	SI7	8	2	5	12	330
13	SI7	6	5	5.5	14	680
14	SI7	5	2	3.5	13	270
15	SI7	6	5	5.5	16	630
平均値				[4.80]	[13.5]	[460]

2. 掘立柱建物跡

SB1

遺構（第25図、図版6）

調査区の北西部に位置し、西半部は調査区外に延びる。東約1.5mにSI2が隣接し、SE1、SD1、SB4と重複する。SE1、SD1より旧く、SB4との新旧関係は不明である。試掘時のトレンチが東辺南側にかかり、上部が削平された柱掘方もある。

南北4間（10.2m）、東西2間（3.4m）以上の側柱式で、南北が桁行と仮定する。桁行方位は $N-14^\circ-E$ を示す。柱掘方に重複が認められ、同位置での建て替えが行われたと推察される。柱間は、桁行が東辺北より、2.7m（9尺）+2.4m（8尺）+2.7m（9尺）、梁行は北・南辺とも東より2.7m（9尺）+ α である。

柱掘方は径30～55cmの円形で、深さ35～66cm。柱痕跡（据え方）の確認できた柱掘方から、径15cm程の柱が使用されたと推察される。

遺物は、ほとんどの柱掘方の埋積土中より、古墳時代中・後期の土師器が出土したが、図示し得るものはなかった。

SB2

遺構（第26図、図版6）

調査区の中央南寄りに位置し、SI4・6と重複するがいずれよりも新しい。南約0.5mにSI7、東約2～3.5mにSI8・9が隣接する。また、北辺の妻柱はSI4を切り、SK14に切られていた。

南北3間（6.9～7.2m）、東西2間（4.6～4.7m）の南北棟で側柱式である。本跡も、柱掘方が重複もしくは隣接するなどしており、ほぼ同規模・同位置での建て替えと推定される。

先行する2aは、桁行方位が $N-13^\circ-E$ 、柱間は桁行が東辺で2.4m（8尺）の等間隔、梁行は南辺で2.1m（7尺）の等間隔であった。柱掘方は径27～45cmの円形で、深さ26～56cm、柱痕跡（据え方）の見られた柱掘方では径15～17cmの柱を使用したと推察される。

後出の2bは、桁行方位が $N-17^\circ-E$ 、柱間は桁行が東辺で2.3m（7.7尺）の等間隔、梁行は南辺東より2.4m（8尺）+2.3m（7.7尺）のほぼ等間隔であった。柱掘方は、径28～54cmの円もしくは楕円形で、深さは32～59cm。柱痕跡（据え方）の見られた柱掘方から、径15cm程の柱材が使用されたと推察される。

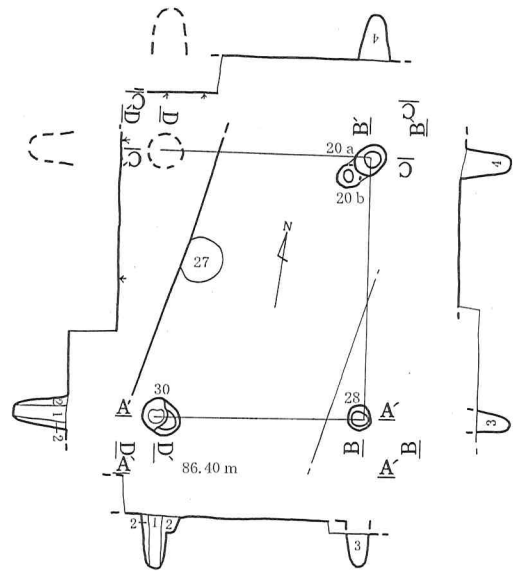
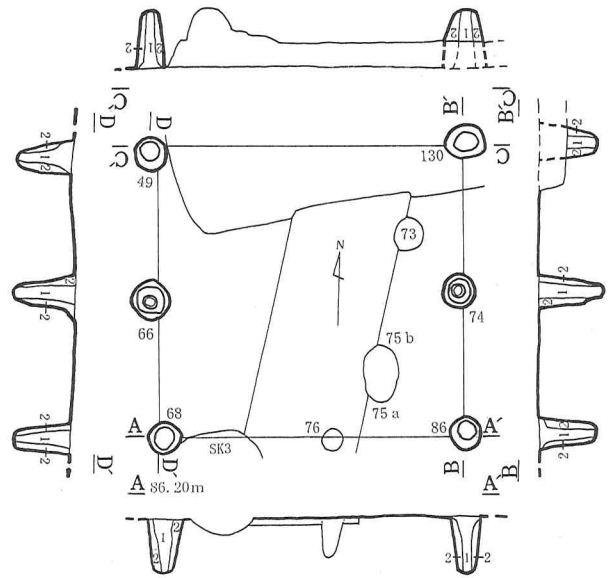
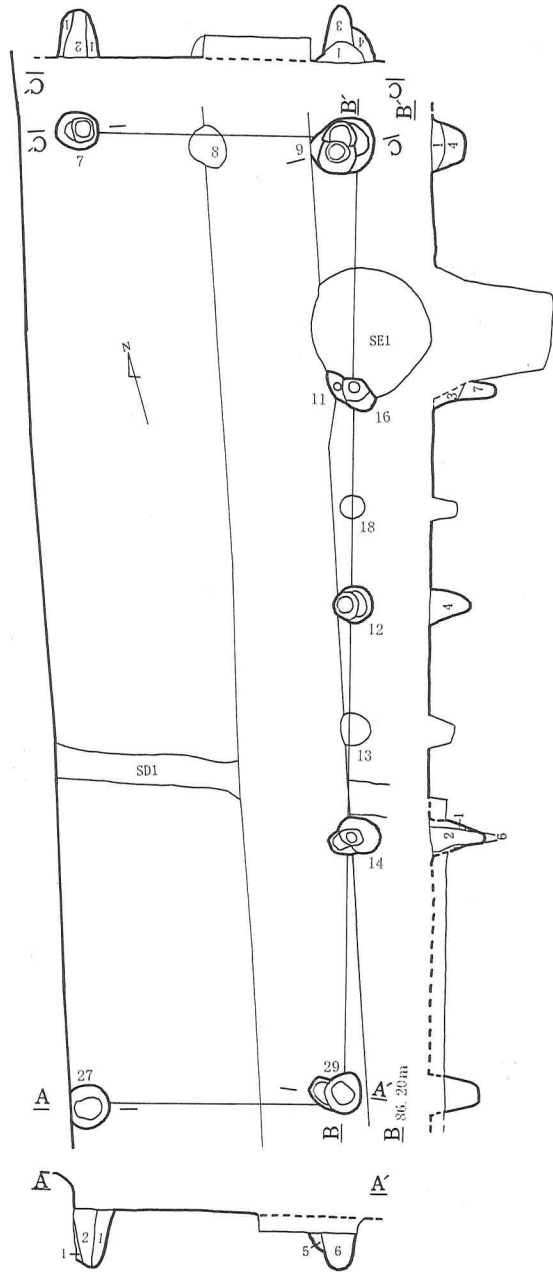
多くの柱掘方の埋積土中より、古墳時代中・後期の土師器片が出土し、須恵器小片も1片出土している。

SB3

遺構（第25図、図版6）

調査区の南西端に位置する。SI6・SK3と重複し、いずれよりも古い。また、北東約1mにSB2、東約2mにSI7が隣接し、中央部に試掘時のトレンチが南北に通る。

南北2間（3.2m）、東2間（3.2m）の方形で、側柱式に見えるが、総柱式であった可能性もある。柱間は、1.6m（5.3尺）の等間隔であった。南北の棟方位は、 $N-3^\circ-W$ を示す。柱掘方は、径31～50cmの円形、深さ50～70cmで全体に確りしている。柱痕跡（据え方）の確認できた柱掘方では径15cm前後の柱材が使用されたと推察される。



SB1

1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~10mm) 10%、ロームブロック (ϕ 11~20mm) 5% 含む、やや軟質で粘性はなく、縮りは並。
2. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒・塊 (ϕ 1~7mm) 3% 含む、やや軟質で粘性はなく、縮りは並。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~9mm) 10%、ロームブロック (ϕ 11~20mm) 5% 含む、軟質で粘性はなく、縮りは並。
4. 黒色土 (10YR2/1) 黒褐色土 (10YR3/2) が 20%、ローム粒 (ϕ 1~3mm) 3%、焼土粒 (ϕ 1~3mm) 1% 含む、やや軟質で粘性はなく、縮りは並。
5. にぶい黄橙色土 (10YR7/4) 黒褐色土 (10YR2/2) 20% 混入、やや軟質で粘性はなく、縮りは弱い。
6. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~7mm) 3% 含む、やや軟質で粘性はなく、縮りは並。
7. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (ϕ 1~6mm) 7%、赤色スコリア (ϕ 1~5mm) 微量含む、やや軟質で粘性は無く縮りは並。

SB3

1. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒・塊 (ϕ 1~9mm) 20% 含む、やや軟質で粘性はなく、縮りは強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~30mm) 10% 含む、やや軟質で粘性はなく、縮りは並。

SB4

1. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒・塊 (ϕ 1~9mm) 20% 含む、やや軟質で粘性はなく縮りは強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~10mm) 10%、ロームブロック (11~30mm) 1% 含む、やや軟質で粘性はなく縮りは並。
3. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 3% 含む、やや軟質で粘性はなく縮りは並。
4. 黒色土 (10YR1.7/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 1% 含む、やや軟質で粘性はなく縮りは弱い。

第25図 SB1・3・4

遺物は、柱掘方の埋積土より、古墳時代中・後期の土師器小片が出土している（第28図）。

SB4

遺構（第25図）

調査区中程の西端に位置し、北西部は調査区外に延びる。位置的にはSB1の南辺と重複するが掘方どうしの切り合いが無く、新旧関係は不明である。南約0.7mにSK13、東約3mにSB2が隣接する。

1×1間と推定され、南北2.7m（9尺）、東西2.1m（7尺）である。南北の棟方位はN-8°-Wを示す。柱掘方は、径25～29cmの円形、深さ31.4～61cmで、北東のP20、南東のP30はそれぞれ重複が見られ、建て替えの存在が推察される。P30の埋積土中より古墳時代中期の土師器片が出土している。

3. 小穴（第12表）

今次調査では調査区の全域より計130口の小穴を確認した。平面形は径23～60cmの円もしくは楕円形であるが、深さ5～74cmと様々である。各小穴の計測値は第12表に示した通りである。これらのうち30余口は掘立柱建物跡として想定できたが他のものについては想定できなかった。埋積土中より古墳時代中・後期の土師器片が出土したものが38口あり、小片ながら須恵器片の出土したものもあるが、おおむね該期の遺構と推察される。51街区の他の調査区でも多くの小穴が確認されたが、掘立柱建物跡として想定でき無いものも多く性格については不明とする。

4. 土坑

今次調査では計11基の土坑を確認した。これらは、調査区の中程から南寄りに分布し、南端部では円形の土坑が比較的密に見られた。いずれの土坑からも古墳時代中・後期の土師器片が出土し、少量ながら須恵器も出土しているが、すべてが該期とは判断し難い。

SK1

遺構（第27図、図版7）

調査区のほぼ中央に位置し、東約1.1mにSI3、北約2mにSI2、西約2.6mにSB1、南約1mにSD1が隣接する。また、本跡の北にP23が接し、中央やや南寄りにP115があり、ともに本跡が切っていた。

平面は径約1.2mの円形、壁は現存高15cmでほぼ直立する。底面はローム漸移層中にあり、径1.1mのほぼ円形で、おおむね平坦であった。

埋積土は、ローム粒を微量含む黒褐色土であった。

遺物は、埋積土中より古墳時代中・後期の土師器片が約20片と須恵器坏片が1点出土した（第28図）。埋積土の状況から本跡の時期を示すものとは思われない。

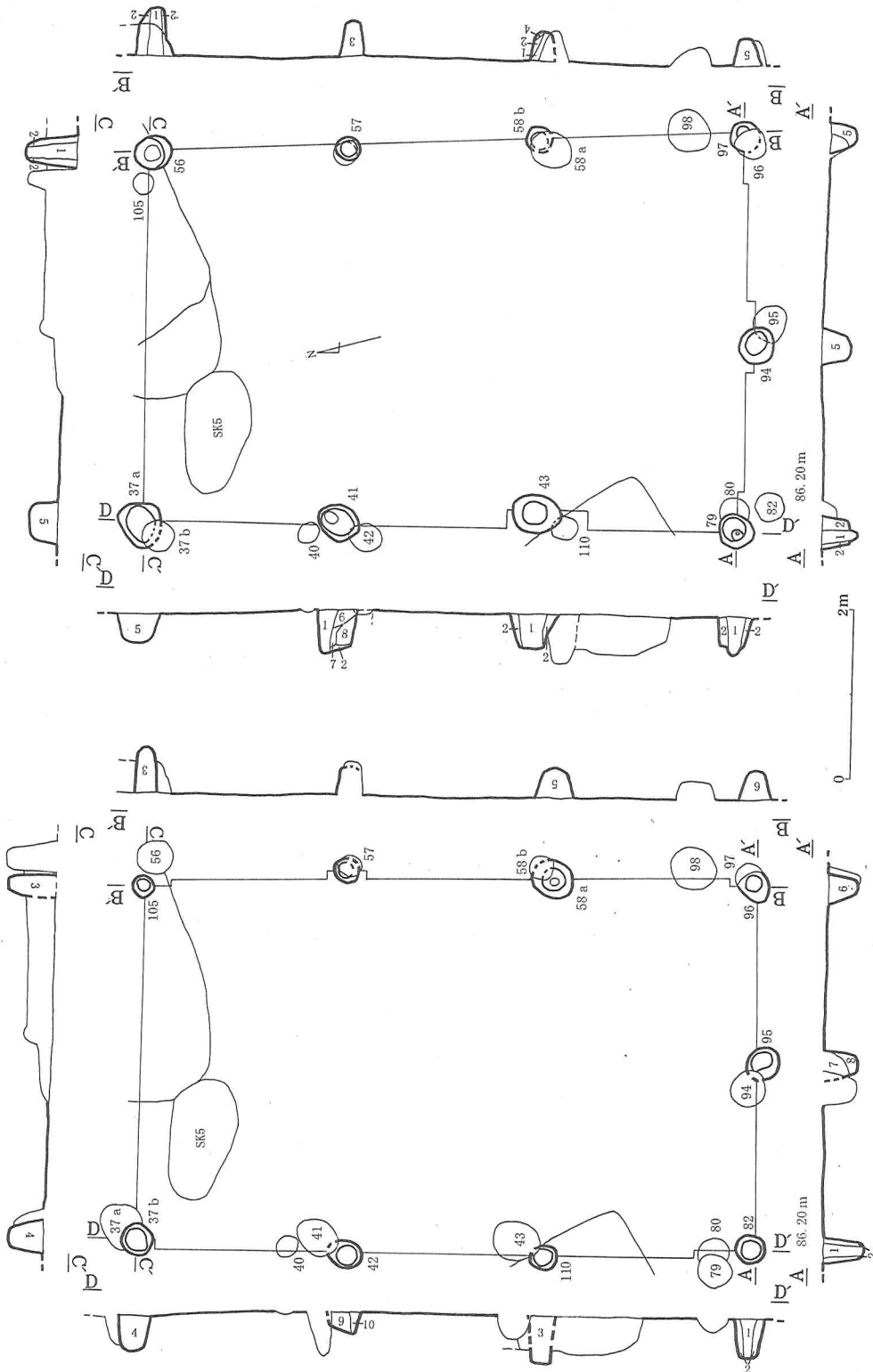
SK2

遺構（第27図、図版7）

調査区の中央南寄りに位置する。SB2の中央付近に所在し、北約2mにSK5、西約2.5mにSI6が隣接する。埋積土中には西壁に接するようにP60が掘り込まれていたが、底面までは到らない。

平面は、径0.8×0.85mのほぼ円形、壁は現存高23cm程で北西部は直立に近いが南東部はやや外傾していた。底面はローム層中にあり、径0.58×0.67mのほぼ円形で、おおむね平坦であった。

埋積土は、2層に大別され、東寄りの底面にローム粒・塊を含む黒色土、他はローム粒・塊を少量含む黒褐色土であった。



- SB2
1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (φ1~9mm) 20% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (φ1~10mm) 10%、ロームブロック (φ11~30mm) 1% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 3. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (φ1~10mm) 10%、ロームブロック (φ11~20mm) 1% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 4. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (φ1~9mm) 5%、ロームブロック (φ11~15mm) 1% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 5. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (φ1~10mm) 15%、ロームブロック (φ11~30mm) 3% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 6. 暗褐色土 (10YR2/3) ローム粒・塊 (φ1~10mm)、ロームブロック (φ11~30mm) 3% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 7. 暗褐色土 (10YR2/3) ローム粒・塊 (φ1~10mm) 10%、ロームブロック (φ11~30mm) 30% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 8. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (φ1~10mm) 15%、ロームブロック (φ11~30mm) 3% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 9. 暗褐色土 (10YR2/3) ローム粒・塊 (φ1~10mm) 10%、ロームブロック (φ11~30mm) 30% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
 10. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (φ1~6mm) 10% 含む、やや軟質で粘性はなく、締りは弱い。

第26図 SB2a・2b

第12表 小穴計測表

() = 推定値、単位=cm

No.	長径	短径	深さ	備考	No.	長径	短径	深さ	備考
1	37	37	9		66	41	40	10	SB3
2	43	29	24		67	30	25	17	
3 a	30	30	10		68	35	35	58	SB3
3 b	34	30	11		69	30	30	14	
4	34	37	9		70	25	25	16	
5	60	55	12		71	45	37	36	
6	38	30	11		72	40	(30)	41	
7	45	40	50	SB1	73	40	30	21	
8	48	40	29		74	35	35	74	SB3
9	70	55	58	SB1	75 a	35	30	48	
10	45	27	45	SB1	75 b	55	40	26	
11	50	25	41	SB1	76	25	25	37	
12	40	37	28	SB1	77	30	28	16	
13	35	33	26		78	35	35	24	
14	55	40	60	SB1	79	40	40	45	SB2
15	43	30	22		80	35	35	15	SB2
16					81	32	30	10	
17					82	35	35	45	SB2
18	26	25	31		83	42	37	51	
19	28	26	27		84	35	35	14	
20 a	35	29	48	SB4	85	30	30	17	
20 b	26	25	31	SB4	86	35	34	62	SB3
21	25	22	29		87	37	37	52	
22					88	25	25	16	
23	30	26	24		89	27	25	19	
24					90	35	35	10	
25					91	25	18	37	
26	60	56	12		92	28	24	26	
27	50	40	51	SB1	93	30	30	30	
28	25	25	36	SB4	94	40	40	40	SB2
29	(45)	(30)	54	SB1	95	40	37	39	SB2
30	40	35	61	SB4	96	40	40	35	SB2
31					97	35	35	31	SB2
32	50	45	16		98	55	50	23	
33	35	30	54		99	40	35	25	
34	36	30	27		100	34	27	10	
35					101				
36 a	30	30	19		102	35	25	57	
36 b	34	34	24		103	20	17	40	
37 a	55	(55)	34	SB2	104	25	25	-	
37 b	40	40	38	SB2	105	26	26	5	SB2
38	30	30	9		106				
39	26	24	25		107				
40	30	25	6	SB2	108				
41	54	42	52	SB2	109				
42	40	32	25	SB2	110	30	25	33	
43	57	45	42	SB2	111				
44	30	27	19		112	35	30	19	
45	30	30	24		113	30	30	11	
46	30	30	25		114				
47	23	23	17		115	30	30	9	
48	34	30	35		116	47	(35)	31	
49	35	35	60	SB3	117	20	15	13	
50	25	25	65		118	35	30	21	
51	30	30	30		119	45	38	25	
52	20	20	9		120	33	33	25	
53					121	(80)	(50)	31	
54					122	43	(40)	18	
55	30	30	14		123	35	30	39	
56	45	40	44	SB2	124	30	27	40	
57	30	28	41	SB2	125				
58 a	30	30	37	SB2	126	30	27	67	
58 b	50	45	32	SB2	127				
59					128	40	(40)	20	
60	(30)	(25)	18		129	50	(45)	15	
61	32	30	32		130	45	35	33	
62	27	26	41		131	34	34	10	
63	37	30	40		132	30	(30)	11	
64 a	40	30	30		133	32	32	12	
64 b	35	(30)	15		134	12	12	30	
65	40	37	29						

遺物は、埋積土中より古墳時代中・後期の土師器片が15片程出土している。

SK3

遺構（第27図、図版7）

調査区の南西端部に位置し、南西約1.8mにSK4、北約2mにSI6が隣接する。北西部がSB3の柱掘方と接し、これを切っていた。また、埋積土の西寄りにはP134が掘り込まれていたが、底面までは到らない。

平面は、径1.2×1.25mのほぼ円形、壁は現存高18～20cmで、底面から一旦緩やかに立ち上がった後、比較的急傾斜で立ち上がる。上部は失われているが、上方が内湾していた可能性もある。底面はローム層中にあり、径0.8×0.9mの不整形円形で、ほぼ平坦であった。

埋積土は2層に大別され、上層がローム粒・塊を極少量含む暗褐色土、下層はローム粒・塊を極少量含む黒褐色土で締りが強い。

遺物は、埋積土中より古墳時代中・後期の土師器片23片と須恵器片4片が出土した（第28図）。

SK4

遺構（第27図）

調査区の南西端に位置し、西端の一部は地区外に延びる。北東約1.8mにSK3、同約2.5mにSB3が隣接する。北西壁に接してP72があり、これを切っていた。

平面は径約0.95mの円形と推定される。深さ45cm程で壁は大きく外傾している。底面はローム層中にあり、径0.6×0.68mの不整形円形で、中央に向かって緩やかに傾斜して、また中央部が25×32cmの楕円形に5cm程の深さで窪んでいた。

埋積土は2層に大別され、上層はローム粒を極少量含む黒褐色土で下層はこれにローム粒・塊が60%ほど混じる。

遺物は、埋積土中より古墳時代中・後期の土師器10片と弥生式土器小片が2片出土している（第28・29図）。

SK5

遺構（第27図、図版7）

調査区の中央南寄りに位置する。SB2の北西隅近くに所在し、東側はSK14、P5、131などと重複しており、これらに切られていた。東約1mにはSI2、南約2mにSK2が隣接する。

平面は東西長1.2m以上、南北長0.65～0.8mの不整形楕円形である。壁は外傾して立ち上がり、深さは22cm。図に示すように複数の遺構の重複が認められた。最初に径約0.6mのほぼ円形で、深さ（確認面より）32～34cmの5aが掘られ、その上に東西長1.2m以上、南北長0.65～0.8mの不整形楕円形の5bが掘り込まれ、この埋没後にP5、P131が掘り込まれるが両者の新旧関係は不明である。

埋積土は、5aが2層に大別され上層がローム粒・塊を少量含む黒褐色土、下層が黒色土とともに締りが強い。5bはローム・塊を極少量含む黒色土で締りが強い。

遺物は、埋積土中より古墳時代中・後期の土師器片が26片出土した。

SK7

遺構（第27図、図版7）

調査区南端の中程に位置し、SI7、SK8と重複しこれらを切っていた。

平面は径約1.2×1.4mの不整形楕円形である。深さ37cm程で、底面の外周が緩やかに立ち上がった後、壁は比較的急な傾斜で立ち上がる。なお、本跡は上部がSI7の埋積土中にあり、SI7そのものも上部が

整地によって削平されていて明確にし難いが、本来は上部が内湾していた可能性をもつ。底面はローム層中にあり、径0.6×0.9mの不整楕円形で、ほぼ平坦であった。

埋積土は2層に大別され、下層が黒色土と黒褐色土でローム粒・塊を少量含み、上層（大部分）はローム粒・塊を多く含む黒褐色土で締りは強い。

遺物は、埋積土中より古墳時代中・後期の土師器15片と須恵器坏細片が1片出土した（第28図）。

SK8

遺構（第27図、図版7）

調査区南端の中央やや西寄りに位置し、SI7、SK7と重複しており、SI7を切り、SK7に切られていた。

平面は、開口部の径が約1.1mのほぼ円形である。深さは45cm程で、底面の外周が緩やかに立ち上がった後、壁は内湾して立ち上がり、最大径は1.2m程である。底面はローム層中にあり、径（内側）約0.8mでほぼ平坦であった。

埋積土は3層に大別され、上層はローム粒・塊を多く含む黒褐色土、中層はローム粒・塊混じりの黒色土、下層がローム粒・塊を多く含む黒褐色土で、全体に締りが強い。

遺物は、埋積土中より古墳時代中・後期の土師器片が34片、須恵器片が1片出土した（第28図）。

SK10

遺構（第27図、図版7）

調査区南端の中央やや東寄りに位置し、南側の一部は調査区外に延びる。北約0.8mにSI7、西約0.7mにSI10が隣接する。

平面は、径0.95×1.1mのほぼ円形である。深さ55cm程で、底面の外周が緩やかに立ち上がった後、壁は内傾して立ち上がり、最大径は1×1.15mである。上面は整地により削平されているが、本来は開口部に向かって全体が内傾（湾）していたと推察される。底面はローム層中にあり、径（内側）1.1mのほぼ円形で、おおむね平坦であった。

埋積土は3層に大別され、上層はローム粒・塊を多く含む黒褐色土で全体に締りが強い。

遺物は、埋積土中より古墳時代後期の土師器片23片と須恵器片4片程が出土した（第28図）。

SK11

遺構（第27図）

調査区南西部の東端に位置し、東半部は調査区外に延びる。西約30cmにSI7が隣接し、北端は重機による填圧で攪乱を受けていた。

平面は、径1.5m程の円形と推定される。深さ25cm程で、底面の外周が緩やかに立ち上がった後、壁は内湾気味に立ち上がる。上部が削平や填圧を受けており、内湾状態を確認できたのは南西部のみであるが、本来は全体が内湾していたと推定される。底面はローム層中にあり、径（内側）1m程の円形と推定され、おおむね平坦であった。

埋積土は2層に大別され、上層はローム粒・塊を多く含む黒褐色土、下層は南寄りにローム粒・塊を多く含む黒色土が見られ全体に締りが強い。

遺物は、埋積土中より古墳時代中・後期の土師器片11片と須恵器片2片が出土した（第28図）。

SK13

遺構（第27図、図版7）

調査区の南西部に位置し、北約0.5mにSB4、約2mにSB1、南約2.8mにSI6が隣接する。

平面は径0.6×0.7mのほぼ円形で、壁は外傾し、深さ約25cm。底面も径0.4×0.5mのほぼ同形で、ロ

ーム層中にあり、おおむね平坦であった。

埋積土は2層に大別され、上層はローム粒・焼土粒を微量含む黒色土、下層はローム粒・塊混じりの黒褐色土で、焼土粒を微量含み、締りは強い。

遺物は、埋積土中より古墳時代中・後期の土師器片が13片出土した（第28図）。

SK14

遺構（第27図、図版13）

調査区の中央やや南寄りに位置し、SK5、SI4、SB2と重複するが、これらのいずれよりも新しい。東半部はSI4の埋積土中にありやや不明瞭である。

平面は径約1.4mの円形と推定され、深さ14～18cmで、壁は外傾する。底面はローム漸移層中にあり、径1.2mの円形で、中央に向かって緩やかに下降する。

埋積土はローム粒・塊少量、焼土粒・塊、炭化物粒を微量含む黒褐色土で締りは強い。

遺物の出土は無かった。

5.井戸跡

今次調査で確認した井戸跡は1基のみである。

SE1

遺構（第27図、図版6）

調査区の中央やや北寄りに位置し、SB1と重複しこれを切っていた。東約2mにSI2、南東約3.5mにSK1が隣接する。西側の上部は試掘調査時のトレンチで切られていた。

平面は、上面が径1.3m程の円形と推定される。断面は上部の30cm程がやや外傾するが、径1m程の筒状である。中央での深さは約1.3m、底面は小礫混じりの砂質粘土層中にあり、中央に向かって緩やかに下降する。北側の底面上約10cmより長さ35cm、径18cm程の細長い河原石が1点出土したが、人為的痕跡が認められない自然石であった。

埋積土は、上位が明黄褐色土に暗褐色土が30%程混入する人為的埋没である他は、黒色土、黒褐色土を主体とした自然埋没であった。

遺物は埋積土中より約110片出土した。土師器はいずれも小片で古墳時代中期と思われるもの10片、同後期と推定されるもの50片の他、いずれとも決め難いものが50片程あった（第28図）。いずれも本跡の時代を示すものではないと判断される。

6.溝跡

今次調査では調査の中央部を東西に延びる1条を確認したのみである。

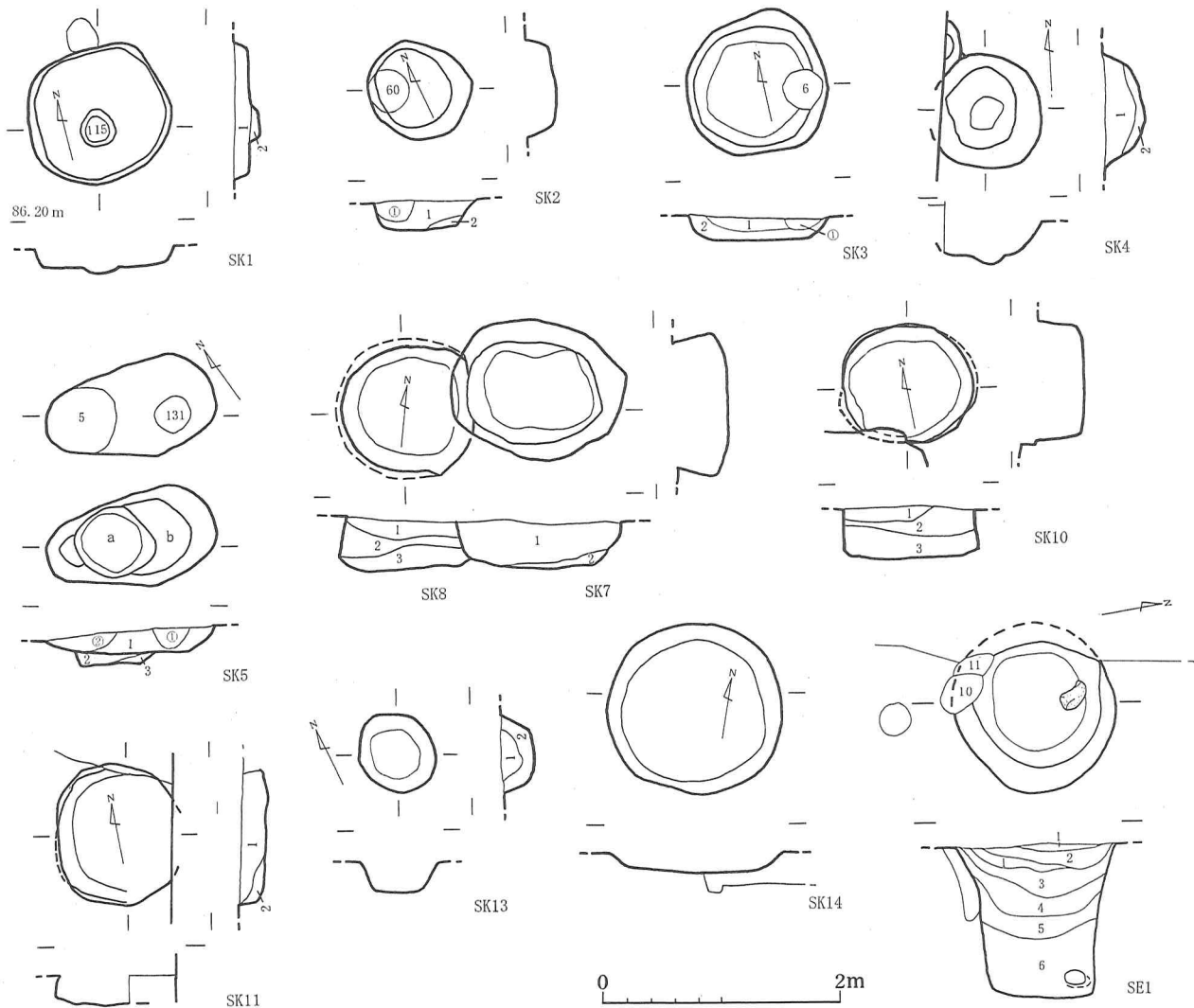
SD1

遺構（第4・15図）

調査区の中央部を東西に延び、長さ10m程を確認した。西は調査区外に伸びるが、東はSI4のカマドを切っており、それより先は不明となる。幅30～60cm、深さは5～20cmで、断面はU字形であった。

埋積土は、ローム粒を極少量含む黒褐色土で、締りは強い。

遺物は、古墳時代中・後期の土師器片65片、須恵器片4片と近世の磁器碗の破片が1片出土しており、近世以降の溝と判断した。



SK1

1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 1%、ローム塊 (ϕ 4~15mm) 7%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。

SK2

1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~5mm) 3%、赤色スコリア (ϕ 1~3mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
2. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 20%、ローム塊 (ϕ 4~20mm) 10%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
- ① P60 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~5mm) 3%、赤色スコリア (ϕ 1~3mm)、黄白色スコリア微量含む。やや軟質で粘性はなく、締りは並。

SK3

1. 暗褐色土 (10YR2/3) ローム粒 (ϕ 1~4mm) 3%、ローム塊 (ϕ 5~20mm) 1%、赤色スコリア (ϕ 1~3mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 1%、ローム塊 (ϕ 5~30mm) 1%、赤色スコリア (ϕ 1~3mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
- ① P135 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 3%、ローム塊 (ϕ 4~7mm) 1%、赤色スコリア (ϕ 2~4mm) 微量含む、粘性はなく、締りは強い。

SK4

1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~4mm) 3%、赤色スコリア (ϕ 1~3mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは並。
2. 1とロームの4:6の混合土。赤色スコリア (ϕ 3~6mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。

SK5

1. 黒色土 (10YR1/7/1) ローム粒・塊 (ϕ 1~5mm) 5%含む、粘性はなく、締りは強い。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒・塊 (ϕ 1~5mm) 15%、橙色スコリア粒 (ϕ 2~4mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
3. 黒色土 (10YR1/7/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 1%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
- ① P131 黒色土 (10YR2/1) ローム粒・塊 (ϕ 1~10mm) 10%、橙路スコリア粒・塊 (ϕ 2~6mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
- ② P5 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 3%、橙色スコリア粒・塊 (ϕ 1~6mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。

SK7

1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 15%、ローム塊 (ϕ 4~20mm) 5%、ロームブロック (ϕ 21~50mm) 3%、赤色スコリア (ϕ 4~7mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
2. 黒色土 (10YR2/1) と黒褐色土 (10YR2/2) 5:5の混合土。ローム粒 (ϕ 1~3mm) 5%、ローム塊 (ϕ 4~20mm) 1%含む、赤色スコリア (ϕ 1~4mm) 微量含む、粘性はなく、締りは強い。

第27図 土坑・井戸跡

SK8

1. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 30%、ローム塊 (ϕ 4~20mm) 7%、赤色スコリア (ϕ 2~6mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 2. 黒色土 (10YR1.7/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 10%、ローム塊 (ϕ 4~25mm) 5%、赤色スコリア (ϕ 1~5mm) 1%含む、粘性はなく、締りは強い。
 3. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 20%、ローム塊 (ϕ 4~25mm) 10%含む、粘性はなく、締りは強い。

SK10

1. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 30%、ローム塊 (ϕ 4~20mm) 7%、赤色スコリア (ϕ 2~6mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 2. 黒色土 (10YR1.7/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 10%、ローム塊 (ϕ 4~25mm) 5%、赤色スコリア (ϕ 1~5mm) 1%含む、粘性はなく、締りは強い。
 3. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 20%、ローム塊 (ϕ 4~25mm) 10%含む、粘性はなく、締りは強い。

SK11

1. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 30%、ローム塊 (ϕ 4~20mm) 7%、赤色スコリア (ϕ 2~6mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 2. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒・塊 (ϕ 1~20mm) 5%、ロームブロック (ϕ 21~50mm) 20%含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。

SK13

1. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~2mm) 3%、焼土粒・塊 (ϕ 1~12mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。
 2. 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒・塊 (ϕ 1~20mm) 15%、橙色スコリア粒・塊 (ϕ 1~7mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。

SK14

1. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒 (ϕ 1~3mm) 5%、ローム塊 (ϕ 4~7mm) 1%、焼土粒・塊 (ϕ 1~5mm) 3%、炭化物粒・塊 (ϕ 3~6mm) 微量含む、やや軟質で粘性はなく、締りは強い。

SE1

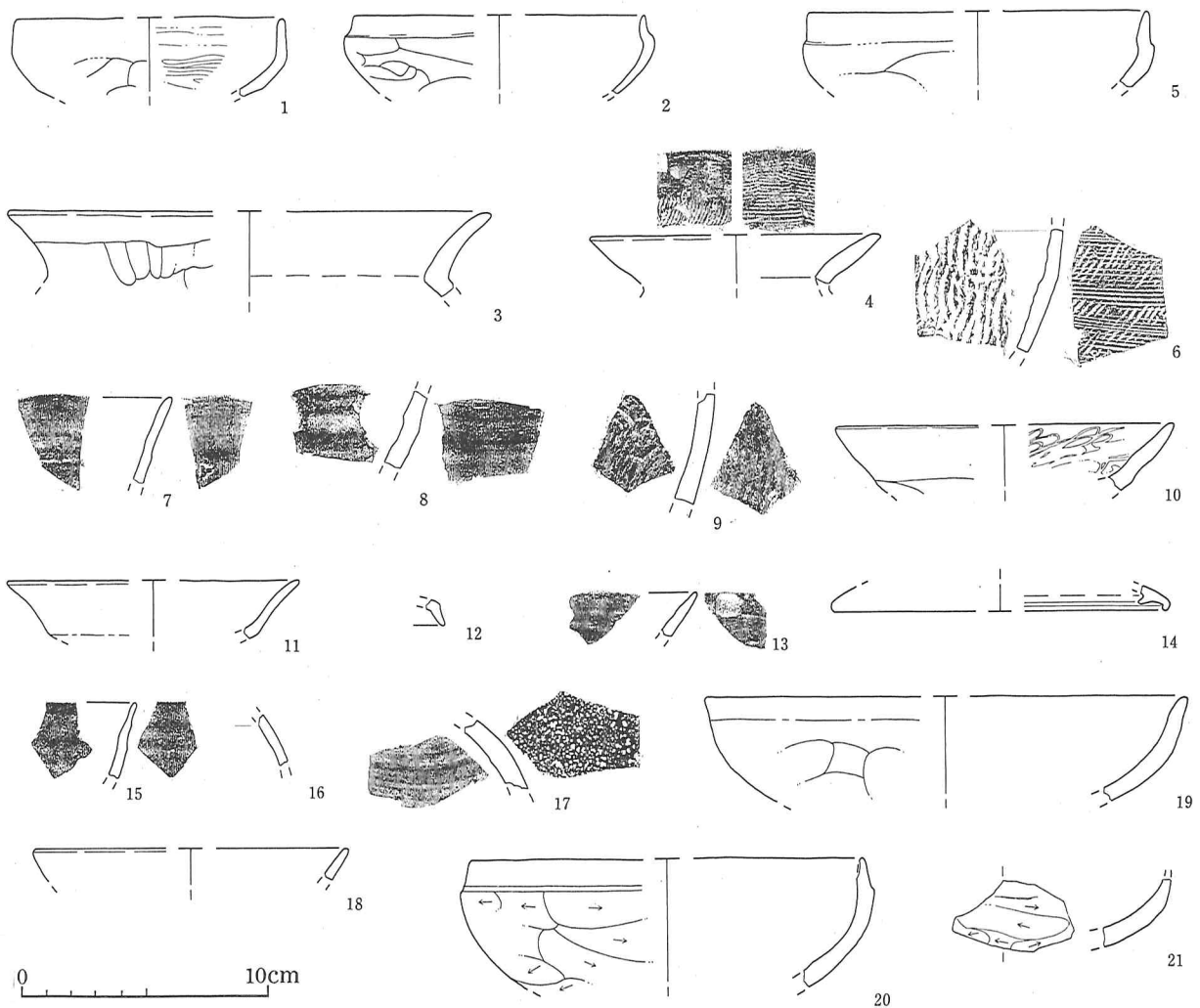
1. 黄褐色土(10YR7/6) ローム粒・塊・ブロックと黒褐色土 (10YR3/2) の7:3の混合土、粘性はなく締りは強い。
 2. 色土(10YR2/1) ローム粒・塊 (ϕ 1~10mm) 4%含む、灰黄褐色粘質土 (10YR5/2) が10%混入している。軟質で粘性はなく締りは弱い。
 3. 黒色土(10YR1.7/1) 赤色スコリア粒 (ϕ 1~2mm) 微量含む、やや軟質で粘性は無く締りは並。
 4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム塊 (ϕ 4~7mm) を部分的に微量含む、赤色スコリア粒 (ϕ 1~2mm) 微量含む、軟質で粘性は弱く締りは弱い。
 5. 黒色土 (10YR1.7/1) ローム塊 (ϕ 4~7mm) 1%含む、軟質で粘性はなく締りは弱い。
 6. 黒褐色土 (10YR3/2) ロームの混入が見られる、軟質で粘性はなく締りは弱い、水が湧き出てくる。

第13表 小穴・土坑・井戸跡遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土・焼成・色調

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	土師器 坏	a (11.0) b - c -	8%	外：口辺部横ナデ、体部ヘラ削り 内：横ナデ後横のミガキ	d 砂粒少量混和 e 良好 f 淡橙	P51	漆処理
2	土師器 坏	a (12.0) b - c -	8%	外：口辺部横ナデ、体部ヘラ削り 内：横ナデ	d 粗砂粒少量混和 e 良好 f 淡橙	P86	
3	土師器 甕	a (20.0) b - c -	3%	外：口辺部縦のヘラ削り、後上位横ナデ 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和赤色粒少量含む e 良好 f 淡橙	P73	
4	土師器 甕	a (12.0) b - c -	3%	外：口辺部斜めのクシ目、後横ナデ 内：口辺部横のクシ目	d 粗砂粒少量混和 e 良好 f 淡黄橙	P93	口辺に煤付着
5	土師器 坏	a (14.0) b - c -	5%	外：口辺部横ナデ、体部ヘラ削り 内：横ナデ	d 砂粒少量混和 e 良好 f 淡橙	P119	漆処理
6	須恵器 甕類	a - b - c -		外：平行叩き目、後クシ目 内：同心円文当て具痕	d 砂粒少量混和 e 良好 f 灰	P51	
7	須恵器 坏	a - b - c -	5%	ロクロ成形	d 砂粒少量混和 e 良好 f 灰	sk1埋	
8	須恵器 瓶類	a - b - c -		ロクロ成形	d 砂粒微量含む e 良好 f 灰	SK3埋	
9	須恵器 甕類	a - b - c -		ロクロ成形 外：平行文叩き目をナデ消す 内：同心円文当て具痕をナデ消す	d 砂粒少量混和 e 良好 f 青灰	SK3埋	
10	土師器 坏或は 高坏	a (14.0) b - c -	8%	外：口辺部横ナデ、体部ヘラ削り 内：横ナデ後、斜めのミガキ	d 砂粒少量混和 e 良好 f 暗褐	SK4埋	
11	土師器 坏	a (12.0) b - c -	5%	外：口辺部横ナデ、体部ヘラ削り 内：横ナデ	d 砂粒微量含む e 良好 f 外橙 内黒	SK7埋	漆処理
12	須恵器 蓋	a - b - c -		ロクロ成形	d 砂粒微量含む e ややあまい f 褐灰	SK7埋	
13	須恵器 坏	a - b - c -		ロクロ成形	d 砂粒微量含む e 良好 f 灰	SK8埋	
14	須恵器 蓋	a (7.0) b - c -		ロクロ成形	d 砂粒微量含む e 良好 f 灰	SK10埋	外面に自然釉淡緑色
15	須恵器 坏?	a - b - c -		ロクロ成形	d 砂粒少量混和 e 良好 f 褐灰	SK10埋	

16	須恵器 甕	a - b - c -		ロクロ成形	d 砂粒少量混和 e 良好 f 灰	SK10埋	
17	須恵器 瓶類	a - b - c -		ロクロ成形	d 粗砂粒少量混和 e 良好 f 灰	SK11埋	外面に自然釉暗緑色
18	須恵器 杯	a (13.0) b - c -	5%	ロクロ成形	d 砂粒微量含む e 良好 f 灰	SK11埋	
19	土師器 鉢	a (20.0) b - c -	8%	外：口辺部横ナデ、体部へら削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和 e 良好 f 淡橙	SK13埋	
20	土師器 鉢	a (17.0) b - c -	8%	外：口辺部横ナデ、体部へら削り 内：横ナデ	d 粗砂粒多量混和 e ややあまい f 淡黄橙	SE1埋	二次火熱、器面荒れる
21	土師器 杯	a - b - c -	5%	外：口辺部横ナデ、体部へら削り 内：横ナデ	d 砂粒少量混和 e ややあまい f 淡黄橙	SE1埋	漆処理



第28図 小穴・土坑・井戸跡出土遺物

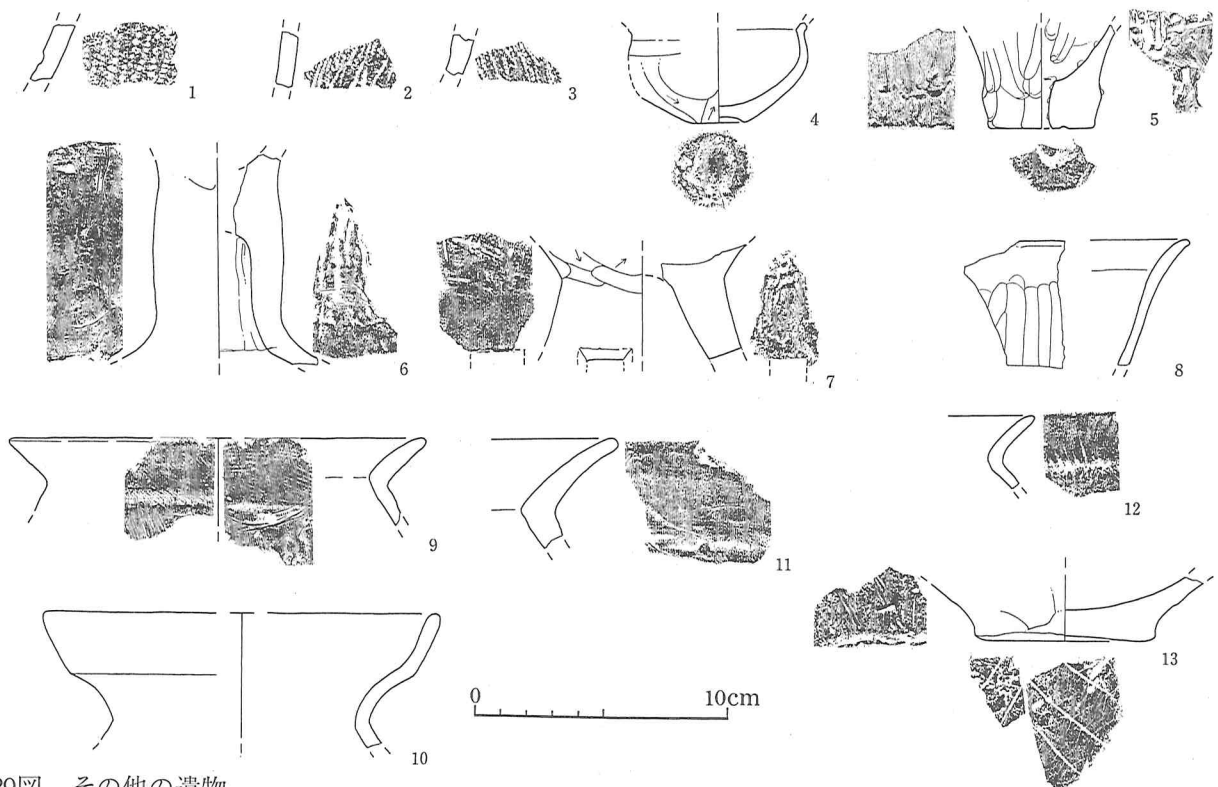
7. 調査区内出土遺物 (第29図)

各遺構より出土した土器のうち先行する時期のものをその他の出土遺物として取り上げた。縄文時代、弥生時代、古墳時代中期のものがあり、小片の為に誤認があるやもしれない。

第14表 その他の遺物観察表

() = 推定値、a = 口径、b = 器高、c = 底径、d = 胎土、e = 焼成、f = 色調

No.	種別	寸法cm	遺存率	手法等	胎土・焼成・色調	出土位置	備考
1	縄文式 土器	a - b - c -		外：単節縄文	d 粗砂粒多量混和、雲母少量含む e 良好 f 淡赤褐	SI4埋	
2	弥生式 土器 甕	a - b - c -		外：付加条1種の縄文 内：ナデ	d 粗砂粒少量混和 e 良好 f 淡黄橙	SK4埋	
3	弥生式 土器 甕	a - b - c -		外：付加条1種の縄文 内：ナデ	d 粗砂粒少量混入 e 良好 f 淡黄橙	SK4埋	
4	土師器 埴	a - b - c 2.0	50%	外：体・底部ヘラ削り後粗いミ ガキ 内：ヘラナデ	d 粗砂粒混和、長石、角閃石含む e 良好 f 淡橙	SI1埋	内面の器面荒れる
5	土師器 甌	a - b - c (3.8)	8%	外：体部縦のヘラナデ、底部ナ デ仕上げ 内：クシ目、ヘラナデ	d 粗砂粒混和 e 良好 f 上位黄橙、中・下位黒褐・暗褐	SI6埋	単孔式
6	土師器 高坏	a - b - c -	10%	外：不明 内：上位中実、下位しぼり	d 粗砂粒少量混入 e 良好 f 暗褐	SI4埋	
7	土師器 高坏	a - b - c -	10%	外：坏部ヘラ削り、脚部ナデ 内：脚部粗いナデ	d 粗砂粒多量、赤色粒少量混和 e 良好 f 淡橙	SD1埋	脚部に透かし孔 (長方形)
8	土師器 高坏?	a - b - c -	8%	外：口辺部横ナデ、体部縦のミ ガキ 内：横ナデ後ミガキ	d 粗砂粒少量混和 e 良好 f 黒褐、黒	SI7埋	
9	土師器 甕	a (16.7) b - c -	5%	外：斜めのクシ目 内：口辺部横・斜めのクシ目、 体部ナデ	d 粗砂粒少量混和 e 良好 f 淡赤褐	SI7埋	
10	土師器 壺	a (16.0) b - c -	5%	外：口辺部横ナデ 内：同上	d 粗砂粒少量混入 e 良好 f 黒褐	SI4埋	
11	土師器 甕	a - b - c -	3%	外：口辺部横ナデ 内：同上	d 粗砂粒少量混入 e 良好 f 外黄橙、内暗褐	SI4埋	
12	土師器 甕	a - b - c -		外：口辺部横ナデ、体部粗いク シ目 内：ナデ	d 粗砂粒少量混和 e 良好 f 淡黄橙	SI7埋	
13	土師器 甕	a - b - c (7.2)	5%	外：体部ヘラ削り、底部木葉痕 内：ナデ	d 粗砂粒混和 e 良好 f 外淡橙、内淡黄橙	SI7埋	



第29図 その他の遺物

Ⅲ まとめ

1. 遺構・遺物の特徴

今次調査では前述の如く、古墳時代（広義）の住居跡を10軒確認し、このうち8軒（部分的なものを含む）を調査した。これらは、古墳時代中期のSI10を除き、後期後葉⇒終末期に属するもので、未調査の2軒も該期の可能性が高い。また、住居跡どうしの重複や調査区外に延びるなどして全様を知り得たのは5軒であった。限られた情報ではあるが遺構・遺物の特徴など整理してまとめとする。

a 竪穴住居跡

平面形は、方形と基調とするものSI2・3・5・7と、長方形を基調とするものSI1・4・6とがある。

主柱穴は平面が方形のものは4本、長方形のものは2本柱で建てられている。SI4は2本柱から4本柱に建て替えたもので、竪穴の平面も長方形から方形に変更しようとしたのであるが、完全には変更されておらず、東西に長い方形である。また、SI2は建て替えに際して主柱穴を2本北壁寄りに移動しているが、竪穴の北壁は拡張されておらず、柱穴の壁の間隔が他の三方に比べて狭い。さらにSI3は、4本の主柱穴を立て替えて拡張しているが、柱穴の配置から北を除く三方に拡張したと判断される。SI6は、東西の長軸線上に2本の主柱穴を配置するが、西側柱穴のうち（東）側にもう1口の柱穴が見られた。他の2口と同じく平面が方形で、長軸線上に並び、古い柱穴であろうか？

規模は、一辺が3～6mと様々であるが、床面積が15㎡前後のものが4軒、30㎡以上が2軒であった。

壁は残存高0～30cmと様々である。一般に小形の住居跡では掘り込みの浅いものも多く見られるが、SI3のように一辺6mを超える住居跡でローム漸移層を床面とする例は少ないであろう。

壁溝はSI3・4・7の3軒に設けられており、カマド部分を除き圍繞する。

床面は、いずれも竪穴を粗掘りの後整地して貼床を施している。また、建て替えに際して床面を嵩上げしているものが多く、ほとんどの住居跡に見られた。再度にわたるものもあり、SI2・4では当初の床面と最終時の床面では10～20cm程の高低差が認められた。これらは、拡張に伴う建て替えに際してのものではない住居も見られることから、地山層の性質と居住性の関係からおこなわれた可能性が高い。

カマドは、7軒で確認し、いずれも北壁に構築されていた。なお、SI1・6・7は北壁のほぼ中央に位置するが、SI2～4はやや東寄りでありSI5もその可能性が高い。いずれも灰色粘土で築かれていたが、SI1は焚口部の構築材として4個の土師器長胴甕が使用されていた。カマドも床面の嵩上げに伴って改修されており、SI4・6・7では古いカマドの火床や袖の一部が残存していた。また、住居の廃絶時に破壊されたものか、いずれのカマドにも支脚は遺存しなかった。

いわゆる「貯蔵穴」はSI1・2・4・7に認められ、全てカマドの右（東）脇に設けられていた。SI1・4では貯蔵穴及びその周辺より土器類がまとまって出土した。

出入口の施設と推定される小穴は、SI1～4・7に認められた。

b 掘立柱建物跡

総数120口に及ぶ小穴を確認したが、建物跡として捉えられたのは僅かに4棟（柱穴計33口）である。

規模は4×2間以上（SB1）、3×2間（SB2）、2×2間（SB3）、1×1間（SB4）以上と様々である。2×2間のSB3は総柱式の可能性もあるが、大きいSB1・2はともに側柱式と判断される。

柱間は、SB1が梁行と桁行の南・北両端が2.7m（9尺）、内側2間が2.4m（8尺）、SB2は梁行・桁行と

も古いaが2.4m (8尺)、新しいbが2.3m (7.7尺)、SB3が1.6m (5.3尺)、SB4は梁行が2.1m (7尺)、桁行が2.7m (9尺)であった。

桁行(棟)方位は大形のSB1・2が13~17度東偏、逆に小形の3・4が3~8度西偏と分かれる。

量的な差はあるもののいずれの建物跡も柱掘方内より土師器・須恵器片が出土しており、おおむね古墳時代後期のものが主体を占める。したがって、これらの建物跡は竪穴住居跡群と集落を構成していたと推察される。

C 竪穴住居跡出土の金銅製耳環

SI3の西壁際の床面直上より金銅製耳環が1点出土した。一般的には後期古墳の副葬品として、横穴式石室や土坑などより頻繁に出土しているが、昨今の発掘調査成果の蓄積にともない県内の集落跡(竪穴住居跡)からの出土例も散見されるようになった。管見にふれたものは、市内では同じ砂田姥沼遺跡のⅡ区、西刑部西原遺跡13区、東谷・笹塚遺跡、瑞穂野団地遺跡、西川田町の姿川第一小南遺跡、上三川町では多功南原遺跡、西赤堀遺跡、佐野市(旧田沼町)の傾城塚遺跡、鹿沼市の宝龍内遺跡、真岡市の鶴田A遺跡、芳賀町の免の内台遺跡、那珂川町の古館遺跡などから出土している

免の内台遺跡では数次の調査により5軒から各1点で計5点、瑞穂野団地遺跡では1軒から組み合わせの異なる3点が出土しているが、他の遺跡では1~2点の出土である。尚、多功南原遺跡も3点出土したが、住居跡からは1点のみで他の2点1対は土坑墓からの出土であった。

出土した住居跡の年代は耳環の出土状態との関係もあり検討を要するが、概ね6世紀前半~8世紀前葉で、7世紀代が主体を占める。尚、古館遺跡で8世紀後半、免の内台遺跡では9世紀中葉の住居跡からの出土が報告されている。

また、出土した住居跡の規模を見ると(第30図)、本遺跡では一辺約6.2×6.4mで39.7㎡と推定される。東谷・笹塚遺跡では11.3×10.6mで120㎡と大型で、調査区内最大の規模であった。免の内台遺跡でも1軒は53.3㎡と大形であったが、9世紀代の1軒が約12.6㎡と極小の他は21.7~30.3㎡と一般的な規模である。さらに、8世紀後半代の古館遺跡の住居跡が9.7㎡と最小で、宝龍内遺跡が32.8㎡、姿川第一小南遺跡の36.6㎡などは本遺跡の例に近いものであった。

これまで、耳環は古墳の調査で目にする事が多かったことから、その所有者は集落内の有力者で大形の住居に居住していたのであろうと安易に想像していた。しかし、面積が30㎡以下の一般的な規模、あるいは時期に注意を要するが面積が9.7~15㎡程の小規模な住居の居住(利用)者も耳環を所有していたことになる。当時集落内でそれほどまでに金銅(銀貼含む)製耳環が普及していたものか疑問を感じる。あるいは、住居の規模が即居住(利用)者の力(富)を反映しているのではなく、富めるものは大・小複数の竪穴を保有していたと見ることも可能ではなからうか。

d 所謂「編物錘石」について

SI1~3、6・7より所謂「編物錘石」と見られる細長の川原石が出土しており、破損したものも含め総数は15点ほどである。第31図に示したように径の平均が4~6cm、長さ10~17cm、重量は300~700gであった。

県内の出土例を見ると、二宮町の蟹が入遺跡では古墳時代中期~平安時代にわたる28軒の住居跡より総数75点が出土し、重量は概ね300~500gに集中する。尚、75点のうち約57%は古墳後期の住居跡からの出土であり、そのうち1軒から15点がまとまって出土した。また、佐野市(旧田沼町)の寺之後遺跡では総数200点を数え、そのうち92点が1軒の住居跡からの出土であり、さらにこのうちの44点

が住居の南東隅よりまとまって出土している。重量は400g以下が全体の90%を占めている。

鹿沼市の鹿沼流通団地遺跡では28軒より総数126点が出土している。このうち、10点以上まとまって出土した住居跡が4軒あり、最も多いものは25点出土しており、この4軒はいずれも6世紀末～7世紀初頭と推定される。重量は250～650gに集中するが、出土した15点全てが700g以上の住居跡も見られた。このように、重量は本遺跡が300～700g、蟹が入遺跡が300～500g、寺之後遺跡は大部分が400g以下であるのに対し、鹿沼流通団地遺跡では250～650gが主体を占めるものの、700～1,100gの一群も存在する。長野県の恒川遺跡でも、住居により200～700gのものと、700～1,200g程のものとが報告されている。編む材料や製品により錘石の重量の使用別けがあったのであろうか？

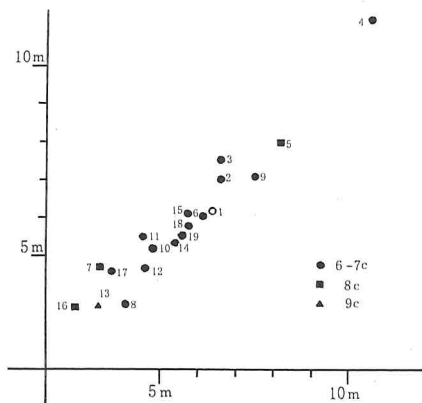
e 土地利用の変遷

今次調査区では、古墳時代中期と推定される竪穴住居跡、同後期（広義）の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、小穴、中世以降と推定される井戸跡、溝跡、土坑などの遺構を調査した。また、遺構は確認されなかったが、縄文式土器、弥生式土器の破片が出土している。今次調査の成果に近隣の調査区の成果を加味し、本遺跡における古代人の土地利用を概観する。

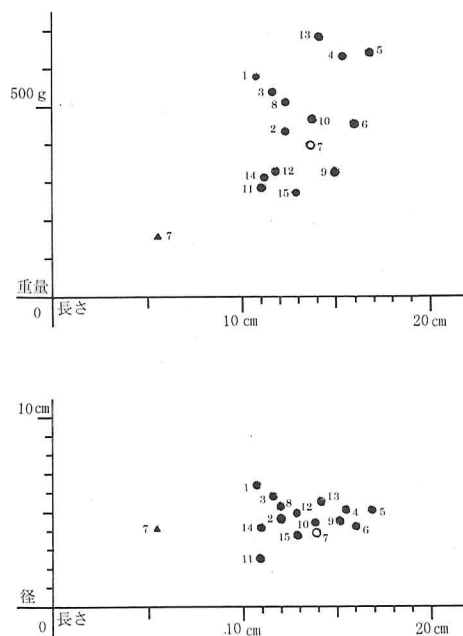
第15表 栃木県内の耳環出土住居一覧表

() = 推定値・平均値、少数第2位以下四捨五入

No.	遺跡名	所在地	遺構名	住居規模m・m ²	時期	備考
1	砂田姥沼D区	宇都宮市東谷・中島地区	SI3	(6.2) × (6.4) = (39.7)	7C	
2	砂田姥沼II区	〃 〃	SI1	7 × 6.6 = 46.2	7C	
3	西刑部西原13区	〃 〃	SI2	7.5 × 6.6 = 49.5	7C	
4	東谷・笹塚	〃 〃	SI5	11.3 × 10.6 = 119.8	7C	
5	瑞穂野団地	〃 瑞穂	N2号住	(7.95) × (8.15) = (64.8)	7C末～8C前	3点出土
6	姿川第1小	〃 暮田・西川田町	HT-57	6 × 6.1 = 36.6	7C	
7	多功南原	上三川町多功	SI675	(4.7) × (3.4) = (16.0)	8C前	
8	西赤堀	〃 西汗	SI466	3.8 × 4.08 = 15.5	7C中～後	埋土
9	免の内台(試)	芳賀町大字下高根沢	SI108	7.1 × 7.5 = 53.3	6C前～中	埋土
10	〃(〃)	〃 〃	SI118	5.1 × 4.8 = 24.5	7C第3	
11	〃(〃)	〃 〃	SI166	5.5 × 5.5 = 30.3	?	
12	〃(本)	〃 〃	32号住	4.6 × 4.6 = 21.2	7C後	
13	〃(〃)	〃 〃	81号住	3.7 × 3.4 = 12.6	9C中	銀鍍金
14	鶴田A I	真岡市鶴田	SI23	5.41 × 5.32 = 28.8	7C中	
15	鶴田A II	〃	SI01	6.1 × 5.7 = 34.8	7C第3	
16	古館	那珂川町馬頭	SI04	3.6 × 2.7 = 9.7	8C後半	
17	〃	〃 〃	SI243	4.6 × 3.78 = 17.4	7C前	
18	宝籠内(15年度)	鹿沼市上殿町	SI19	(5.8) × 5.7 = (33.1)	7C前	
19	傾城塚(18年度)	佐野市吉水	SI14	5.6 × 5.6 = 31.4	7C	



第30図 耳環出土住居跡の規模比較図



第31図 調査区出土錘石の大きさ・重量比較図

縄文時代 調査区内で遺構は確認されなかったが、中期の土器小片と黒曜石の小片が古墳時代の竪穴住居跡内より出土しており、何らかの土地利用が知られる。

弥生時代 この時期も遺構は認められなかったが後期の土器片が出土しており近隣に住居跡の存在が推察される。

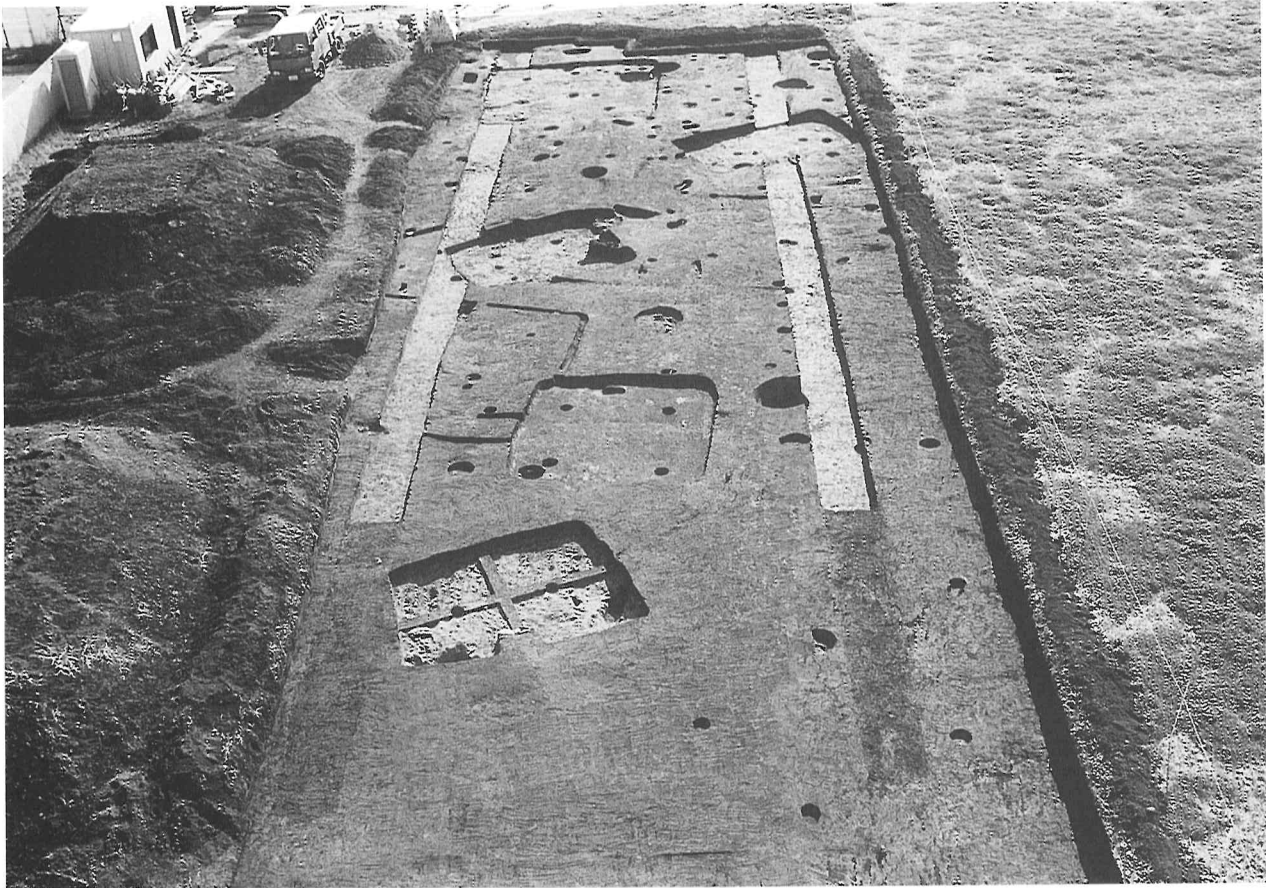
古墳時代 調査区内では中期の竪穴住居跡は北東隅と推定されるものを確認したのみである。しかし、同後期の竪穴住居跡や土坑、小穴、中世以降の井戸跡や土坑、溝跡などから広範囲に該期の土器片が出土しており、周辺に確りした集落跡が存在すると推察される。

後期には後葉～終末期（奈良時代直前）の集落が営まれる。住居跡どうしや掘立柱建物跡との重複が見られ、密度の高い集落と推定される。また、調査区内における遺構の分布状況を見ると、竪穴住居跡は東と南に向かって密に分布するが、逆に北西に向かって分布が疎になる傾向が認められる。尚、今次調査区より数メートル東方は、県埋蔵文化財センターの試掘調査により埋蔵文化財包蔵地の地区外と確認されているが、これは集落跡の分布が急に止まったのではなく、後世に耕作等に伴う削平によって失われたもので、本来はさらに東方に広がっていたと推考する。また、該期の遺構としては掘立柱建物跡、円形土坑なども存在した。

中・近世以降 この時期と推定した遺構は井戸跡、土坑、溝跡などである。各遺構より古墳時代中・後期の遺物が出土し、唯一溝から近世の磁器片が出土したのみで、各遺構の属する時期は明確にし難いが埋積土の状態・質感などから判断した。

参考文献

- 岩上照朗・石橋知明 『宇都宮市瑞穂野団地遺跡』 宇都宮市教育委員会埋蔵文化財報告書第4集 昭和53年 宇都宮市瑞穂野土地区画整理組合・宇都宮市教育委員会
- 山口耕一・及川真紀・篠原陸美 (財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『多功南原遺跡(奈良・平安時代編 第1分冊)』 栃木県埋蔵文化財調査報告第222集 平成11年 栃木県教育委員会
- 磯貝 厚・木村友則 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 『鶴田A遺跡Ⅰ』 栃木県埋蔵文化財調査報告第253集 平成13年 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 進藤敏雄 (財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 『鶴田A遺跡Ⅱ』 栃木県埋蔵文化財調査報告第243集 平成13年 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 石川 均 他 『免の内台遺跡調査概報』 昭和60年 栃木県芳賀町教育委員会
- 岩淵一夫・植木茂雄 (財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 『免の内台遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第134集 平成5年 栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 佐野市教育委員会・技研測量設計㈱ 『傾城塚遺跡現地説明会資料』 平成19年 佐野市教育委員会
- 水野順敏他 『蟹が入遺跡』 日本窯業史研究所報告第33冊 平成元年 日本窯業史研究所
- 上野川 勝・茂木孝行 『寺之後遺跡』 平成13年 田沼町教育委員会
- 初山孝行 (財)栃木県文化振興事業団 『鹿沼流通団地遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第121集 平成3年 栃木県教育委員会
- 新井 潔・三輪孝幸 『宝龍内遺跡』 鹿沼市埋蔵文化財報告書第18集 平成17年 鹿沼市教育委員会



A. 調査区全景 (北より)



B. 調査区全景 (南西より)



A. SI4カマド (南より)



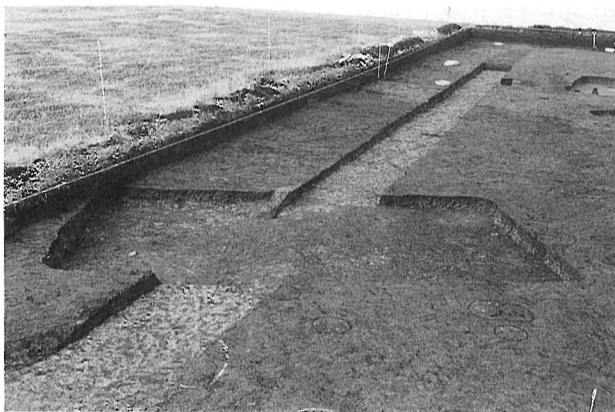
B. SI4貯蔵穴 (南より)



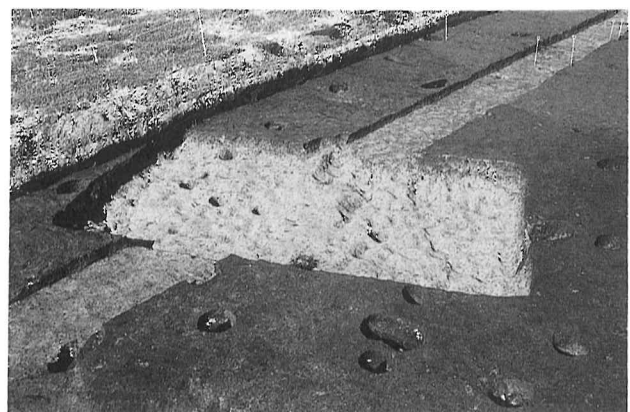
C. SI4カマド横断面 (南より)



D. SI4カマド掘方 (南より)



E. SI6 (南より)



F. SI6掘方 (南より)



G. SI6カマド (南より)



H. SI6カマド掘方 (南より)



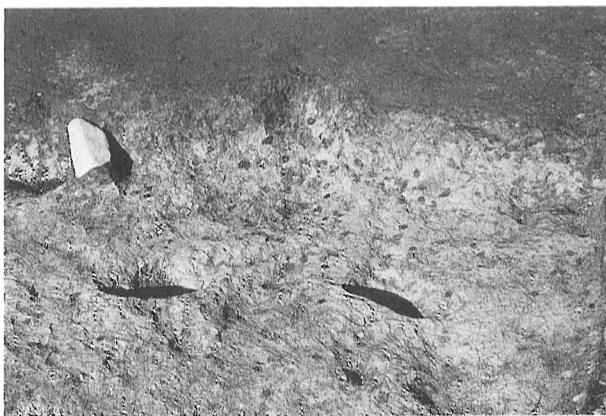
A. SI7 (南より)



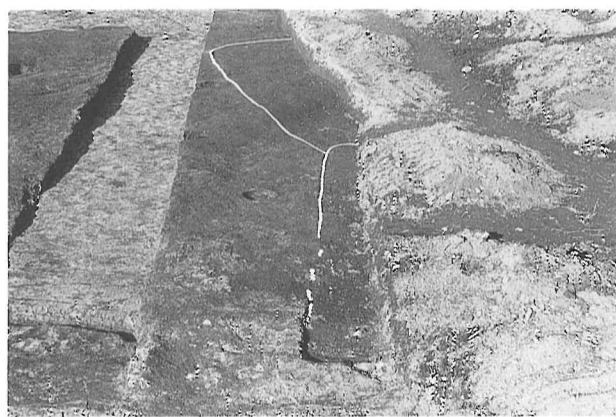
B. SI7PT2の柱当り (南より)



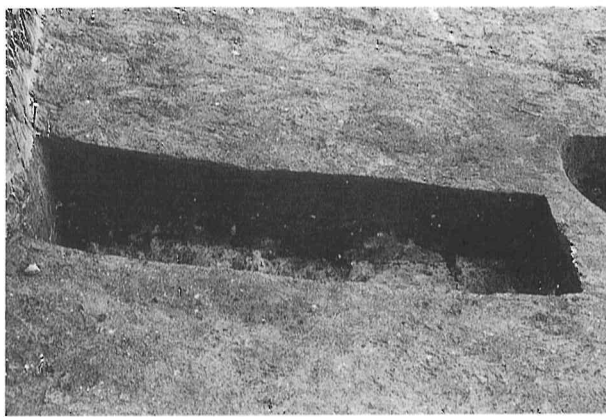
C. SI7カマド (南より)



D. SI7カマド掘方 (南より)



E. SI8 (上)・SI9 (下、南より)



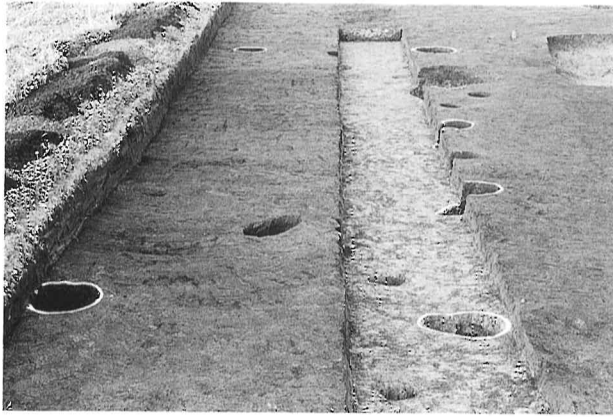
F. SI8土層 (北より)



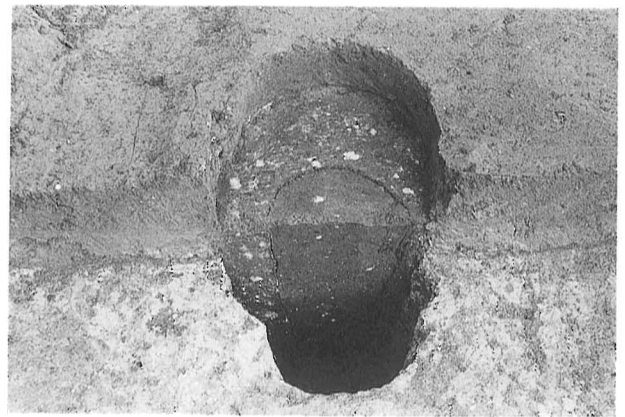
G. SI5 (南東より)



H. SI10 (東より)



A. SB1 (南より)



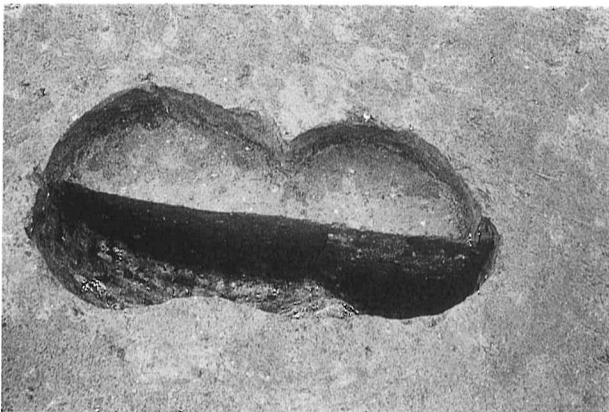
B. SB1P14土層 (西より)



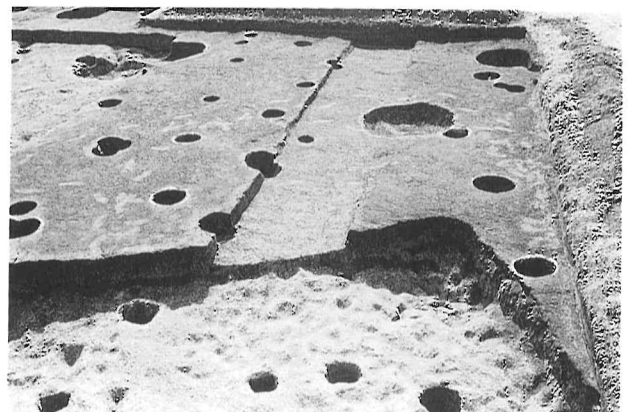
C. SB2a・b (北より)



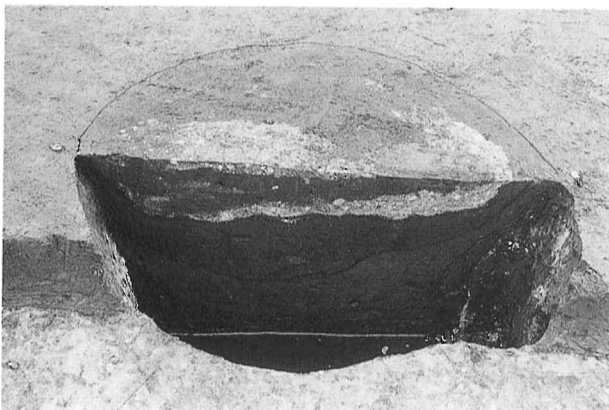
D. SB2P56土層 (北より)



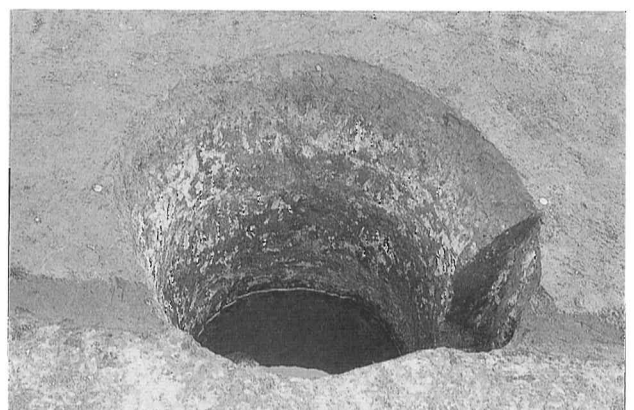
E. SB2bP94・SB2aP95土層 (南西より)



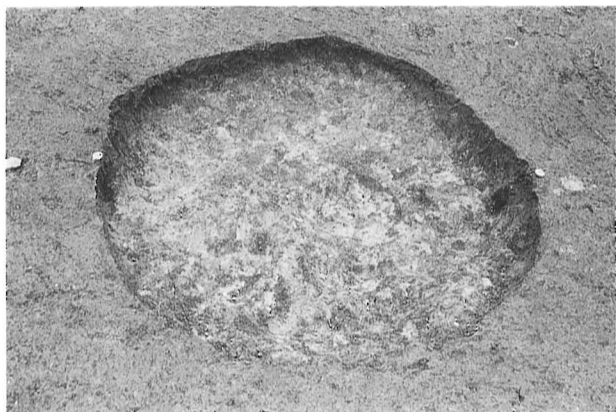
F. SB3 (北より)



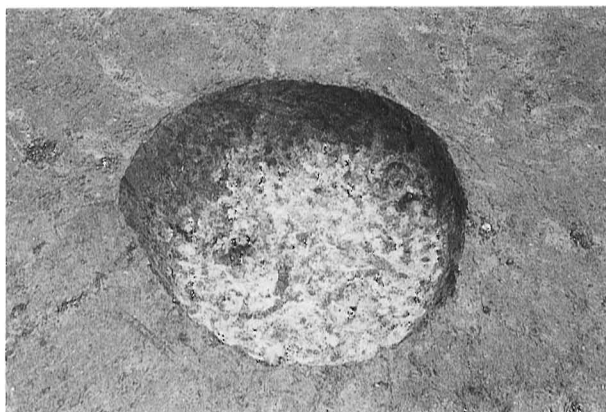
G. SE1土層 (西より)



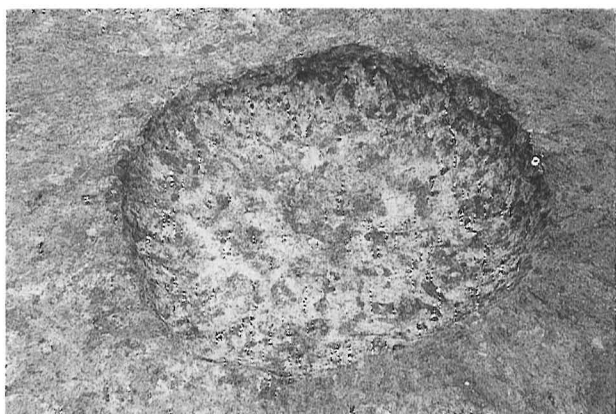
H. SE1 (西より)



A. SK1 (西より)



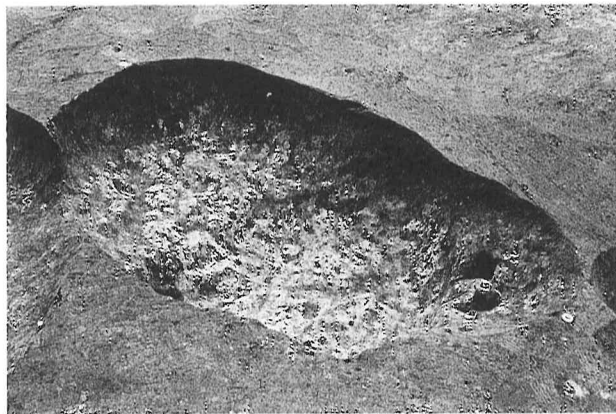
B. SK2 (北より)



C. SK3 (北より)



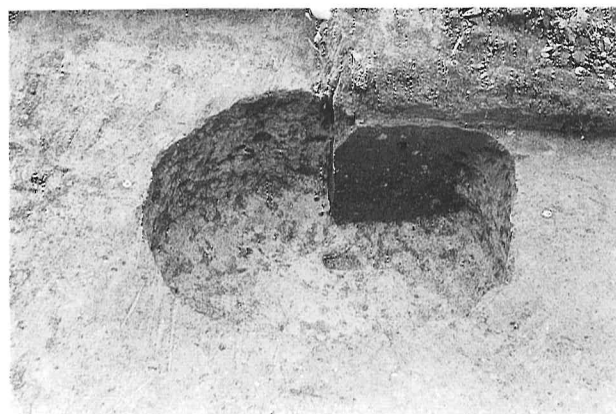
D. SK4 (東より)



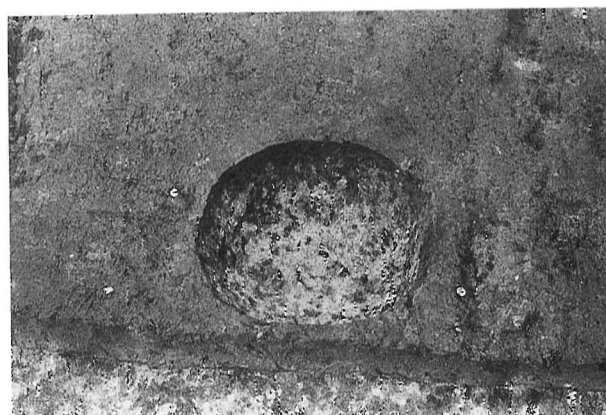
E. SK5 (北より)



F. SK7 (左)・SK8 (右、北より)

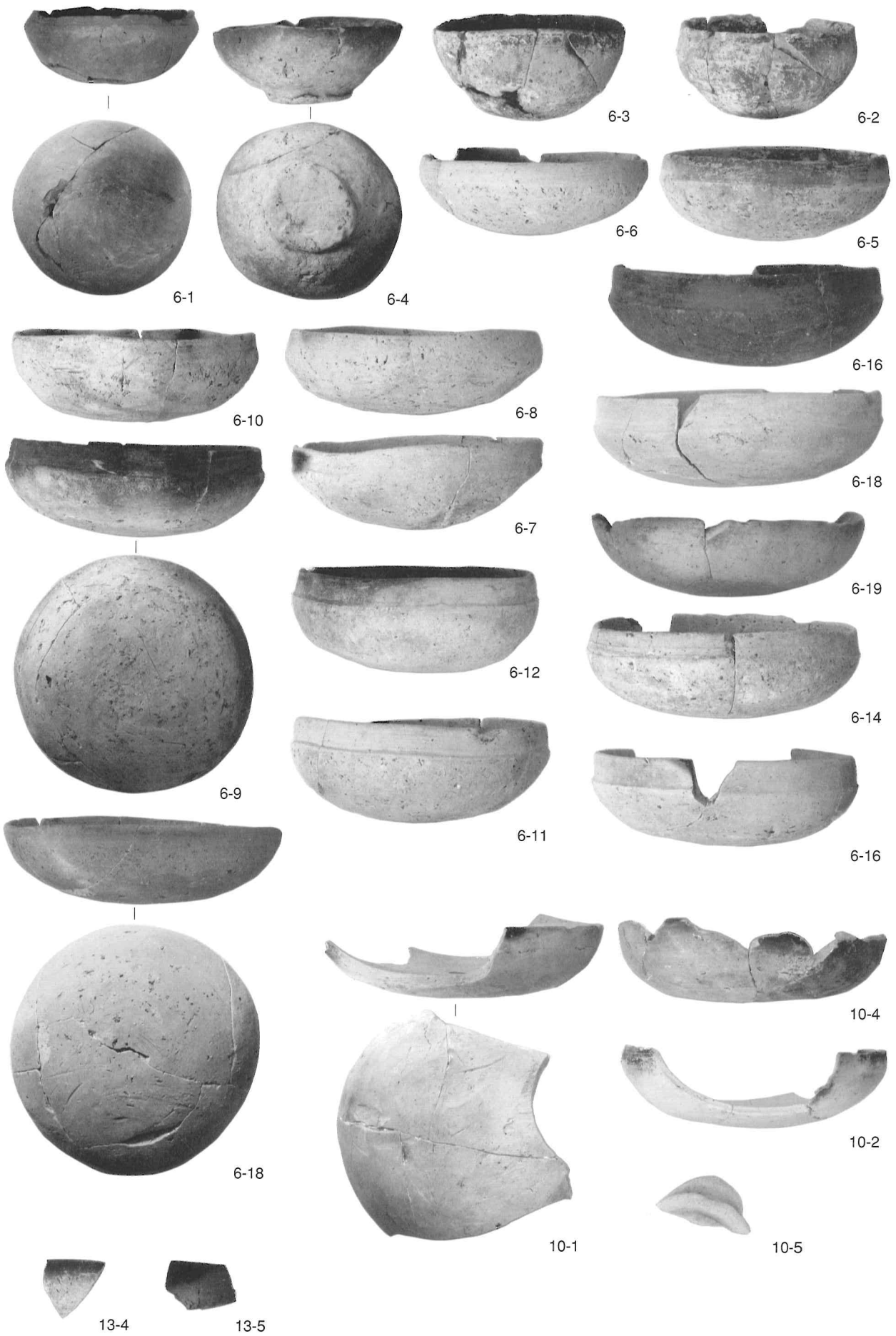


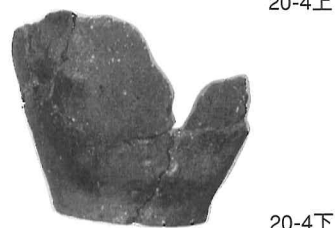
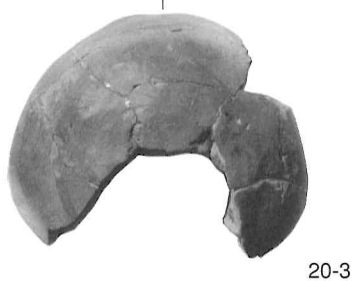
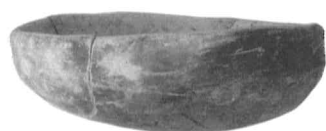
G. SK10 (北より)



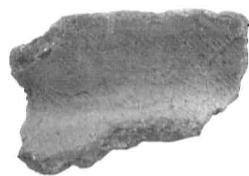
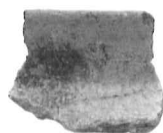
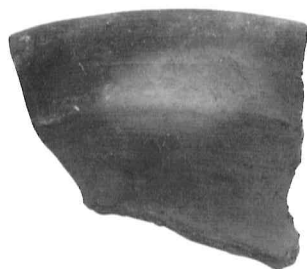
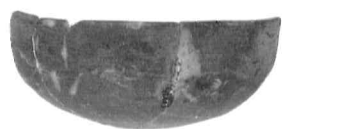
H. SK13 (東より)

图版 8





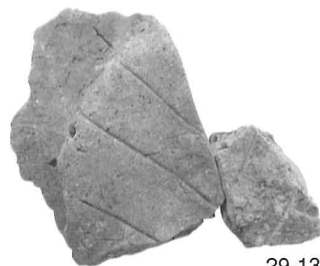
20-4下底



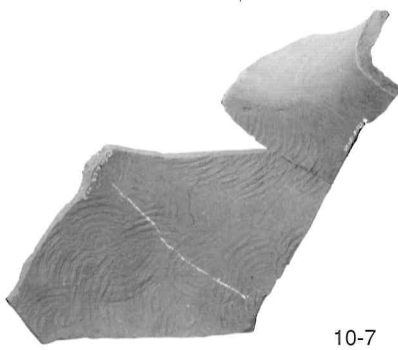
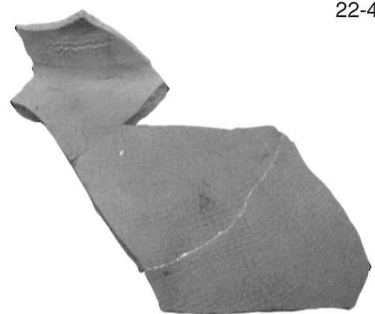
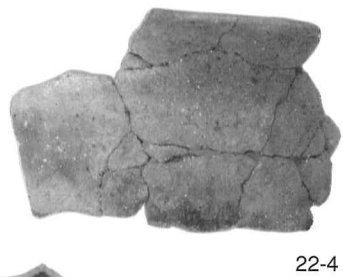
29-9



29-5



29-13





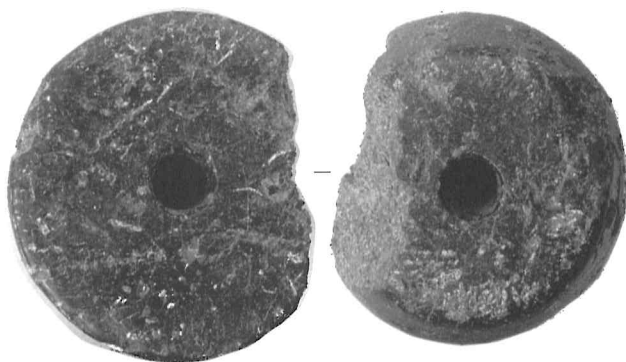
I



24-3 (原寸)



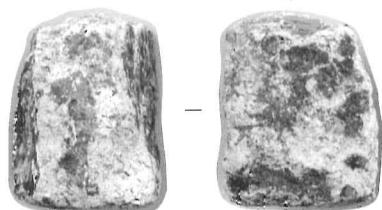
24-2 (原寸)



24-4 (原寸)



24-5 (1/2)



24-6 (1/2)



SI-3・6出土錘石 (1/4)



SI-7出土錘石 (1/4)

報告書抄録

ふりがな	すなたうばぬまいせき							
書名	砂田姥沼遺跡 (D区)							
副書名								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第67集							
編著者名	水野順敏・柏崎広伸							
編集機関	株式会社 日本窯業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL0287-93-0711							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 TEL028-632-2764							
発行年月日	2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すなたうばぬまいせき 砂田姥沼遺跡	とうや なかじまとちくかくせいり 東谷・中島土地区画整理 じぎょうち がいく かぐち 事業地51街区5画地	9201	4356	36° 29' 29"	139° 54' 56"	2007. 10. 15~ 2007. 11. 19	600㎡	土地区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
砂田姥沼遺跡	包蔵地	縄文・弥生時代	なし		土器片		古墳時代後期の密度の高い集落跡で、掘立柱建物跡を伴う。	
	集落	古墳時代(中・後期)	竪穴住居跡	10軒	土師器、須恵器、金銅製耳環、編物錘石、砥石、紡錘車等			
			掘立柱建物跡	4棟				
		中世・近世以降及び時期不明	小穴	85口				
			土坑	9基				
			土坑	3基	磁器片			
			溝跡	1条				
			井戸跡	1基				

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書 第67集

砂田姥沼遺跡 (D区)

独立行政法人都市再生機構による東谷・中島地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年3月31日 発行

編 集 株式会社 日本窯業史研究所
〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL0287-93-0711
発 行 宇都宮市教育委員会
〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 TEL028-632-2764
印刷・製本 榊松井ピ・テ・オ・印刷